

松山市埋蔵文化財調査年報 V

平成 4 年度

1993

松山市教育委員会
財松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市埋蔵文化財調査年報 V

平成 4 年度

1993

松山市教育委員会
財松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版 1 弥生時代の船（弥生後期・檜味高木遺跡 3次調査地）



卷頭図版2 横穴式石室と箱式石棺（6世紀・影浦谷古墳）



卷頭図版 3 横穴式石室（6世紀・東山古墳群 6次調査地）



卷頭図版4 官衙遺跡「門」(古代・来住廃寺19次調査地)



卷頭図版 5 建物群（古代～中世・来住庵寺21次調査地）



卷頭図版 6 墨書き土器「時」(古代・南久米町遺跡)



卷頭圖版 7 「湖州六花鏡」(13世紀・古熊遺跡 8次調査地)

序

松山市には貴重な文化遺産が数多く残っています。財團法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターでは、これらの文化財の啓蒙普及活動を進める一方、止むを得ず開発事業に伴って遺跡が破壊される場合には、事前に発掘調査を実施して恒久的な記録保存に努めています。

この報告書は、平成4年度に財團法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが松山市域において民間開発・公共事業を対象として実施した発掘調査の概要報告と、松山市考古館が同年度内に行った体験学習セミナーや展示会などの教育普及活動の概要をまとめた年次報告です。

本年も、古くは縄文時代晚期から新しくは中近世に至る各時代の遺構・遺物を発見することができました。特に、6世紀後半から7世紀にかけての大甕を含む多量の須恵器を出土した来住町遺跡4次調査地や奈良時代の堀立柱建物跡柱穴内から、「時」と書かれた墨書き土師皿を検出した南久米町遺跡、更には縄文時代晚期の土墳墓や古墳時代後期の石室を検出した東山古墳群6次調査地など特筆すべき遺跡も多く、20箇所にも及ぶ調査地からは貴重な成果を挙げることができました。

これもひとえに、関係各位のひとかたならぬご協力とご理解のたまものと感謝し、心より厚くお礼申し上げますとともに、今後ともなお一層のご理解とご指導、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

本書が松山市民をはじめ一人でも多くの方々に、埋蔵文化財に対する知識の向上と調査研究のための資料としてご活用いただければ幸いです。

平成5年10月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 田 中 誠 一

例　　言

- 本書は、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成4年4月1日から同5年3月31日までに実施した主な発掘調査の概要を収録した年次報告である。
- 確認調査及び本格調査については、本書末尾の一覧表・付図にまとめた。
- 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の構造写真を大西朋子が、その他の写真を各調査担当者が撮影した。
- 各調査の報告は、調査担当者が執筆することを原則とした。なお、編集及び調整は、梅木謙一が行った。
- 遺構のうち表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例を参考にした。

S A = 横列, S B = 建物, S D = 溝, S E = 井戸,
S K = 土壌, S R = 自然流路, S X = その他の遺構

- 調査組織は、次のとおりである。

◆調査・刊行主体〔平成5年8月1日現在〕

松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷

生涯教育部 部長 渡辺 和彦

次長 三好 俊彦

文化教育課 課長 松平 泰定

飼松山市生涯学習振興財團 理事長 田中 誠一

事務局長 渡辺 和彦

事務局次長 一色 正士

埋蔵文化財センター 所長 河口 雄三

次長 田所 延行

調査係長 田城 武志

調査主任 栗田 正芳（文化教育課職員）

調査員 栗田茂敏・梅木謙一・相原浩二・宮内慎一・

高尾和長・河野史知・山本健一・水本光児・

武正良浩・橋本雄一・相原秀仁・加島次郎・

池田 学・松村 淳・大森一成・小笠原善治・

大西朋子

- 整理作業等の協力者は、次のとおりである。（敬称略）

水口あい／岡根なおみ／高橋 恒／原田英則／岩本 審／志賀夏行／田丸竜馬／服部和広／宮藤和人／鎌田謙二／山邊進也／山本 圭／猪森しげ子／上野山志保／生鷹千代／

岡市美紀／大西陽子／岡田美紀／萩野ちよみ／岡本邦栄／金子育代／上西真弓／宮田里美／黒田令子／古角優子／白井あさ子／新出寿美子／闇 正子／仙波千秋／仙波ミリ子／高尾久子／多知川富美子／谷口よし子／徳田弘子／西川千秋／兵頭千恵／松本美知子／松本美代子／松山桂子／丸山美和／三木和代／森田利恵／矢野久子／山下満佐子／吉井信枝／好光明日香／渡部英子／渡部美美 ほか

8. ご指導・ご協力をいただいた先生方は、次のとおりである。(敬称略)

工渠善通(奈良国立文化財研究所)／上原真人(同研究所)／肥塙隆保(同研究所)／田辺昭三(京都造形芸術大学教授)／定森秀夫(財、京都文化博物館)／内田俊秀(京都芸術短期大学助教授)／高橋 学(立命館大学助教授)／外山秀一(皇學館大学講師)／橋本裕行(奈良県教育委員会事務局)／村上恭通(名古屋大学助手)／東 潮(徳島大学助教授)／下條信行(愛媛大学教授)／松原弘宣(同教授)／平井幸弘(同助教授)／宮本一夫(同助教授)／田崎博之(同助教授) ほか

9. ご指導・ご協力をいただいた機関は、次のとおりである。

奈良国立文化財研究所／古環境研究所／勧元興寺文化財研究所／勧京都市埋蔵文化財研究所／福岡市埋蔵文化財センター／健山口県埋蔵文化財センター ほか

平成4年度申請 埋蔵文化財調査状況

種 別	申請数	試 増	立会ほか	本格対象件数	本格対象面積 m ²	本格実施件数	実施面積m ²
民 間	108	99	9	7	9,912	18	18,560
公 共	21	8	13	12	184,754	6	39,399
計	129	107	22	26	194,666	24	57,959

本文目次

松山市埋蔵文化財調査概要

影浦谷古墳	2
野津子山遺跡	6
北斎院地内遺跡—2次調査地—	8
古照遺跡—7次調査地—	12
古照遺跡—8次調査地—	16
古照遺跡—9次調査地—	20
道後今市遺跡—9次調査地—	24
樽味高木遺跡—3次調査地—	28
樽味四反地遺跡—2次調査地—	34
中村経田遺跡	38
東山古墳群—5次調査地—	42
東山古墳群—6次調査地—	46
北久米町巣敷遺跡	50
南久米町遺跡	54
南久米町遺跡—2次調査地—	58
南久米町遺跡—3次調査地—	62
来住廃寺—18次調査地—	66
来住廃寺—19次調査地—	70
来住廃寺—20次調査地—	76
来住廃寺—21次調査地—	80
来住町遺跡—4次調査地—	86
鷹子新畝遺跡—2次調査地—	90
久米塙田森元遺跡—3次調査地—	94
松山市埋蔵文化財調査関係資料	
平成4年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧	98
平成4年度 松山市埋蔵文化財本格調査一覧	102
出土遺物整理事業・報告書作成事業	104
平成4年度 啓蒙普及事業	108
1. 展示活動 2. 教育普及活動 3. 広報・出版活動 4. 収集・保管	

卷頭図版目次

- 1 弥生時代の船（弥生後期・櫛味高木遺跡 3次調査地）
- 2 横穴式石室と箱式石棺（6世紀・影浦谷古墳）
- 3 横穴式石室（6世紀・東山古墳群 6次調査地）
- 4 宮衙遺跡「門」（古代・米住庵寺19次調査地）
- 5 建物群（古代～中世・米住庵寺21次調査地）
- 6 墓書土器「時」（古代・南久米町遺跡）
- 7 「湖州六花鏡」（13世紀・古照遺跡 8次調査地）

挿図・写真目次

影浦谷古墳

- 図1 調査位置図、写真1 1号墳横穴式石室礫床面の検出（南西より）、写真2 1号墳横穴式石室（南より）、写真3 2号墳A・B主体部・箱式石棺（西上方より）、写真4 3号墳石室内遺物出土状況（北より）

野津子山遺跡

- 図1 調査位置図、図2 遺構配置図

北斎院地内遺跡 2次調査地

- 図1 調査位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、写真1 調査区南側完掘状況（北より）、写真2 土壌萬1検出状況（南東より）

古照遺跡 7次調査地

- 図1 調査位置図、図2 7・8・9次調査位置図、図3 A地区第IV-a、V、VI層遺構配置図、図4 B地区遺構配置図、図5 A地区出土遺物実測図、図6 B地区出土遺物実測図

古照遺跡 8次調査地

- 図1 調査位置図、図2 S D 1出土遺物実測図、写真1 下層調査遺構検出状況（東より）

古照遺跡 9次調査地

- 図1 調査位置図、図2 上層調査出土遺物測量図、図3 上層調査出土遺物実測図、図4 8次調査地出土遺物実測図、写真1 下層調査遺構検出状況（東より）

道後今市遺跡 9次調査地

- 図1 調査位置図、図2 基本層序、図3 遺構配置図、図4 遺構面3出土遺物実測図、写真1 出土遺物、写真2 調査地全景（北より）、写真3 鋤溝痕跡検出状況（西より）、写真4 人と牛の足跡（北より）

椎味高木遺跡 3次調査地

図1 調査地位置図、図2 基本層位図、図3 遺構配置図、図4 SB1測量図、図5 SB1出土遺物実測図、図6 線刻画(絵画)土器実測図、写真1 完掘状況(西より)、写真2 挖立①検出状況(南より)、写真3 SB1遺物出土状況(北東より)

椎味四反地遺跡 2次調査地

図1 調査地位置図、図2 基本層位図、図3 遺構配置図、図4 SB1(上)、SB2(下)測量図、写真1 完掘状況(北より)、写真2 SB1検出状況(東より)、写真3 SB2遺物出土状況(東より)

中村経田遺跡

図1 調査地位置図、図2 基本層位図、図3 集石遺構測量図、図4 集石遺構出土遺物実測図、写真1 調査地全景(西より)、写真2 集石遺構検出状況(東より)

東山古墳群 5次調査地

図1 調査地位置図、図2 調査地測量図、図3 19号墳石室測量図、写真1 19号墳石室内検出状況(北東より)、写真2 T4遺物出土状況(南より)

東山古墳群 6次調査地

図1 調査地位置図、図2 24号墳石室測量図、図3 出土遺物実測図、写真1 1区遺構検出状況(北より)、写真2 2区遺構検出状況(西より)

北久米町星敷遺跡

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、写真1 遺構検出状況(北西より)、写真2 SK2検出状況(北より)

南久米町遺跡

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、写真1 遺構検出状況(北より)、写真2 墨書き土器皿出土状況(南より)

南久米町遺跡 2次調査地

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、写真1 調査区南部遺構検出状況(南より)、写真2 挖立柱建物1号柱穴内「開元通寶」出土状況(南より)

南久米町遺跡 3次調査地

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、写真1 調査区南部遺構検出状況(北東より)、写真2 三足鍋出土状況(南より)

来住庵寺18次調査地

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 基本層位図、図4 包含層出土遺物実測図、写真1 調査地全景(南東より)、写真2 遺物出土状況(①②第III層、③④第IV層)

来住庵寺19次調査地

図1 調査地位置図、図2 調査地周囲の遺構配置図、図3 基本層位図、図4 門測量

図、図5 遺構配置図、図6 出土遺物実測図、写真1～4 区調査区全景(南西より)、写真2 SB—4(門)検出状況(南より)

来住庵寺20次調査地

図1 調査地位置図、図2 基本層位図、図3 遺構配置図、図4 出土遺物実測図、写真1 調査区全景(北より)、写真2 遺物出土状況(北東より)

来住庵寺21次調査地

図1 調査地位置図、図2 基本層位図、図3 遺構配置図(1)、図4 遺構配置図(2)、図5 出土遺物実測図、写真1 T—2全景(北上方より)検出建物群、写真2 T—2下層遺構SB—1検出状況(西より)

来住町遺跡4次調査地

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、写真1 出土遺物、写真2 須恵器 瓢出土状況(東南より)、写真3 調査作業風景(西より)

鷹子新畑遺跡2次調査地

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 出土遺物実測図、図4 SB 2測量図、図5 SB 2出土遺物実測図

久米塙田森元遺跡3次調査地

図1 調査地位置図、図2 遺構配置図、図3 SR 1出土遺物実測図、写真1 調査地全景(東より)、写真2 調査地西部(西より)、写真3 SR 1出土木簡

啓蒙普及事業

写真1 発掘速報展「むかし・昔のまつやまを掘る」、写真2 夏休み体験学習セミナー「縄文土器をつくろう」、写真3 遺跡めぐり「むかし・昔のまつやまを歩く」

カゲウラダニ 影浦谷古墳

所 在 地 松山市山越 3 丁目480外
期 間 平成 4 年 4 月 1 日～
平成 5 年 3 月 31 日
面 積 26,959m²
担 当 栗田（茂）・大森



図1 調査地位置図

経過 影浦谷古墳は、松山平野の北東部を限る高縄山系の南西麓にあたる丘陵上、標高40～70mに位置し、松山市山越、姫原の両町にまたがって分布している。古墳の所在する丘陵は「姫原古墳群」、「姫原遺物包含地」といった周知の包蔵地に含まれており、その南方に文京遺跡に代表される弥生時代から古墳時代の大規模遺跡群、道後城北遺跡群をひかえ、また西方の眼下には、平野北部を東西幅2km、南北長7kmにわたって縱走する沖積低地がひろがっている。この低地部の標高は17～19mであり、比高差約20～50mの丘陵稜線上に古墳が立地していることになる。丘陵上からの眺望は、平野北部から西部を経て南部にまで開け、北部の堀江・和氣から南部の松前・伊予市の海岸線までを一望のもとにすることができる。

調査は、松山市の計画した松山市立清水小学校の分離新設校建設に伴う事前調査として行われたが、これに先立つ平成3年12月から平成4年2月の間に実施された試掘調査の結果、用地の3箇所において古墳の存在が認められたため、これらの部分が本格調査対象となった。

造構・遺物 検出された古墳は3基、5主体部である。調査地は柏櫛類を主体とする果樹園として利用されていた丘陵で、大きくみると北西方向に突き出した2本の尾根と、これらの尾根に挟まれ、北西方向に開けた鞍部から成り立っている。古墳はこの2本の尾根のうち南方の尾根上で1基、北方の尾根上で2基検出された。前者を1号墳、後者2基を2号墳・3号墳としているが、いずれも破壊が大きく進行しており、確実な墳丘形態や規模を知ることはできない。ただ、1号墳は埴輪の出土状況、封土の残存状況から、直径15m程度の円墳であろうと推定している。

1号墳は主軸を東北東にとり、西南西に開口する横穴式石室を主体部とし、その規模は玄室長4.4m、最大幅2.5m、残存最大高1.8mを測る。玄門部に明確な袖のような張り出しを持たない。閉塞施設や、羨道については不明であるが、造営された斜面の状況からみて羨道といえるような施設を持っていたものとは考え難い。床面には拳大、或いはそれ以下の円礫が敷きつめられ、さらにその面を非常に精製された茶褐色粘土が約20cmの厚さで覆っている。遺物は砾床面上で検出されており、主なものでは須恵器短頸壺、直刀・鐵などの鉄製武具類、

刀子・鋤先などの鉄製農工具類、馬具、玉類などがある。また、主体部背後の埴丘裾部の3箇所の窪みに溜ったような状況で埴輪の出土がみられた。これらの埴輪は円筒埴輪を主としているが、数点の盾形埴輪片も出土している。この盾形埴輪の盾部前面部にはなんらの意匠も施されておらずこの種のものとしては最終末のものと考えられる。石室内出土の短頸壺やこれらの埴輪から6世紀後葉～末の古墳である。

2号墳は横穴式石室、小竪穴石室、箱式石棺といった3基の主体部を持っており、順にA主体部、B主体部、C主体部としている。前二者は標高55mの丘陵稜線上で主軸を東北東にとり、並列した状態で検出されたが、ほぼ全壙に近く、石室基底面に近い部分をかろうじて残すのみであった。その計画的な配置から、この2石室は同時期構築と判断している。A主体部は、玄室長3.2m、幅1.8mで、やはりこの石室も羨道を持たず、段を降りて玄室内へ進入する構造になっている。礫床面上、奥壁部に須恵器類が配され、入り口寄りの右側壁部で鐵鎌、刀子などの鉄器類が検出された。これらの須恵器から、6世紀中頃から後半の古墳である。B主体部は 2×0.8 mの小竪穴石室で、土器類の出土はみなかったが、玉を多く出土している。玉類の総計は143点、うち土製丸玉が131点、ガラス小玉4点、銅製小玉1点、碧玉製管玉7点で、東西に長い石室の東小口直近から60cmの間に集中して検出された。C主体部とした箱式石棺はA主体開口部の西方2.5mのA主体主軸延長線上にあって、これを直交して切るような位置関係になる。天井石のほとんどは既に失われ、遺物も皆無であった。

3号墳は、2号墳と同一丘陵上にあって、2号墳の南東40m、稜線沿いに2号墳をさらに約9m登った標高64mの地点で検出された。長さ2.9m、幅1.3mの玄室規模を持ち、南西方向に開口する横穴式石室であるが、これもほとんど全壙に近く、玄室床面のみが残存している状態といってよい。蓋坏、短頸壺などの須恵器類のほかに、耳環4点の出土をみている。7世紀前半期の古墳である。

小結 今回調査が行われた、山越・姫原地区の丘陵部は松山市により「姫原古墳群」として指定された周知の包蔵地にあたってはいるものの、この地域内における古墳の発掘調査は未だかつて行われたことがなく、その実態はよく知られておらず、この調査が事実上この古墳群内における初めての知見となった。これら後期古墳の横穴式石室に共通する特徴は、比較的小ぶりな塊石をもって構築され、明確な羨道を持たないことがある。このような特徴を持つ石室は、松山平野全城の特に小規模な石室に採用されることが多いことは知られていたが、今回調査された6世紀後半期の1号墳のように、当地では大型石室の部類に属するものにも採用されていることがわかった。整備された羨道を有する石室の成立は、7世紀前半以降の大規模石材を用いた畿内型石室の導入まではなかったものとみてよからう。6世紀前半期の畿内型の片袖型横穴式石室を持つ松山市桑原町三島神社古墳の例などは、その墳形が前方後円墳であることも含めてむしろ特殊な例として考えなければなるまい。

〔文献〕『影浦谷古墳』松山市教育委員会・鰐松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1993



写真1 1号墳横穴式石室礫床面の検出（南西より）



写真2 1号墳横穴式石室（南より）



写真3 2号墳A・B主体部、箱式石棺（西上方より）



写真4 3号墳石室内遺物出土状況（北より）

ノツコヤマ 野津子山遺跡

所 在 地 松山市みどりヶ丘249番地
期 間 平成4年3月2日～
同年4月30日
面 積 643m²
担 当 梅木・武正



図1 調査位置図

経過 調査地は、衣山弥生遺跡・衣山古墳群B（松山市指定埋蔵文化財包蔵地No19）内にある丘陵地帯である。調査地は標高18m前後で東方に堀江から北条に渡る海岸線を望み、西方に古くからの海上交通の要所である三津浜を眺望できる。調査地の北東400mには、久万ノ台古墳群（現愛媛県立西高等学校を含む）、北1.3kmには埴輪列をもち前方後円墳の可能性もある船ヶ谷向山古墳、南南西1.2kmには御産所櫛現山遺跡、また南1.4kmには前方後円墳（全長30m）の朝日谷2号墳、南東950mには前方後円墳（全長40m）である永塚古墳などがあり、松山平野における古墳時代墓域の中核をなす地域である。今回、包蔵地内における観光物産センター建設（約50,000m²）に先立ち、試掘調査を実施した。この結果、遺構を検出すると共に土師器片、須恵器片が出土した。協議の結果、試掘結果により本格調査の要ありと認められた部分（643m²）について速やかに本格調査を実施するとの合意に達し、事前発掘調査を行うことになった。

遺構・遺物 基本層位は、第I層表土（土壤改良土）、第II層灰色土（旧耕作土）、第III層淡黄色土である。第III層淡黄色土は無遺物層で、地山と呼ばれるものである。遺構は、第III層上面での検出である。調査区の中にもかなりの果樹木の掘り込み痕が確認され、いわゆる近現代の遺構とそうでないものを丹念に区別しながら調査を進めた。その結果、近世以前の土壤状遺構を7基検出した。また、遺構内及び地山直上から須恵器の壊身片、須恵器片を数点検出した。

小結 今回の調査では、近世以前の集落関連遺構を確認した。周辺地では、多数の古墳が確認されているが、当該地内では、古墳に関する資料は検出できなかった。しかしながら、散布的とはいって古代の遺物を採取できることは、かつて当該地に遺跡が存在していたことを示唆するものであるといえる。なお、本調査の詳細は報告書にて行うものとする。

〔文献〕 梅木謙一・宮内慎一 1993「山越・久万ノ台の遺跡」松山市教育委員会・鈴松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター

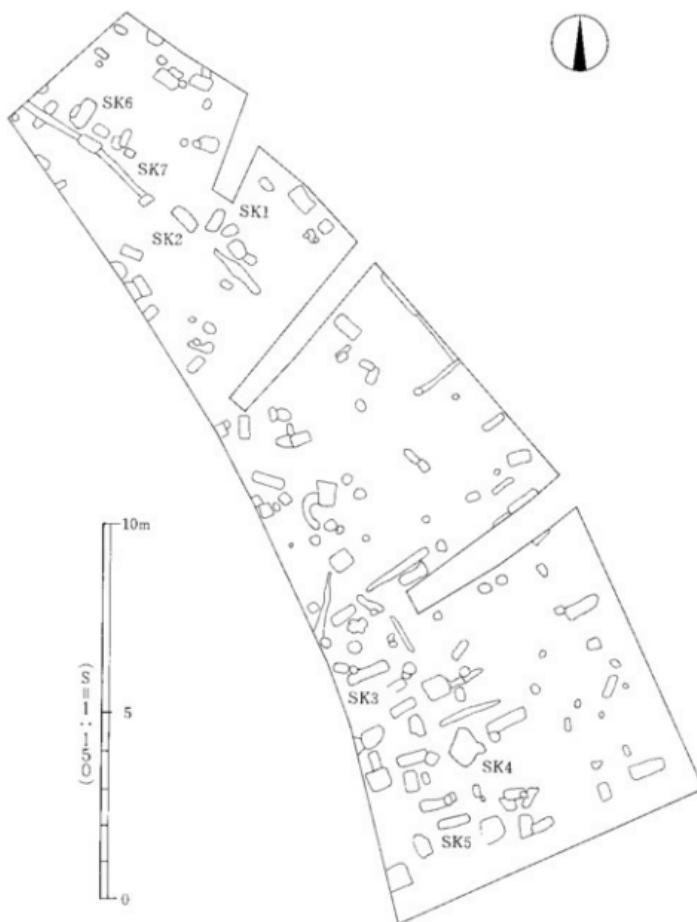


図2 遺構配置図

キタ サ ャ ジ ナイ
北斎院地内遺跡 2次調査地

所在地 松山市北斎院町219-1、
221-1の一部

期間 平成4年11月16日～
平成5年5月31日

面積 1,149m²

担当 梅木・武正



図1 調査地位置図

経過 本調査は、北斎院遺物包含地内における分譲住宅建設に伴う事前調査である。平成3年12月に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺物包含層（中近世の土器、陶磁器）と遺構を検出し、当該地に中世から近世に至る遺跡が存在することが明らかになった。

当該地は、大峰ヶ台丘陵の南に流れる宮前川沿いにあり、この宮前川の氾濫により形成された砂層上、標高9mに立地する。西には津田鳥越遺跡や宮前川遺跡群、東には古照遺跡群があり、北東には岩子山古墳や斎院茶臼山古墳など多くの古墳を有する大峰ヶ台遺跡群が所在する。なお当該地は、昭和63年度調査の「北斎院地内遺跡1次調査」の西隣接地である。

遺構・遺物 本調査地の基本層位は第I層表土（旧耕作土）、第II層茶褐色土（水田床土）、第III層淡黃灰色粘質土、第IV層灰茶色粘質土、第V層暗褐色砂質土（遺物包含層）、第VI層灰色微砂である。第VI層上面は遺構検出である。

遺構は主に第VI層上面での検出であり、掘立柱建物址5棟、土壤状遺構12基（内土壤墓2基を含む）、井戸1基、溝状遺構23条、柱穴441基（掘立柱柱穴を含む）、性格不明遺構1基他である。但し、遺構の深さなどから考えると本来は第V層以上の層から掘り込まれた可能性の高いものが多い。遺物は遺構及び包含層からの出土である。土師器、須恵器、陶磁器が出土している。

小結 本調査では、古代～中世の遺物・遺構を確認した。特に土壤墓内から出土の土師皿は、前回の1次調査の土壤墓群内から出土しているものとほぼ一致を見る。さらに遺構の規模、埋土等も同様であり、1次調査の土壤墓が西に展開されていたことが分かる。また、溝が多数検出されたが、特にSD7は明確なコーナーが検出され、その内側に掘立柱建物址が検出されたことから、中近世の居住形態解明の資料となるものである。本調査資料は、1次調査のそれを補充・充実させる資料となり、当該地の中近世集落構造の一つの手がかりとなるものである。

〔文献〕 宮崎泰好 1989「北斎院地内遺跡1次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報 II』松山市教育委員会

北斎院地内遺跡 2 次調査地

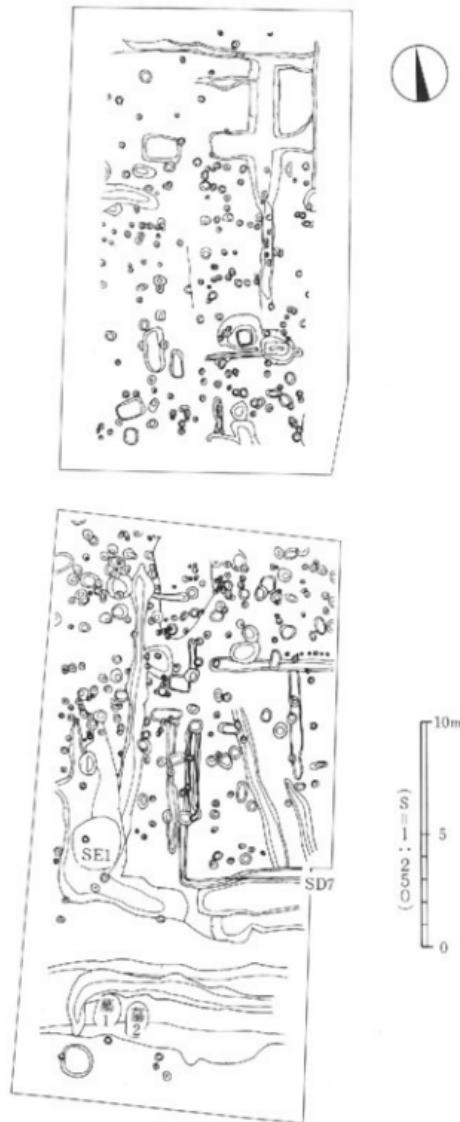


図 2 遺構配置図

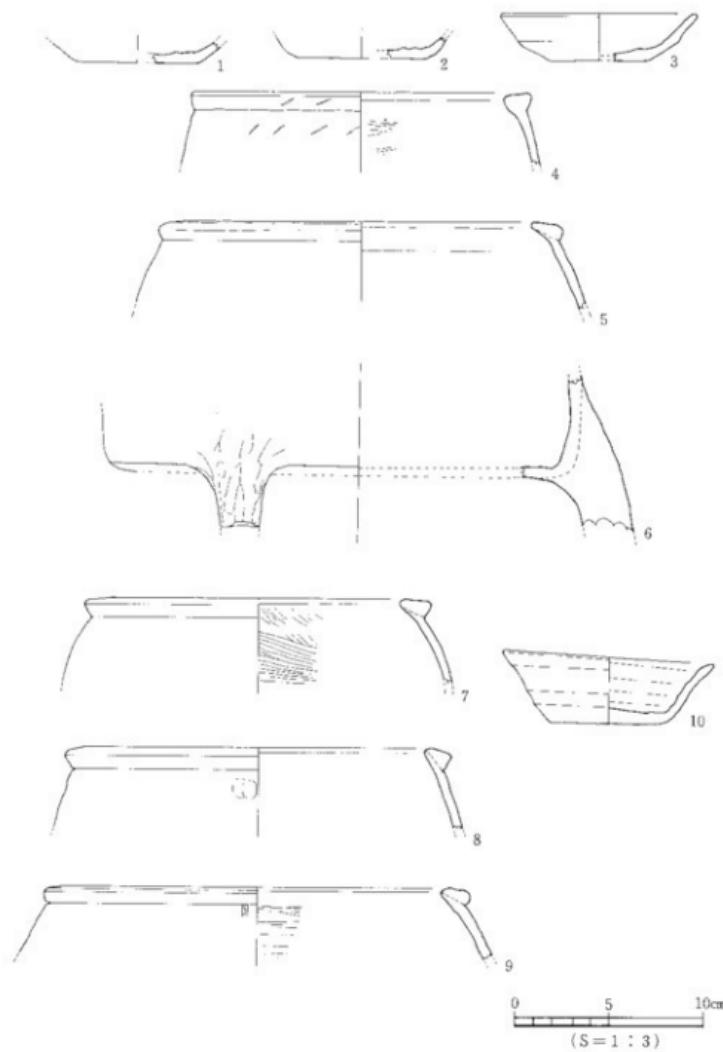


図3 出土遺物実測図

北斎院地内遺跡 2次調査地



写真1 調査区南側発掘状況（北より）



写真2 土壙墓1検出状況（南東より）

コ デラ 古照遺跡 7次調査地

所 在 地 松山市南江戸4丁目1-1
 期 間 平成3年10月21日～
 平成4年3月31日
 面 積 A地区1,110m²・B地区460m²
 担 当 栗田(正)・河野

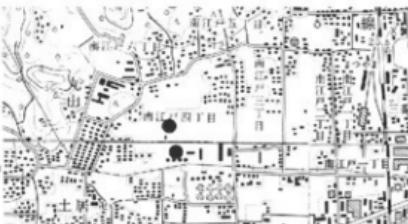


図1 調査地位位置図

経過 古照遺跡は、石手川等によって形成された沖積平野にあり、特に扇状地の先端付近に立地している。本遺跡の北側及び西側を石手川の小支流である宮前川が流れ、この宮前川をはさみ北方に大峰ヶ台丘陵がある。同丘陵には、弥生時代では朝美澤遺跡、辻遺跡、大峰ヶ台遺跡、古墳時代では辻遺跡2次、前期古墳の朝日谷2号墳、後期群集墳の客谷古墳群等の遺跡が存在している。また本遺跡周辺には、辻町遺跡、南江戸闘目遺跡、古照ゴウラ遺跡、松環古照遺跡、南江戸桑田遺跡等古墳期から中近世にかけての遺跡がある。

本遺跡は、昭和48・49年度に古墳時代前期の灌漑用井戸3基が調査され、その後、平成2年度までに6次調査を行っている。今回、下水処理施設建設に伴い平成3年度の緊急発掘調

査を第7次調査とする。二地区にまたがるためそれぞれをA・B地区と設定し調査を行う。

両調査区とも標高約13.10mに位置し、A地区は5次調査地の西側にあり、B地区は6次調査地の西側部にあたる。

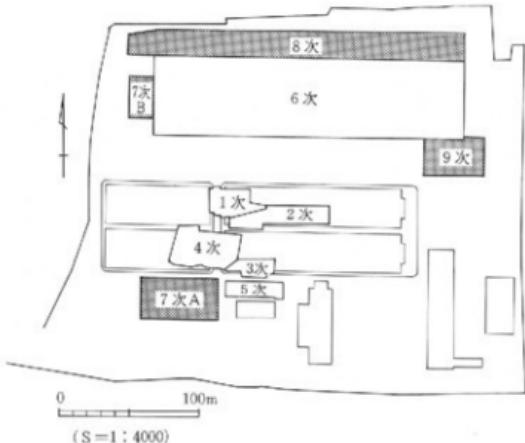


図2 7・8・9次調査地位位置図

遺構・遺物 A地区の基本層序は、第I層造成土、第II層旧耕作土、第III-a層灰オリーブ色シルト～粘土、第III-b層オリーブ灰色シルト、第IV-a層暗青灰色シルト、第IV-b層灰色粘土、第V層暗緑灰色砂質土と灰白色極細砂・粗砂の互層、第VI層暗緑灰色シルト、第VII層黒褐色粘土、第VIII層灰白色砂または緑灰色シルトである。

調査区は、V層以下の土層が緩やかに西へ傾斜し、更に中央部から西へ下降している。その上位に第IV層が厚く堆積している。第V層は、洪水による堆積層である。調査地の大部分は、以前の工事等により第V層まで削平を受けている。

第IV-a層からは、調査地西端で南北の溝1条が検出され、底部焼碗・皿、擂鉢等が出土し、江戸時代末期の遺構と思われる。

第V層からは、土坑墓、土坑、柱穴、溝等が検出され、第VIあるいはVII層まで掘られている。これら遺構から人骨3体、土師器杯・皿、土釜、備前焼擂鉢、青磁碗等が出土し、14～16世紀にかけての遺構と思われる。

第VI層からは、調査地のほぼ中央部で東西長12.5m、幅30～40cm、高さ5cmを測る小畦畔1条が検出される。周辺には多数の人・牛の足跡がみられ、水田遺構である。

第VII層（遺物包含層）からは、土師器椀・杯・皿、土鍋、手の字状口縁皿、黒色土器A類椀、楕葉型（I～2期）と和泉型（II期）瓦器椀・皿、白磁碗、篠窯系・東播系の鉢のほかに牛歯が出土している。これらは11～12世紀にかけての遺物である。

第VIII層の中でも緑灰色のシルトは調査区中央東南部を占め、東西に長く浅い溝群が検出される。これら小溝群は跡跡と思われる。

B地区的基本層序は、第I層造成土、第II層旧耕作土、第III層青灰色またはオリーブ黄色粘土、第IV層灰オリーブ色または黒褐色シルト（遺物包含層）、第V層緑灰色粘土～シルト、

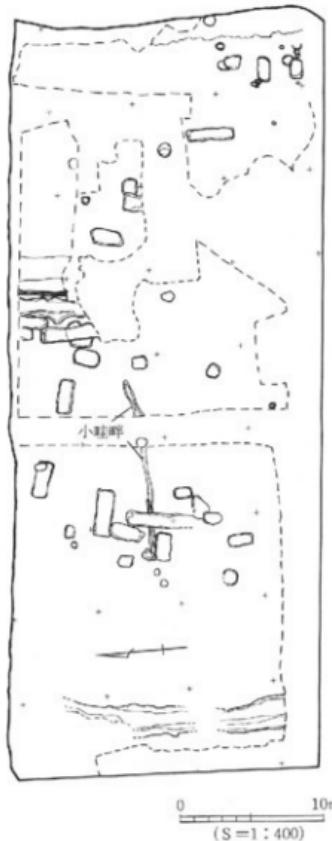


図3 A地区第IV-a、V、VI層遺構配置図

第VI層浅黄色砂
～砂礫層である。

第V層からは、
掘立柱建物跡2
棟、柵列1条、土
坑18基、溝9条、
柱穴40基、性格不
明遺構47基が検出
される。

S B 1は、桁行
4.4m、梁行3mを
測る東西棟であ
る。

S A 1は、南北6間分(9.3m)、東西3間分(7.0m)を検出し、S B 1の北面と西面を囲
み同遺構に付随するものと思われる。

S D 8周辺から多数の遺物が密集して出土している。

第IV層からは、土師器椀、回転台成形と手づくねの土師器杯・皿、土師質鍋、土釜(土師
質・瓦質)、和泉型(III期)瓦器椀・皿、縦ヘラを押した無高台の楕葉型瓦器椀、東播系こね
鉢、亀山焼甕、常滑焼甕、十瓶山窯こね鉢、貿易陶磁器、吉備系土師器椀、土師質小壺、置
き甕、土鍤等13世紀代の遺物が出土している。

小結 A地区では、まず、第VII層検出の鋤跡は平安時代後半に位置づけられる遺構である。
第VII層からの出土遺物は、松山平野における当該期土器の好資料で、大変興味深いものである。
第VI層の水田跡は、上下土層に包含されている土器から13世紀代に営まれたものと考え
られる。第V層の土坑群(35基)から、本調査地が14～16世紀にかけて墓原であった可能性
が高く、中世墓の研究資料として評価できるものである。

B地区は狭い調査範囲ではあるが、13世紀代の土器を多量に出土している(コンテナ約80
箱)。その中でも特に、手づくね土器の多さと破片ではあるが楕葉型瓦器椀と十瓶山窯こね鉢
の出土は、松山平野における中世土器の新資料として注目でき、今後の研究に重要な意味を
持つものである。

両調査区から検出された遺構や出土遺物等から、今後、既往調査地や南江戸觸目遺跡、松
瑞古照遺跡等の周辺遺跡の調査成果を踏まえて、古代から中世における古照地域の生活域・
墓域・生産域について、更には西日本の中での物資流通等について研究なされなければなら
ない。



図4 B地区遺構配置図

古照遺跡 7 次調査地

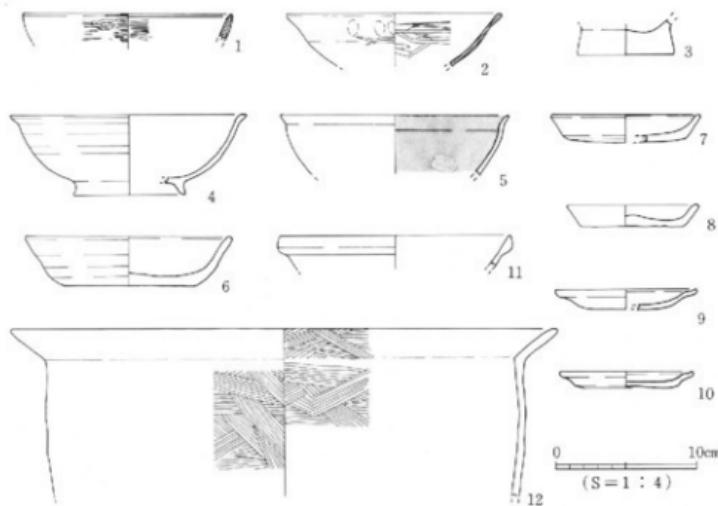


図5 A地区出土遺物実測図

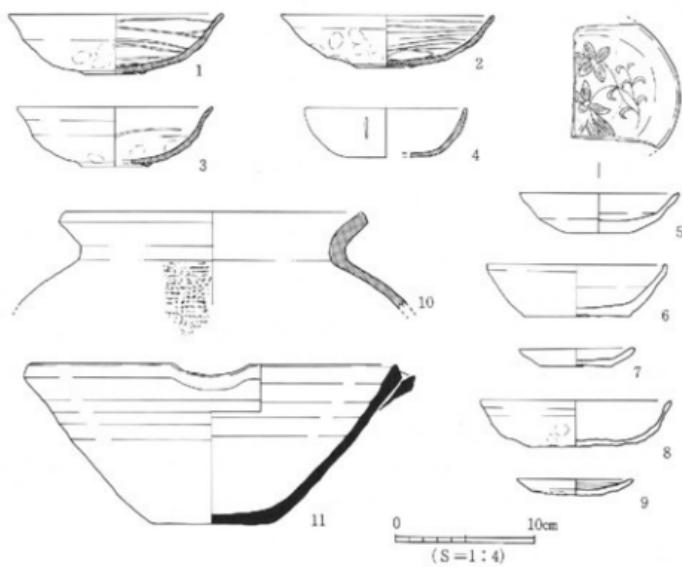


図6 B地区出土遺物実測図

コ デラ 古照遺跡 8次調査地

所在地 松山市南江戸4丁目1-1
期間 平成4年4月1日～
平成5年3月31日
面積 7,200m²
担当 栗田(正)・河野



図1 調査地位置図

経過 本調査は、下水道処理施設建設工事に伴う平成4年度の緊急発掘調査である。調査地は、平成2年度に行った第6次調査地の北側部分にあたる。まず、中近世遺構の調査から開始し、同年11月16日に終了する。次に、古墳時代前期の環と同等の深さの調査を同年11月12日より開始する。

遺構・遺物

1. 上層調査 (標高約11～12m間)

①近世の遺構・遺物 調査地全域に、洪水砂により埋没した水田・畑跡を検出する。水田跡には人・牛の足跡の他に耕跡が検出されている。この洪水砂からは、唐津焼碗・土師器・キセル等が出土し、これら遺構は18世紀前半に埋没したものと考えられる。6次調査において検出されている遺構と連続する。

②中世の遺構・遺物 近世遺構より下層で、調査地の中央や東側(A地区)と西端(B地区)において遺構を検出する(今回、水田跡等生産遺構については未調査)。

A地区では、大型の掘立柱建物跡(柱間約2.5m)1棟を含む建物群(5棟以上)、柵列2条、溝25条、土坑墓1基、木棺墓1基、土坑20基、性格不明遺構14基が検出される。出土遺物には、土師器碗・杯・皿、土鍋、和泉型瓦器碗・皿、東播系鉢・壺、貿易陶磁器、柱材、木杭等があり、これらは12世紀後半から13世紀にかけてのものである。特に土坑墓からは土師器碗1点と潮州六花鏡1面、木棺墓からは小判状木棺と瓦器小皿1点が出土している。これらの検出遺構や出土遺物等から、名主クラスの屋敷跡と考えられる。

B地区では、掘立柱建物跡(3棟)、溝22条、土坑9基、池状遺構1基、性格不明遺構6基が検出される。遺物は、土師器碗・杯・皿、和泉型瓦器碗・皿、貿易陶磁器等が出土し、これらは13世紀から14世紀にかけての遺物である。これらの検出された遺構や出土遺物等から、7次B地区と南江戸闕目遺跡との関連が考察される。

2. 下層調査 (標高約8～9.5mより上位層)

工事施設名称を調査区に用い、東から最初沈澱池を初沈区、エアレーションタンクをエア

タン区、最終沈澱池を終沈区とする。

初沈区では、調査区東端で安定する緑灰色粘土が検出され、この粘土東側を西岸とする南北方向の河川1条が検出される。この河川の東岸は調査区外である。この粘土は、6次調査で検出されている粘土と連続するものである。この粘土上に北から南への破堤痕跡が残り、また、人の足跡や動物の足跡が検出されている。

調査区西側においては、緑灰色粘土を被覆する砂礫層からし字状の溝1条（SD1）を検出し、埋土は黒褐色粘土である。SD1のコーナー部から南西にかけて古墳時代前期の小型三種・壺・甕・高杯・壺等が出土している（図2、岡化していないものに肩部に円形竹管を五箇所施した直口壺も出土している）。

緑灰色粘土を被覆する砂礫層からは、縄文時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。

エアタン区では、調査区東側で緑灰色粘土が検出され、この粘土東端を西岸とする南北方向の河川1条が検出される。東岸は未調査であるが、おそらく初沈区検出粘土を東岸となすものと考えられ、初沈区河川と同時期と考えられる。この粘土は、6次調査で検出されている粘土と連続するものである。この粘土東端の被覆する砂礫層より上位層から、弥生時代末から古墳時代初頭の鉢・甕等が出土し、小型鉢を「入子」にする鉢も出土している（9次調査地、図4-※）。これら遺物の出土状況から水辺祭祀的行為があったものと考えられる。

この粘土の西側一帯には砂礫層が広がり、残塊的なブロック状粘土が検出されている。この砂質土から壺・鉢・支脚等が出土している。

この残塊的粘土の中でも特に、暗灰色砂質土から成る小自然堤防が検出されている。この砂質土から壺・鉢・支脚等が出土している。

調査区からは、前述以外に縄文時代前期末の大歳山併行期の土器1点も出土している。

終沈区では、調査区の3/4を占める黒褐色粘土が検出される。この粘土東端は後世の河川により、粘土がブロック状に崩落している。粘土上に南北の溝1条、東西の溝1条、南北の河川1条、木杭列、人・牛の足跡が検出される。この粘土は、6次調査において検出されている粘土と連続するものであり、幾たびかの河川影響を受けながら形成されている。

この粘土の北半分は砂礫層に被覆され、この砂礫層からは弥生式土器、土師器、須恵器等が出土している。南半分は、この砂礫層を切って10世紀後半の溢流堆積物で被覆されている。この堆積物からは土師器碗、縄釉碗等が出土し、西から東への堆積方向を示しているため、当時の河川が調査地の西側にあったものと推測される。この堆積物は6次調査においても確認されている。

調査区からは、前述のほかに縄文時代晚期、弥生時代後期、古墳時代の土師器・須恵器、植物遺体等が出土している。

古照遺跡 8 次調査地



図2 SD 1 出土遺物実測図



写真1 下層調査遺構検出状況(東より)

コ デラ 古照遺跡 9次調査地

所 在 地 松山市南江戸4丁目1-1
期 間 平成5年2月8日～
同年3月19日
面 積 1,200m²
担 当 栗田(正)・河野



図1 調査地位置図

経過 本調査は、新空港道路建設工事に伴う平成4年度の緊急発掘調査である。調査地は、平成2年度に行った6次調査地の南東部にあたる。まず、深さ約2mまでの調査を行う。調査終了後、深さ約5mにおける調査を行う。

遺構・遺物

1. 上層調査(標高約11m)

調査地の中央西側で、中世の小河川1条、柱穴3基、土坑1基、溝4条、足跡が検出される。調査地北東隅では、中世遺構検出層より更に約90cm下の灰白色細砂等に被覆される黒褐色粘土(標高約10.8m)が検出され、この粘土の西側部分は砂礫層となり河川の存在が考えられる。この粘土上面から古墳時代中期前半の土器が出土している(図3、図化していないものに二重口縁壺も出土している)。これら土器は、西側河川に沿う様に北西から南東方向に並んで出土していることから、水辺祭祀に伴うものと考えられる(図2)。

2. 下層調査(標高約7.8～8m)

前述の黒褐色粘土より下層は砂礫層となり、調査地南東で緑灰色粘土が検出される(掘削時、緑灰色粘土の北側から、北東方向へと連続する黒褐色粘土の検出をみている)。

緑灰色粘土を南岸とする東西方向の河川1条が想定できる。北岸は調査区外と考えられる。この粘土は、6次調査では未検出である。

この粘土を被覆する砂礫層からは弥生式土器・石包丁等が出土している。

小結(8・9次調査地) エアタン区・初沈区で検出された緑灰色粘土は、堰構築基底層として認識されるものである。これら粘土を被覆する砂礫層からは、弥生時代末から古墳時代初期の土器を出土している。このことは、両粘土が弥生時代末頃までに自然堤防として形成され存在し、この自然堤防の西側一帯に後背湿地が広がっていたものと考えられる。この後背湿地として終沈区の黒褐色粘土等を想定できる。これら自然堤防と後背湿地の接点部は、河川等によって削平を受けている。しかし、小自然堤防の検出は河川影響を受ける中でやや安定する時期に形成された痕跡と考慮できる。

このように検出された緑灰色粘土と黒褐色粘土を6次調査と同様に「同時異相」として存在していたことを再認識した。

また、堰と同時期の人为的遺構として初沈区 S D 1 の検出は、下水道中央浄化センター内では初めてである。

両調査地の土層について、8次調査地のエアタン・初沈区の緑灰色粘土を被覆する砂礫層より上位置から弥生時代末から古墳時代初頭の土器（図4）を出土し、この土層より上位に S D 1 が存在し、この S D 1 土層の直上に9次調査地の黒褐色粘土が存在するという地層累重の層序を遺構・土器と共に捉えることができた。この層序毎から出土した土器は、松山平野における弥生時代から古墳時代中期前半にかけての資料として重要なものである。

古墳時代前期の地形については、前述のように S D 1 が緑灰色粘土より上位にあること、堰を被覆させた河川影響がみられないこと、また、S D 1 が堰より上位にあること（S D 1 の検出高は標高約10.2m、堰の杭高は標高約8.2mで比高差約2.0mある）等から、8次調査地の東側一帯が高地に位置していたものと思われる。（S D 1 と堰は直線距離にして約160m離れている）。また、9次調査地では、古墳時代中期前半の粘土以下が砂礫層となっていることから、堰を被覆させた河川の堆積層としてこの砂礫層を考えることができるが、まだ詳細な分析がなされていないため推測の域をでない。

また、今回の調査で弥生時代末までに形成された自然堤防に堰が構築されていた結果を得た。今後は、既往調査結果を踏まえて、再度、詳細な当時の古地形等について検討する必要がある。そして、堰を構築させた住民の居住域と堰に伴う明確な水田跡等の生産域について、周辺部での詳細な調査が必要であると考えられる。

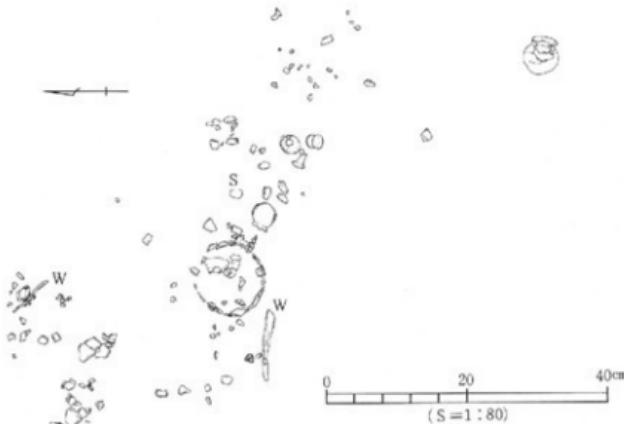


図2 上層調査出土遺物測量図

古照遺跡 9 次調査地

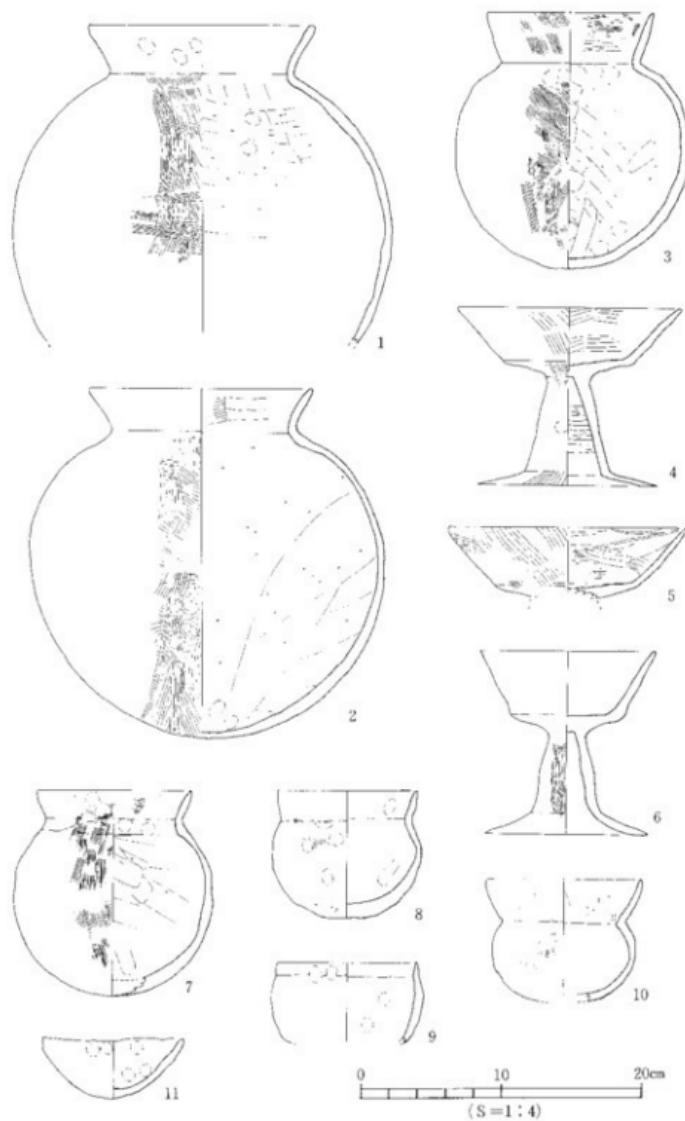


図3 上層調査出土遺物実測図

古照遺跡 9 次調査地

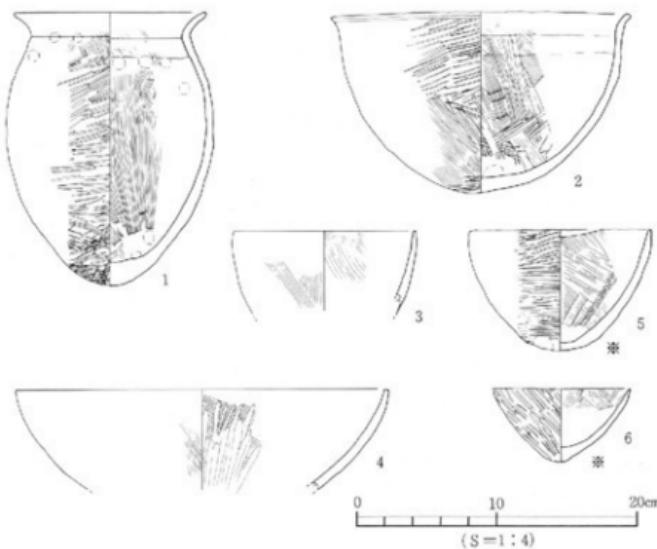


図4 8次調査地出土遺物実測図



写真1 下層調査遺構検出状況（東より）

ドウゴ イマイチ
道後今市遺跡 9次調査地

所 在 地 道後北代1292-1他
期 間 平成4年4月6日～
同年7月3日
面 積 652.6m²
担 当 橋本・相原(秀)



図1 調査地位置図

経過 調査地は、道後今市遺物包含地内の標高約32mの沖積地上に位置する中世の遺跡である。周辺においては、過去8次にわたって調査が行われており、中世の遺跡が広範囲に展開することが知られている。

遺構・遺物 中世の遺構と遺物を含む3層にわたる遺構面と、その下層において人と牛の足跡が遺存した遺構面を3層(無遺物)、さらにその下層において弥生時代から9世紀にかけての遺物を包蔵する砂礫層を検出した(以下、上層から順に遺構面1～6、砂礫層。各遺構面は、順に、7層、8層、9層、10層、12層の各層の上面に位置している。)

遺構面1～3においては、鎌溝の痕跡を確認したほか、遺構面2、3では合わせて溝6条、ピット21基などの遺構を確認した。建物の規模は不明であるが、耕作地に隣接する作業小屋程度の建物が散在する状況が想定される。遺物は主として13世紀後半～14世紀代に属するものであるが、攪乱を受けているため破片がほとんどである。各層に共通の遺物としては、いわゆる東播系須恵器の片口鉢、在地系土師器の羽釜があげられる。片口鉢の形態はほぼ同じであるが、土師器羽釜については、遺構面2、3出土のものに比べて遺構面1出土のもののがやや新しい特徴を示している。このほか、鎧蓮弁文青磁碗、白磁、和泉型瓦器小皿、土師器、鍋、瓦、砥石などが少量ながら出土している。13世紀後半～14世紀代のものである。

遺構面4～6においては、人と牛の足跡を多数検出した。1区の遺構面5、6では地山面の落ち込み部分にあたる北東箇所に堆積した砂層中に足跡が残されていた。遺構面4の段階になると、足跡の範囲は1区全面に広がる。3、4区ではほとんど足跡を検出することはできなかつたが、4区東端付近に存在することから、調査区のほぼ全面に分布している可能性もある。前段階に比べて水田域が南に拡大したものと考えられる。なお、これらの遺構面からは遺物は全く検出されていない。さらに、下層の上部礫層からは、弥生時代前期から古代に至る時期の遺物が検出された。9～10世紀代のものと考えられる縄釉陶器の存在は、この砂礫層が二次的に攪乱を受けた時期の下限を示すものと考えられ、その時期まで、当遺跡を含む道後地区の一部が部分的に不安定な状態にあった可能性を示すものと言えよう。

道後今市遺跡 9 次調査地

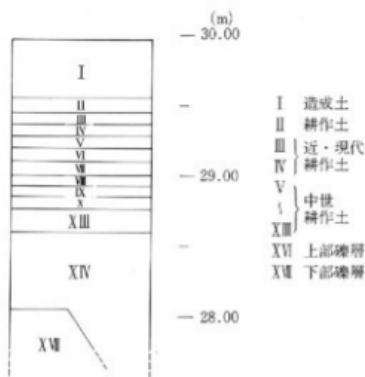


図 2 基本層序

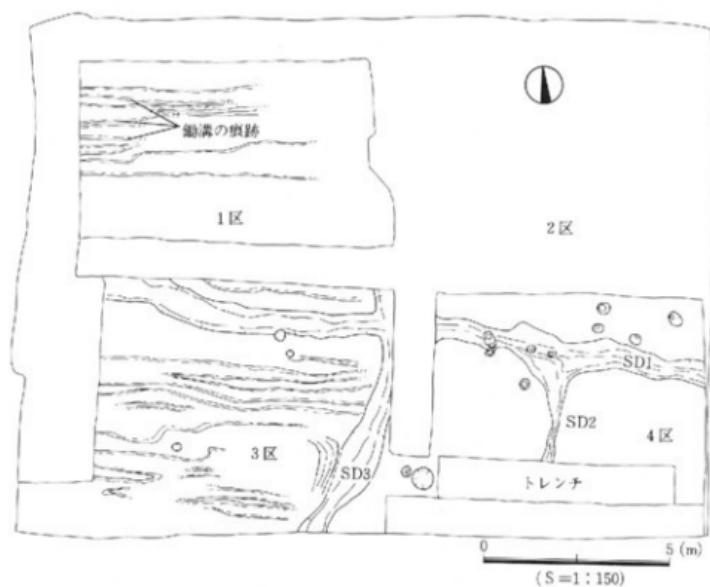


図 3 造構配置図

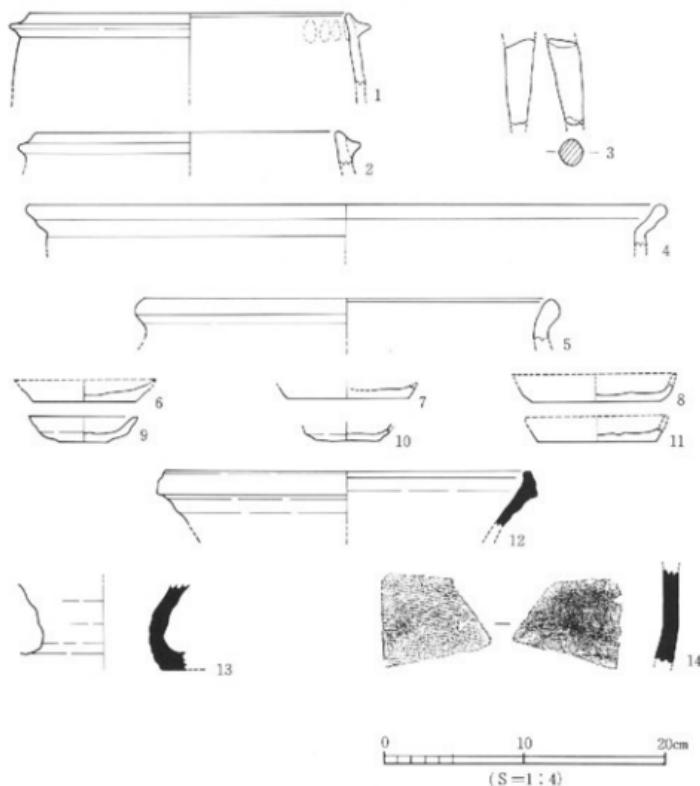


図4 遺構面3出土遺物実測図



写真1 出土遺物

道後今市遺跡 9 次調査地

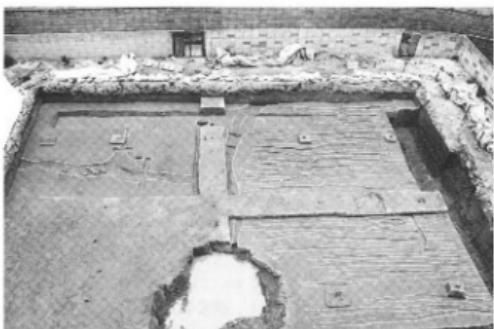


写真2 調査地全景(北より)



写真3 鋤溝痕跡検出状況
(西より)



写真4 人と牛の足跡(北より)

タルミタカギ 樽味高木遺跡3次調査地

所在地 松山市樽味4丁目178-3
 期間 平成4年3月10日～
 同年5月22日
 面積 479m²
 担当 梅木・宮内



図1 調査地位置図

経過 本調査は樽味遺物包含地における宅地開発に伴う事前調査である。樽味遺物包含地は石手川上中流域右岸に広がる低位段丘上にある。本調査地は、この低位段丘上の南西端の標高41.5mに立地する。同包含地内では樽味遺跡（愛媛大学農学部）をはじめ、樽味四反地遺跡、樽味立派遺跡、樽味高木遺跡などの調査がおこなわれており、弥生時代から中世にかけての集落が存在していたことが近年の調査で明らかになりつつある。

遺構・遺物 本調査地は字名より樽味高木遺跡3次調査地とする。基本層序は第I層表土、第II層水田床土で地表下約30cmまで開発が行われている。第III層暗緑黄色土、第IV層暗褐色土で、第IV層が遺物包含層である。15～25cmの堆積で弥生土器・土師器・須恵器他が混在して包含される。第V層茶褐色土は地山と呼ばれるものである。第6層以下は図2に示すとおりである。

遺構は第IV層中及び第V層上面での検出である（図3）。第IV層中では竪穴式住居址2棟（古墳時代中期後半）を、第V層上面では掘立柱建物址1棟、溝状遺構4条、土壤状遺構8基、柱穴204基（住居址、掘立柱建物柱穴を含む）、土器溝りS X 1（弥生時代中期後半）他を検出した。遺物は遺構内及び第IV層中からの出土であり、弥生土器（前期、中期後半～後期）、土師器（古墳中期他）、須恵器（5～8世紀）陶質土器（款質）、石製品（扁平片刀石斧1点、石鏃1点）他である。

S B 1号住居址からは古墳時代中期後半の一括性の高い資料が得られた。他に第IV層中から船を描いた線刻画（絵画）土器の出土がある。

H. 41.500m	
I	表土
II	水田床土
III	暗緑黄色土
IV	暗褐色土 (遺物包含層)
V	茶褐色土
6	淡褐色土
7	茶褐色砂礫
8	黃褐色砂
9	黃褐色砂礫
10	黃褐色砂
11	灰褐色砂礫
	S=1/30

図2 基本層位図

樽味高木遺跡 3 次調査地

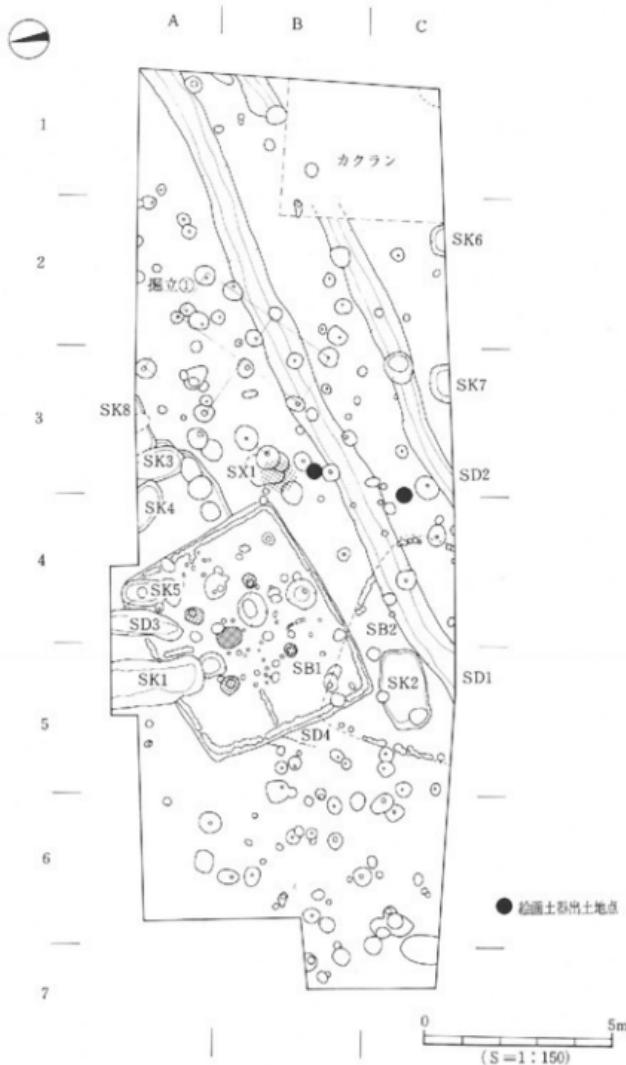


図3 造構配置図

SB 1号住居址(図4・5)

調査区中央部やや北寄りA4～B5区に位置する。切り合い関係からSB 2号住居址がSB 1号住居址に先行する。平面形は隅丸方形を呈し規模は東西幅5.7m、南北幅5.0m、壁高は住居址北西隅で28cm、南東隅で15cm(検出面下)を測る。埋土は暗褐色土である。床面は比較的硬く平坦である。壁体に沿って幅12～20cm、深さ3～12cmの小ピットが巡っている。主柱穴はSP①・②・③・④の4本である。炉は住居址中央部やや北寄りに位置し、70×60cmの梢円形状プランを呈する。断面は皿状を呈し深さ12cmを測る。炉内にて焼土及び炭化物を確認した。遺物は床面上及び床面付近から完形品を含む土器器片を多数検出した。炉内からは鉢形土器(15)が、炉の東側の床面付近から完形の小型丸底壺(8)などが出土している。

時期：出土遺物は全体的にみて古墳時代中期後半～後期初頭の範囲におさまるものである。出土状況等から埋上下部出土遺物は本住居址の廃棄・埋没時に伴う可能性が高く、よって、本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半～後期初頭と考えられる。



図4 SB 1測量図

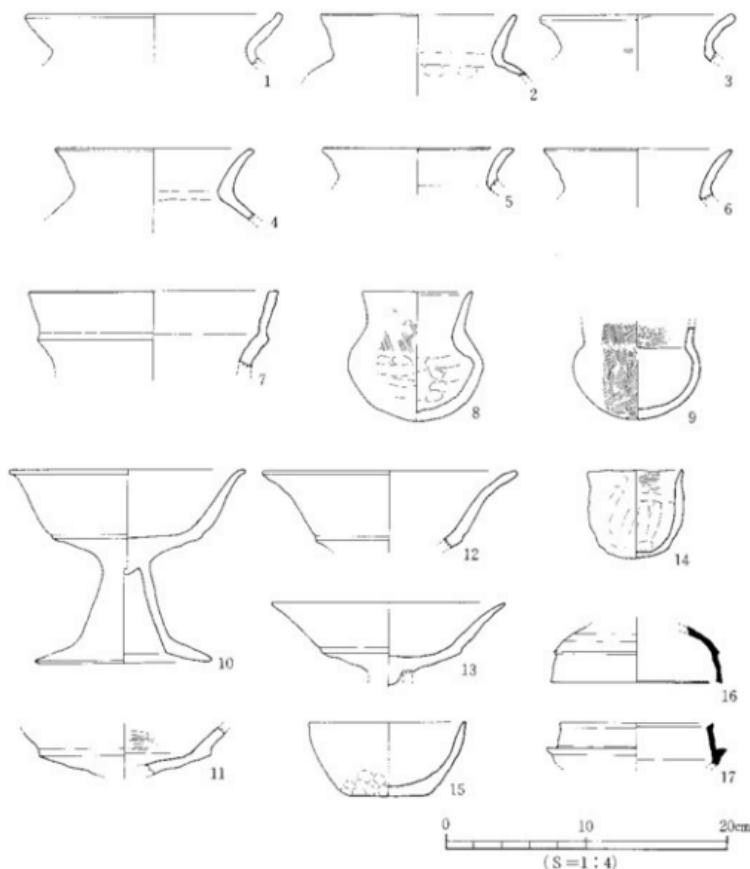


図5 SB 1出土遺物実測図

小結 本調査ではSB 1号住居址より古墳時代中期後半の一括遺物資料が得られた。これは近隣の樽味高木遺跡のSB 5号住居址出土遺物とあわせ、松山平野における古墳時代中期の土師器編年を考えるうえで好資料となるものである。また、本調査区及び周辺地域では樽味立派遺跡・樽味高木遺跡など、古墳期を通して大規模な聚落が継続して営まれていたものと考えられる。注目すべきものとしては「船」を描いた線刻画（絵画）土器の出土である（図6）。頸部付近の破片で第IV層包含層掘り下げ時に出土したものである。復元すると松山平野における弥生時代後期の複合口縁壺形土器になるものと推定される。船については櫓や人間

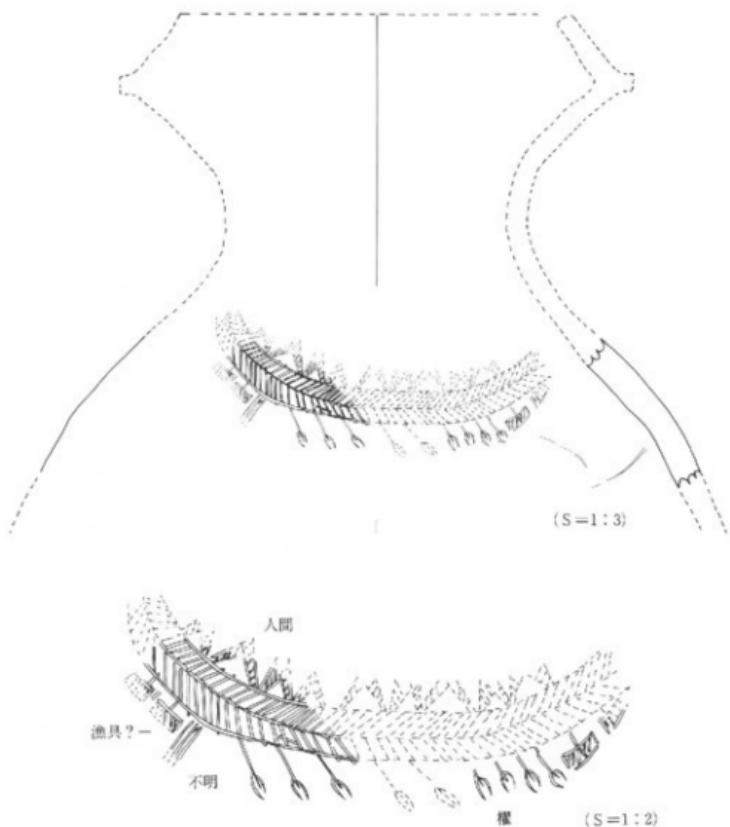


図6 線刻画（絵画）土器実測図

のほか漁労具の類のようなものが描かれている。船が描かれている土器はこれまでにも出土例はあるが(11遺跡14例)、本例は、それらのものに較べ表現がリアルで、かつ写実的に描かれている。しかも非常に丁寧に線刻されているところなども注目される点である。今回出土した線刻画（絵画）土器は今後、原始・古代の船舶の構造を考えるうえで貴重な資料である。また間接的ではあるが、本調査地のような内陸集落と海とのつながりを知るうえでも重要な手かがりとなるものである。

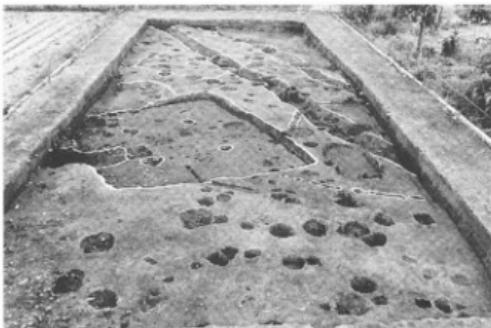


写真1 完掘状況(西より)



写真2 堀立①検出状況(南より)



写真3 SB1遺物出土状況
(北東より)

タルミシタンチ
樽味四反地遺跡 2 次調査地

所 在 地 松山市樽味4丁目216
期 間 平成4年9月1日～
同年10月31日
面 積 300m²
担 当 梅木・宮内

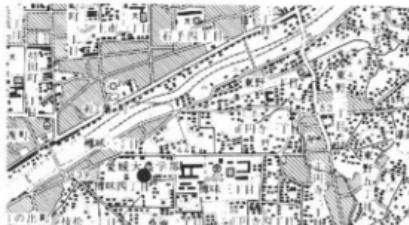


図1 調査地位置図

経過 本調査は樽味遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。調査地は石手川左岸の洪積世扇状地上の標高約40mに立地する。同包含地内ではこれまで樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）や樽味立派遺跡、樽味高木遺跡（1～3次）、樽味四反地遺跡など数多くの調査が行われ、弥生時代から中世に至る遺構・遺物の存在が近年明らかになっている。

遺構・遺物 調査地の基本層序は第I層表土、第II層水田底土、第III層灰褐色土、第IV層灰褐色土、第V層黄褐色土である（図2）。第III・IV層が遺物包含層であり各々、古代～中世、弥生時代～古墳時代までの遺物を包含する。第V層は無遺物層であり地山と呼ばれるものである。第V層上面の標高を測量すると調査地北東部から南西部に向かって緩傾斜をなす。

遺構は主に第V層上面での検出であり、竪穴式住居址2棟（SB1：弥生末～古墳初頭、SB2：古墳中期）、掘立柱建物址3棟（古墳後期以降1棟、中世2棟）、土壙状遺構7基（古墳～中世）、溝状遺構2条（中世他）、柱穴272基（住居址内、掘立柱建物柱穴含む）、性格不明遺構1基である（図3）。

遺物は遺構内及び第III・IV層中からの出土であり、土器類は弥生土器（中期後半～末）、土師器（古墳他）、須恵器（6世紀他）が、石器類では石庖丁片が1点出土している。その他、住居址内（SB1）より鉄器片が1点出土している。

小結 本調査において弥生時代から中世に至る遺構と遺物を確認することができた。弥生時代と確実に時期比定できる遺構は検出されなかつたが、包含層中からは多くの土器片の出土がみられた。このほか古墳時代の竪穴式住居址や掘立柱建物址、古代から中世に比定される土壙状遺構や溝状遺構など多くの遺構と遺物を確認した。これらの資料は当地を含む周辺地域に弥生時代から中世にかけて集落が営まれていたことを物語っている。特筆すべきはSB1号住居址である。住居址内には北東、北西及び南西コーナーに幅1m、高さ20cm前後の屋内高床部（ベット）を付設している。松山平野でのベット付設住居址は住居址内の四周または三周に付設される場合が多い。本調査検出のものは北部九州にその形状の類似するものがあり、松山平野と北部九州との交流を考える場合、興味深い資料であるといえよう。

樽味四反地遺跡 2次調査地

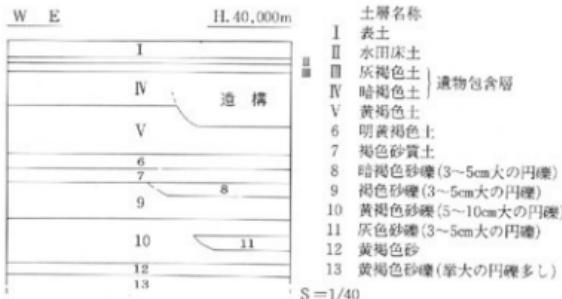


図2 基本層位図

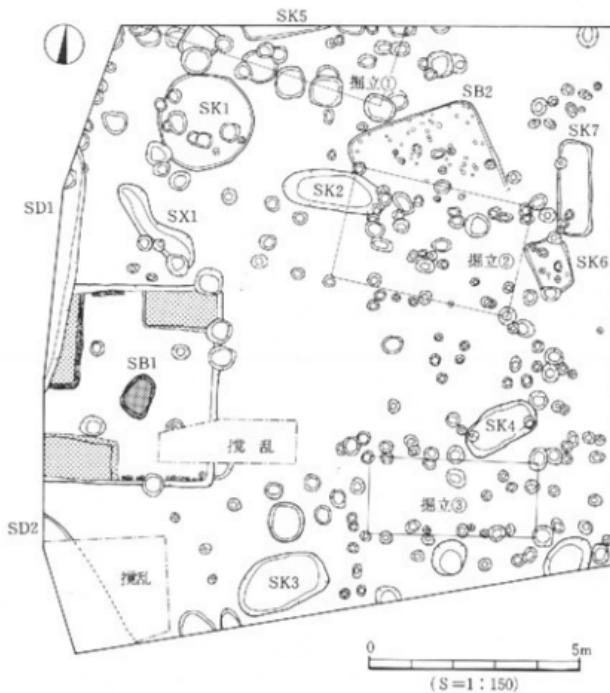


図3 遺構配置図

博味四反地遺跡 2 次調査地

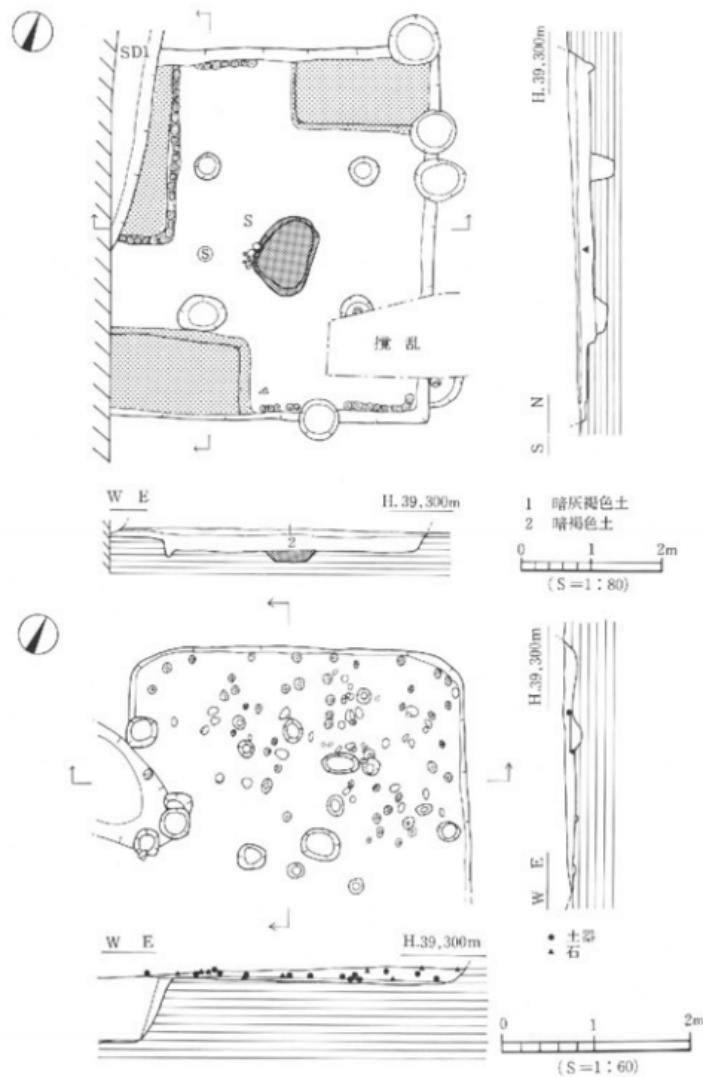


図4 SB1 [上]、SB2 [下] 測量図

梅味四反地遺跡 2次調査地



写真1 完掘状況(北より)



写真2 SB 1 検出状況
(東より)



写真3 SB 2 遺物出土状況
(東より)

ナカムラキョウアン
中村経田遺跡

所在地 中村2丁目123-1他3筆
期間 平成4年10月1日～
同年11月17日
面積 331.33m²
担当 栗田(正)・河野



図1 調査地位置図

経過 中村2丁目遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。本調査地は、松山平野を西流する石手川にかかる国道11号線の永木橋より南方約400mの標高25.7mに立地している。調査地周辺には、弥生時代後期の堅穴住居址を検出した中村長正寺遺跡、釜ノ口遺跡、指南中学校遺跡、弥生時代後期の堅穴住居址～奈良時代の掘立柱建物を検出した中村松田遺跡、弥生時代～平安時代の掘立柱建物を検出した素鷲小学校遺跡等、各時代にまたがる遺跡が周辺に分布している。

遺構・遺物 壁断面において第V層上面に動物と考えられる足跡が検出されており、上層の細粒砂が入り込んでいる。褐色の暈管状斑紋がみられることより、水田耕作がおこなわれたことが推測される。第IV・V層より遺物の出土は無いが、第V層下面において土師器・須恵器の細片が僅かに出土しているだけである。第VI層より弥生時代後期の遺物が出土している。土層は安定した堆積を示しており、地山面は北東より南西方向に緩傾斜をなし、やや下がっている。

第VI層上面において、溝状遺構1条、集石遺構1基、性格不明遺構1基、第VII層上面において、溝状遺構1条、土壤状遺構1基、柱穴状遺構18基、小穴状遺構373基、性格不明遺構2基を検出した。以下、主要なものについて記す。

SD1は、第VI層上面において検出した。検出長8.3m、幅0.2～0.3m、深さ0.02～0.1mを測り、断面形はレンズ状を呈している。北東から南西に緩傾斜（比高差8cm）をもつ。遺物は弥生土器の細片に混じり、土師器片が僅かに出土している。

集石遺構は第VI層上面で検出したが、平面、断面での切り合いは確認できないことから、第VI層堆積以前の存在が考えられる。東西・南北約2.1mを測り、礫は重なった状態で出土しており、花崗岩・安山岩の約

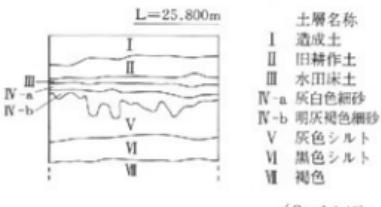


図2 基本層位図

10~15cm大の円礫が主体となっている。礫に混じり、複合口縁壺をはじめとする弥生式土器片が200点弱出土しているが、その内、1割は支脚が占めている。他、黒曜石の石鏃が1点出土している。時期は弥生時代後期中葉～末葉が考えられる。

S K 1は、調査区東壁の地山面より検出した。東端は調査区外に延びる。南北2m、東西1.3m以上、深さ0.06mを測る。遺物は弥生式土器片が出土している。弥生時代後期である。

調査区内全体の第VI層中～下層付近で検出した小穴は直径0.04~0.1m、深さ0.03~0.17mで、埋土は殆ど黒色のシルトである。この規模からみて、杭あるいは植物の根痕が考えられる。埋土中に弥生式土器の細片が入り込んでいる。

第VI層上面において検出されたS X 1、下層において検出されたS X 2共に遺構内より弥生式土器の細片が密集した状態で出土している。

第VI層中層～下層付近で検出した小穴状遺構は直径4~10cm、深さ3~17cmで、埋土は殆ど黒色シルトである。この規模より、杭あるいは稻の根痕が考えられる。埋土中に弥生式土器の細片が入り込んでいるものがみられる。

小結 本調査において検出された弥生時代後期の遺物包含層及び集石遺構は、周辺に分布する中村・釜ノ口遺跡等で検出された弥生時代後期に存在する集落との関連があることが明確となった。今後、集石遺構の性格を解明していく上で、これら周辺遺跡との関連を含め、分析、検討する必要がある。

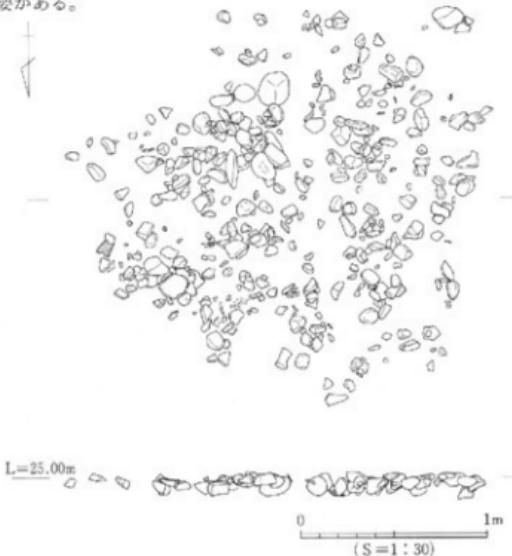


図3 集石遺構測量図



図4 集石造構出土遺物実測図



写真1 調査地全景（西より）



写真2 集石遺構検出状況（東より）

ヒガシヤマ 東山古墳群 5次調査地

所 在 地 東石井町乙39-2他
期 間 平成3年12月26日～
平成4年3月31日
面 積 625m²
担 当 田城・高尾



図1 調査地位置図

経過 本調査は、松山市が計画する「東山縄文・弥生遺物包含地」内の東山古墳群における星岡公園整備のための園路建設に伴う事前調査である。本古墳群においては、昭和53年度より調査を開始し、今回で5度目の調査となる。平成3年7月の踏査及び平成3年度に実施した4次調査の結果（年報IV参照）、石室1基・須恵器等多数が確認された。

松山平野のほぼ中央、石手川と重信川に挟まれた洪積台地上に立地する本調査地は、周囲の天山・土屋山・星岡山等と共に分離独立丘陵を形成し、海拔32～44mの緩斜面上に位置している。周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居址、掘立柱建物跡、土壙墓、環濠等、集落にまつわる多数の遺構を検出している福音小学校構内遺跡、北久米淨蓮寺遺跡、竹ノ下遺跡、筋違遺跡等が密集している。また、本丘陵地は、中世において土居氏・河野氏等が削掘した古戦場としても知られるところである。

遺構・遺物 本遺跡は、園路設置の事前調査であるために幅3m、全長約200mといったトレーナー状の調査区である。それをT1～6に区画割り、調査を実施した。

その結果、T2からは周溝と思われる溝状遺構1条、T3より石室2基（20・21号墳）と周溝2条、T5より石室1基（19号墳）とその周溝の一部をそれぞれ検出した。T4からは、南東隅に2基の石室を確認したが、いずれも調査区外のため、版築土層の確認のみの調査となった。版築の遺存状態から、この2基の石室は恐らく末盃掘の古墳と考えられ、1墳丘2石室の形式を探る古墳であることが推測できる。その位置より北西30mの位置には、古墳に纏わる祭祀儀礼に使われたものと思われる須恵器の甕・土師器の小型丸底壺、さらにその下からは長さ20cm程度の14本の鉄鏃が出土した。19号墳からは、須恵器の高环・环身・环蓋・台付椀がほぼ完形品にて出土したほか、管玉・ビーズ玉・耳環なども検出された。また、20号墳の羨道部に隣接して南北に走る弥生時代後期の溝が検出された。

小結 本調査では、弥生後期～古墳時代の遺構・遺物を確認した。検出された古墳は、須恵器等の形態からして6世紀後半から7世紀初頭の群集墳全盛期に構築され、東山丘陵地に無数に点在する古墳時代後期の墳形を記すひとつの形態である。

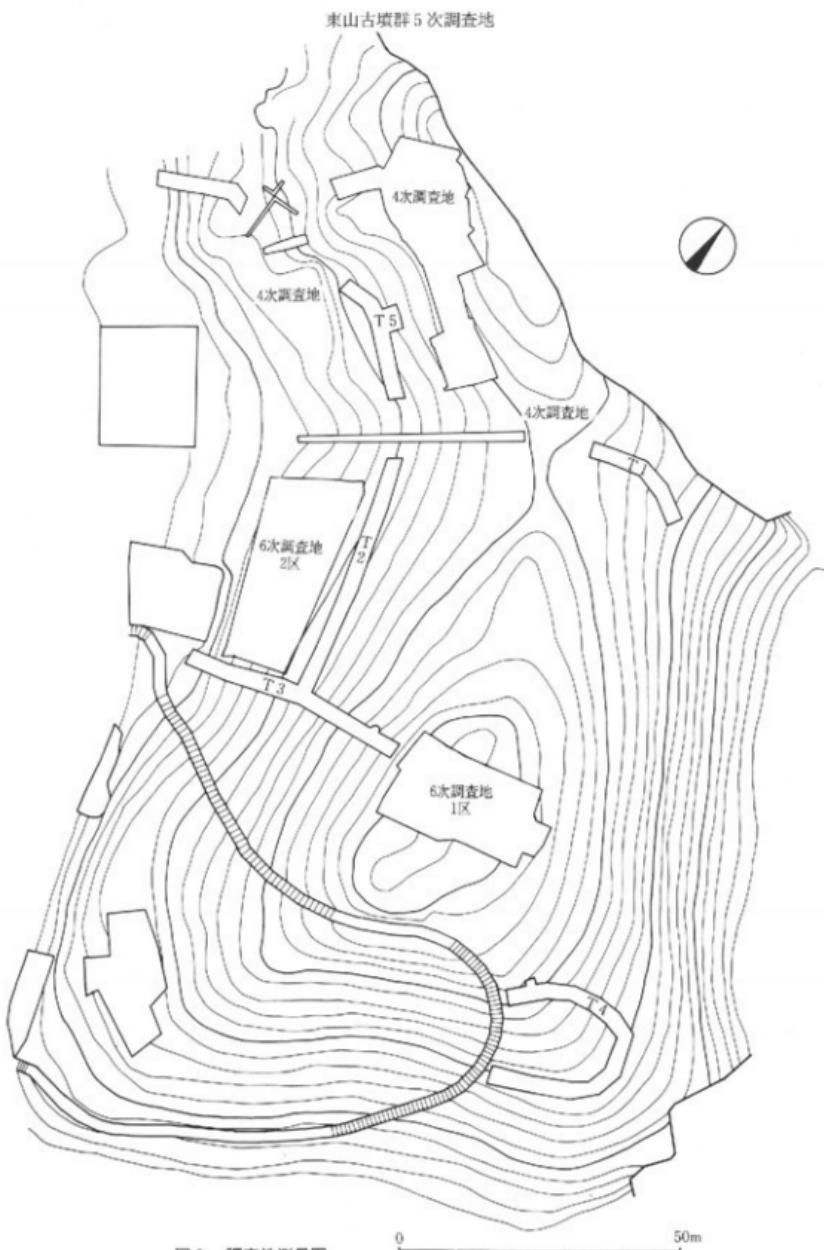


図 2 調査地測量図

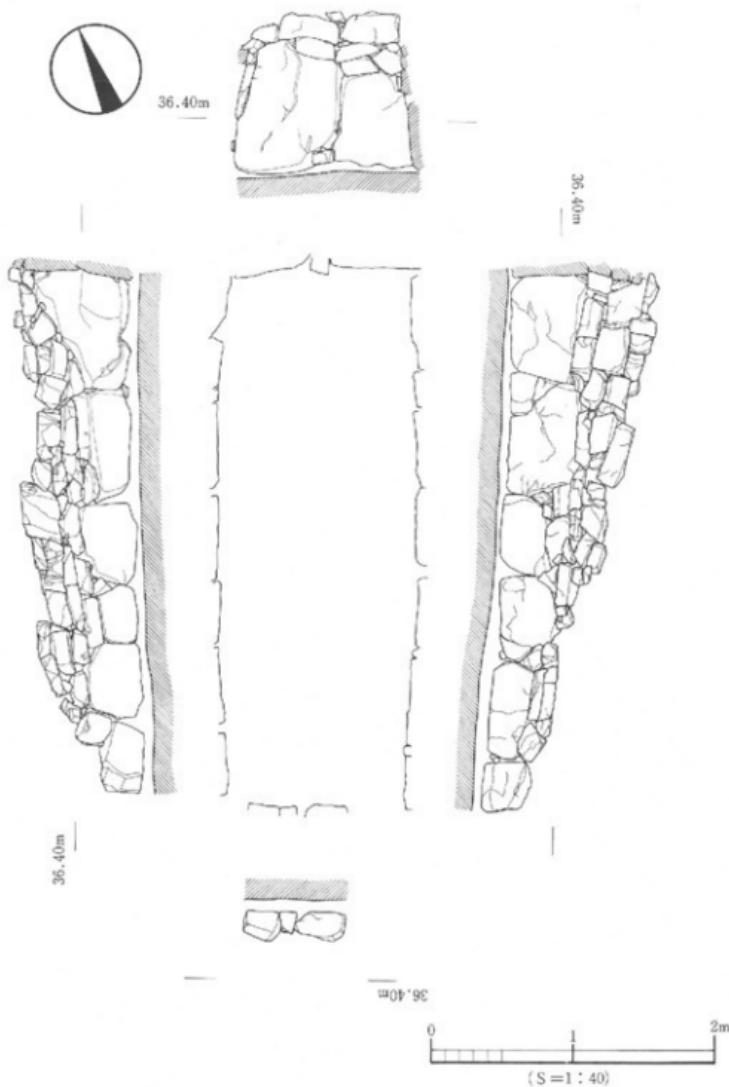


図3 19号墳石室測量図



写真1 19号填石室内検出状況（北北東より）



写真2 T4 遺物出土状況（南より）

ヒガシヤマ
東山古墳群 6次調査地

所 在 地 東石井町乙39-2他
期 間 平成 4年11月1日～
平成 5年3月31日
面 積 1,100m²
担 当 田城・高尾



図1 調査位置図

経過 本調査は、松山市が計画する「東山縄文・弥生遺物包含地」内の東山古墳群における星岡公園整備に係る展望台及び運動場建設に伴う事前調査である。平成3・4年度の調査及び4年9月の踏査による調査の結果を受けて発掘調査を実施した。

松山平野のほぼ中央、石手川と重信川に挟まれた洪積台地上に立地する本調査地は、海拔32~44mの緩斜面上に位置している。周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての福音小学校構内遺跡、北久米淨蓮寺遺跡、竹ノ下遺跡、筋違遺跡等が密集している。

遺構・遺物 本遺跡は、東山の頂上部を1区、西斜面部を2区として調査を実施した。その結果、遺構としては1区から石室を有する古墳2基(24・25号墳)、土壙墓5基、大規模に岩盤をくり貫いた遺構2基が検出され、また2区からは5次調査で検出された20号墳の主体部を含め周溝を持つ4基の古墳(26・27・28号墳)と弥生時代後期の方形周溝墓1基を確認した。24号墳は、丘陵頂上部よりやや東に下った尾根線突端部の標高44mに立地している。墳丘は、農耕等によって全壟に近い状態であり、地表面観察で墳形を判断することはできなかつたが、周溝の検出により直径約12mの円墳であることが明らかとなつた。主体部は、西に開口する竪穴系横口式石室で、主軸をN72°Eにとり、玄室長3.2m、奥壁部床面幅1.6m、閉塞部床面幅1.34m、玄門内幅1.2mを測り、花こう岩質の岩盤を切り抜いた上に石室を構築している。玄門部は、頂上に向かって開口しており、3段の階段によって形成された特異なプランを持つものである。石室内埋土からは、弥生土器片、鉄鎌等、頂上部からの流れ込みとみられる遺物のほか、須恵器环身・环蓋・壺、勾玉・管玉等を検出した。次に同一丘陵頂上部の西尾根線突端部には、西北西に開口する横穴式石室とみられる25号墳が、やはり全壟に近い状態で検出され、その西方には直径約10m、深さ2.8mの岩盤くり貫き遺構Bがあり、埋土の各層からは円筒埴輪片、須恵器片、土師皿等が多量に検出された。

小結 今回の調査で瀬戸内において特異な形態を持つ6世紀後半の竪穴系横口式石室を検出できたことは、今後の当地域における古墳形態を考える上で、好資料となるものである。

東山古墳群 6 次調査地

44.30m

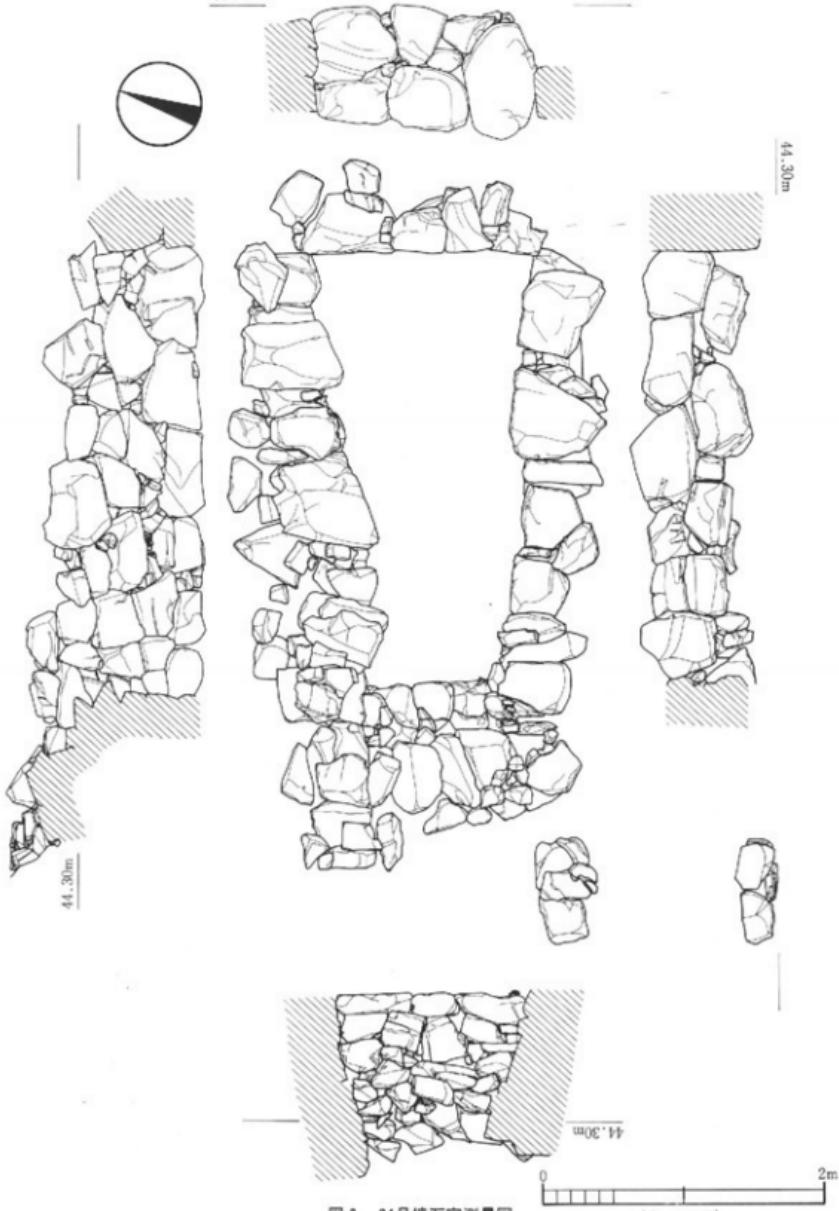
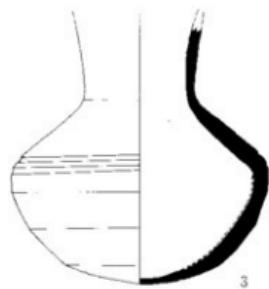


図2 24号墳石室測量図

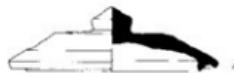
東山古墳群 6 次調査地



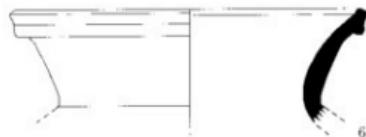
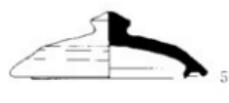
24号主体部出土遺物



25号主体部出土遺物



20号主体部出土遺物



27号主体部出土遺物

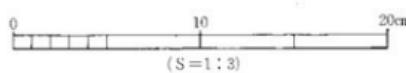


図3 出土遺物実測図

東山古墳群 6次調査地



写真1 1区遺構検出状況（北より）



写真2 2区遺構検出状況（西より）

キタクメ マチャシキ
北久米町屋敷遺跡

所 在 地 北久米町477-1、5
期 間 平成4年3月10日～
同年5月30日
面 積 854m²
担 当 田城・高尾

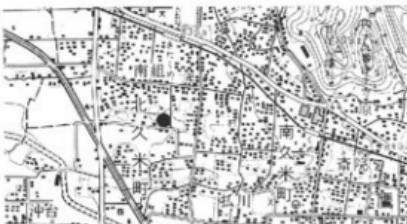


図1 調査地位置図

経過 本調査は、「126 高畠遺物包含地」内における宅地開発に伴う事前調査である。本遺跡は、松山平野北東部における平井谷地域を水源とする犀越川の北岸、標高32.8mに立地し、来住庵寺跡を包含する来住台地より北東700mに位置する。

遺構・遺物 基本層位は、第I層表土、第II層灰褐色土、第III層黒褐色土（中・近世）に大別されるが、調査区西部にはII・III層が確認されず、表土のすぐ下層が黄色土（地山）であった。これは、近現代における削平によるものであり、旧地形とは異なるものであった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土壌状遺構8基、溝状遺構12条（近世3条、中世2条、古代2条、時期不詳5条）、柱穴状遺構429基、近世住居址1基である。調査区南面では、川原石や石臼片を「コ」の字状に敷き、L字型の溝を持つ近世の住居址を表土の下面より検出した。調査区北部より検出された2軒×2軒の小規模な中世の建物跡と思われる掘立柱建物跡からは、土師皿片数点が出土している。SK2は、長径360cm×短径200cmの楕円形を呈しており、埋土はIII層で、その中から28点の鐵錠と青磁碗片が出土し、焼土も各所より確認されたことから製鉄炉の可能性も考えられる。また、地山（乳灰色粘土層）面が表土の下面より0～5cmと極端に浅い位置からの検出であるため、遺構面は近現代における開墾によって削平を受けていた。SK3から、脚付き釜の脚部が出土したほかは、他の土壌については擾乱が激しく明確に判断できる遺物は検出されなかった。

出土遺物は江戸時代の灯明皿5点・播鉢3点、中世の足金片数点、7～8世紀の宝珠つまみ付き環蓋1点、弥生土器3点（高环脚部・底部）、石鏡1点、青磁碗片等であったが、そのほとんどが遺物が第I層表土からの検出であり、碎片であるため遺構との関連性を見いだすのは困難であった。

小結 本調査地からは、弥生土器、須恵器等数点の碎片を検出しているが、柱穴内埋土の識別から推しても関連する遺構の判断は難しく、400基にも及ぶ柱穴の性格については確認することができなかった。ただ、中世において「町屋敷」がこの地域に存在し、播鉢を使った生活の痕跡を検出できたことは、一つの成果である。



図2 造構配置図

北久米町屋敷遺跡

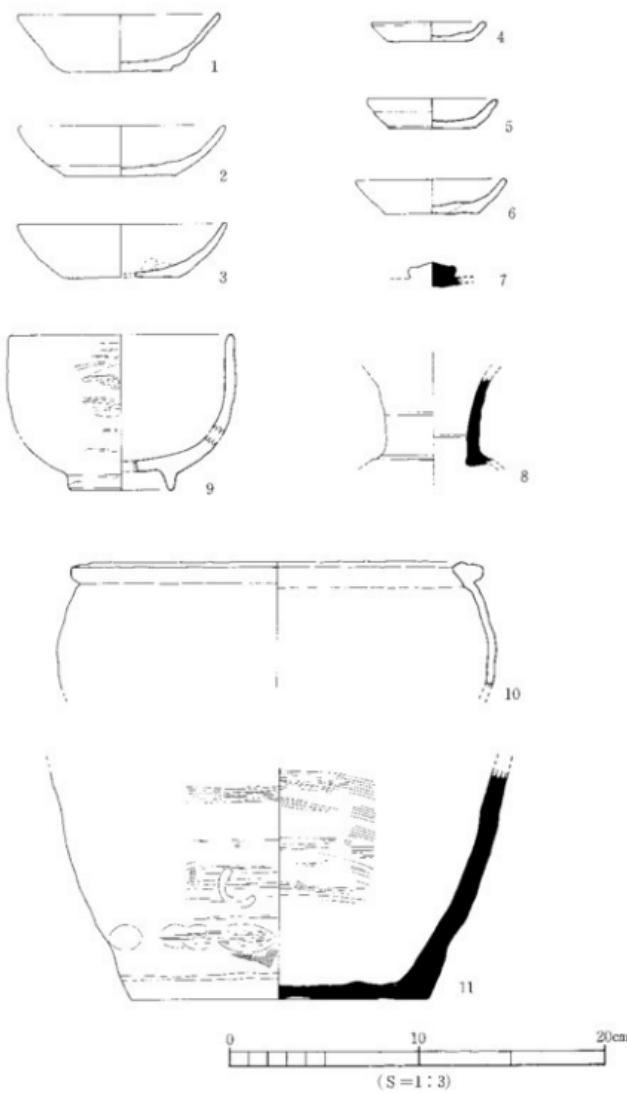


図3 出土遺物実測図

北久米町屋敷遺跡



写真1 遺構検出状況（北西より）



写真2 SK 2 検出状況（北より）

ミナミク メ マチ 南久米町遺跡

所 在 地 南久米町419-10、420-1
期 間 平成4年5月28日～
同年8月7日
面 積 1,000m²
担 当 田城・高尾



図1 調査地位置図

経過 本遺跡は、「126 高畠遺物包含地」内における宅地開発に伴う事前調査である。本調査地は、松山平野北東部を西流する堀越川の北岸に立地し、国指定史跡米住庵寺を包含する来住台地は南岸に当たる。また、その来住庵寺より北東約720mの標高34.8mに位置している。

遺構・遺物 基本層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層茶褐色土（床土）、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層黒褐色土（粘質土）、第Ⅴ層黄色シルト（地山）であり、V層上面より古代の遺構を検出した。検出された遺構は、掘立柱建物址7棟、土壤状遺構7基（うち不明遺構6基）、溝状遺構3条、ピット状遺構15基であった。掘立柱7棟のうち、掘立7が部分的な確認しかできなかったものの、他の建物址についてはほぼ全体像を検出することができた。建物規模については、掘立1を除く5棟とも規模の大小はあるが、桁行3間、梁間2間で、いずれもが桁行を東西にとり、梁間を南北に建てられている。掘立1は、南北に梁間3間、桁行は東部が調査区外であるため判然としないが、恐らく4間と思われる。土壤状遺構については、SK1から少数の碎片ではあるが土師器が出土し、SX1～6からの遺物は全く検出されず、黒褐色土及び灰褐色土の埋土があるのみであった。また、SX4は掘立5の柱穴に切られ、SX6は掘立2の柱穴に切られる形で検出されているところから、SX遺構は掘立柱に先行するものと考えられる。遺物は、SB1の柱痕から「時」と書かれた土師器壊坏の黒書土器が検出され、掘立2から土師器壊身片、掘立?から須恵器蓋坏片、掘立5から須恵器宝珠つまみ付き壊蓋片、掘立7からは須恵器台付き直口壺片等がそれぞれの柱穴から出土している。

小結 本調査では、古代から中世の遺構と遺物を確認した。特に、久米高畠遺跡群等で確認されている官衙遺跡との関連性を示唆する墨書き器の発見は、官衙遺跡の広がりが来住台地を形成する堀越川の北岸に至っていることを知る資料として捉えることができよう。なお、掘立柱建物址の時期設定については、柱穴出土の遺物が8世紀中頃の須恵器壊蓋片であることから、建物の上限をこの時期におくことができる。

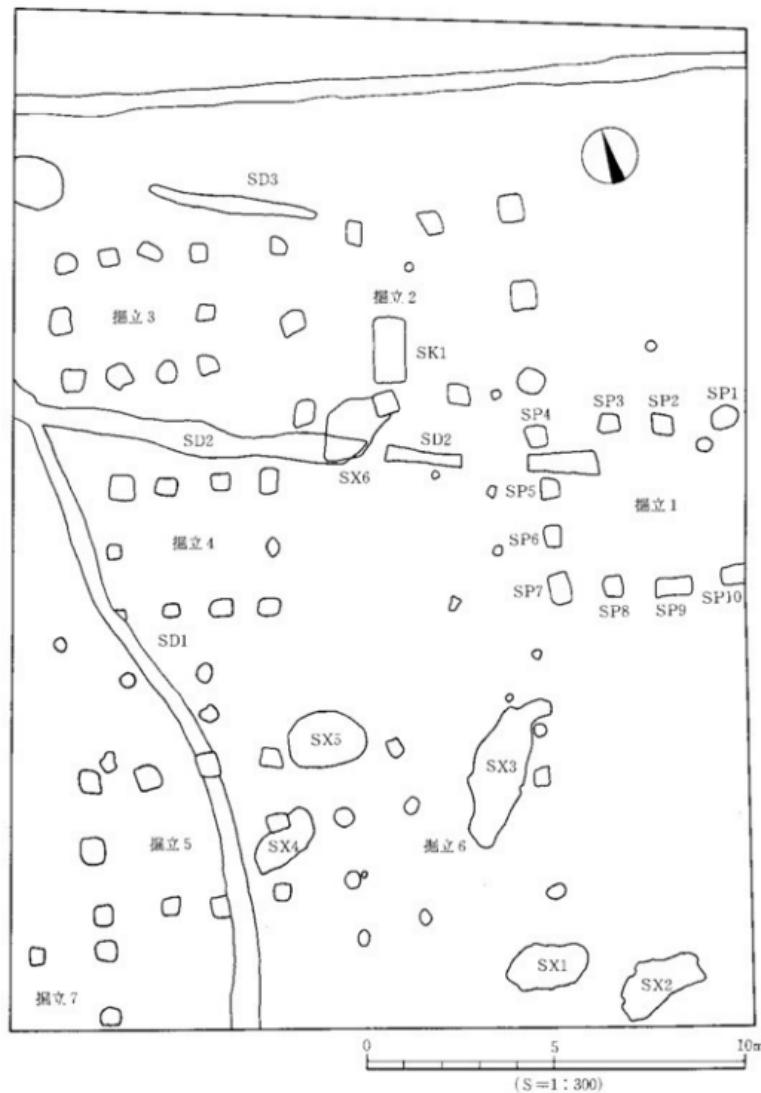


図2 造構配置図

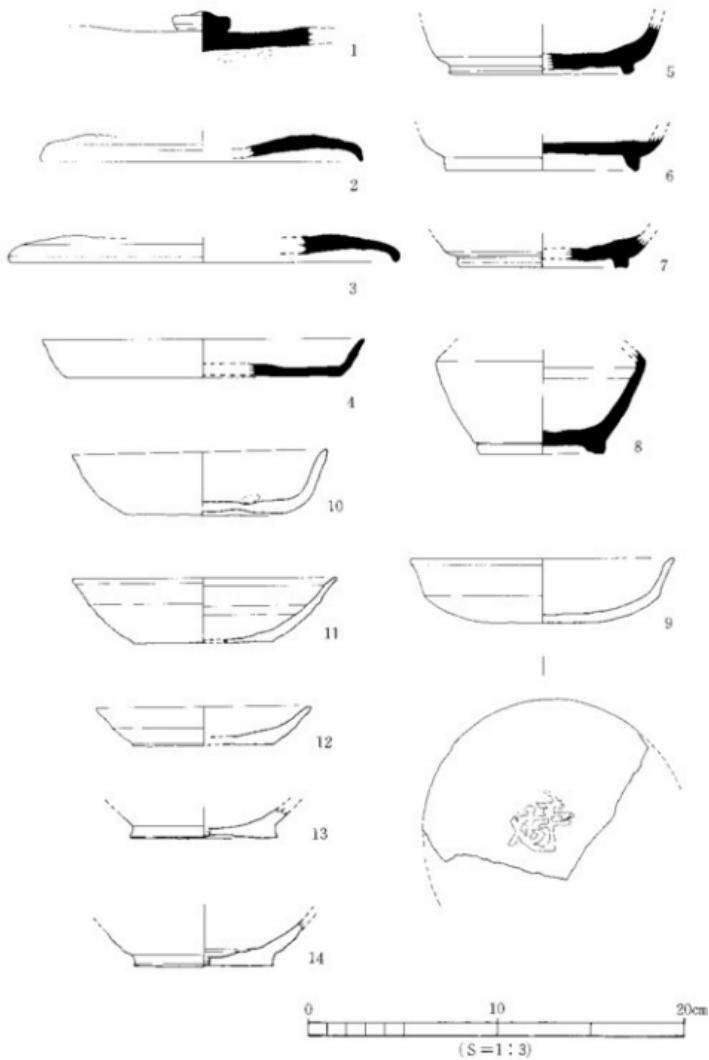


図3 出土遺物実測図



写真1 遺構検出状況（北より）



写真2 墨書き器皿出土状況（南より）

ミナミクメマチ 南久米町遺跡 2次調査地

所在地 南久米町408-4・5・6

期間 平成4年8月1日～
同年9月22日

面積 288m²

担当 田城・高尾



図1 調査地位置図

経過 本調査地は、松山平野北東部の来住台地にある史跡來住庵寺跡より北東720mに位置し、平井谷を水源とする堀越川右岸の扇状地上標高34.8mに立地する。調査地南方200mの地点において西流する堀越川を境として、南面には古代集落で知られる久米高畠遺跡群、来住遺跡群など有数の遺跡地帯があり、特に「久米評」線刻須恵器を出土した久米高畠遺跡7次調査地や掘立柱建物7棟と「上」「ノ」を墨書きされた須恵器、木簡など官衙関連遺構を窺わせる遺物を出土した久米塙田II遺跡など、数多くの遺跡が密集する地域であることが判明している。

造構・遺物 基本層序は、南久米町遺跡3次調査と同様である（62頁参照）。今回確認された遺構は、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構3条、柱穴状遺構60基、土壤状遺構2基、遺物は土師器皿8点、鉢3点、須恵器宝珠つまみ付き蓋壺等であった。溝状遺構は、いずれもが第15層上面での検出である。SD1は、調査区北部を西から東へ緩傾斜しており、比高差は10～15cmである。埋土は、黒褐色土に黄色粘質土塊がブロック状に混入し、その中から弥生土岐片や須恵器片が数点出土しており、何らかの要因で、溝を埋設したものと推測される。埋土検出レベル状況から埋設された時期は、掘立1・2号に近い時期に設定することができる。SD4は、3次調査によって土師器高环の脚部を出土し、南から北に向けて比高差15cmを測る緩傾斜していることが判明している。掘立1号は、調査区南東部端にある南北2間、東西軸は調査区外に当たるために確認不可能であった。なお、その柱穴からは唐錢「開元通寶」と土師器皿を出土した。掘立2号は、その建替えに擬るものと考えられる。

小結 本調査において弥生時代から中世までの遺構及び遺物が確認された。「開元通寶」が8世紀から唐代に鋳造されたことや、須恵器環蓋・台付き壺が8世紀後半から9世紀に分類できることから、掘立柱建物もほぼ同時期のものと推定できる。それより古相を呈するSD1の性格については、調査地南部に隣接する東山神社が古墳であったとする説もあることや溝内部の埋土が古墳の版築に酷似している状況からしてその周溝とも考えられ、今後、周辺の調査によって解明されるものと思われる。

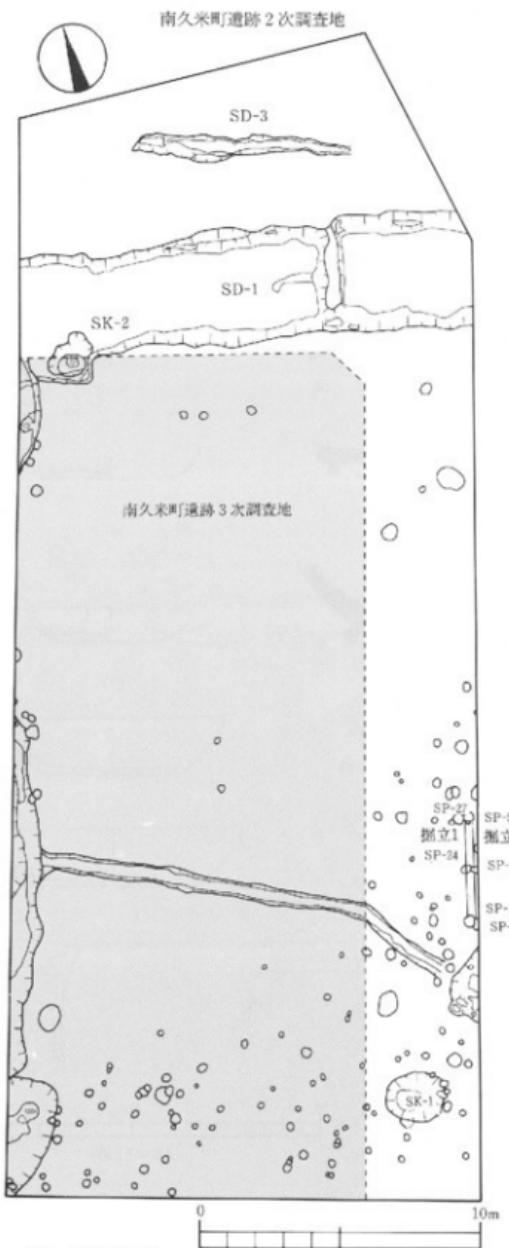


図2 遺構配置図

(S=1:200)

南久米町遺跡 2 次調査地

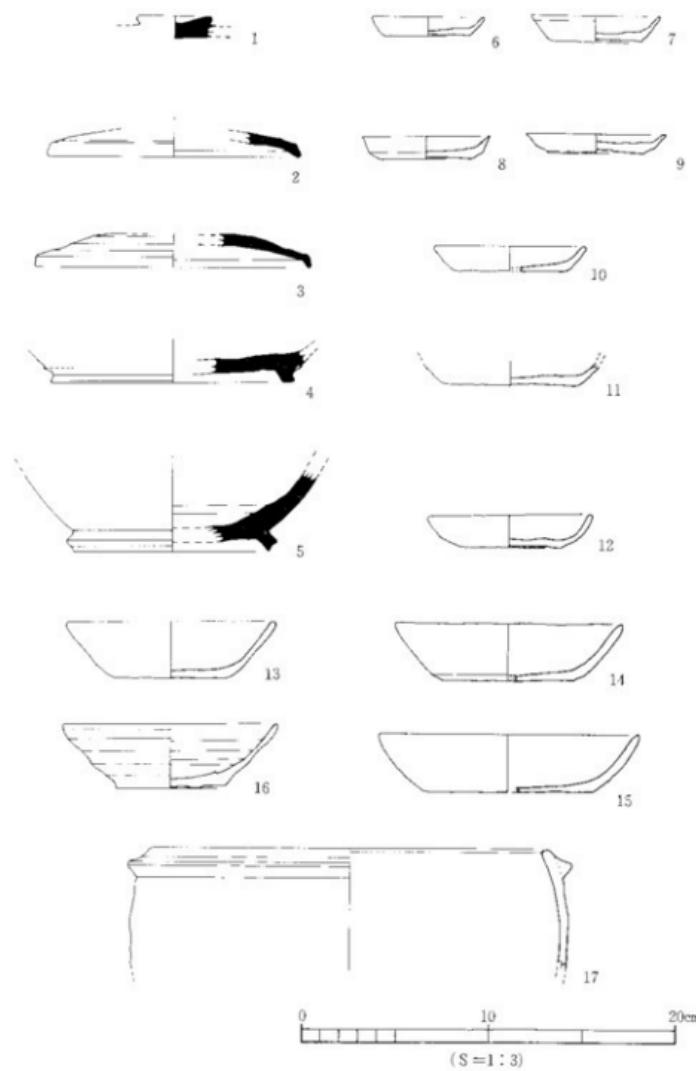


図3 出土遺物実測図



写真1 調査区南部遺構検出状況（南より）



写真2 掘立柱建物 1 号柱穴内「開元通寶」出土状況（南より）

ミナミクメマチ
南久米町遺跡3次調査地

所 在 地 南久米町408-4・6
期 間 平成4年9月24日～
同年10月30日
面 積 416m²
担 当 田城・高尾



図1 調査地位置図

経過 本調査地は、松山平野北東部の来住台地の北方300m、国指定史跡米住庵寺跡より北東720mに位置し、平井谷丘陵地を水源とする堀越川右岸の扇状地標高34.8mに立地する。調査地南方200mの地点において西流する堀越川を境として、北面の調査地近隣では、僅かに古墳期から中世にかけての遺構・遺物を検出した南久米北野遺跡1・2次調査地を知るのみであったが、近年の調査において北久米町屋敷遺跡、南久米町遺跡、南久米町遺跡1次調査地などにみられる古墳時代後期から古代、さらには中・近世に跨がる遺跡が確認されている。

遺構・遺物 今回確認された遺構は、溝状遺構2条、ピット遺構83基、土壙状遺構1基、性格不明遺構1基、遺物は土師質器台脚部、須恵器片等であった。基本層序は、第1層表土、第2層灰白色土A(床土)、第3層灰褐色土、第5層褐色土、第6層黒褐色土A、第8層黒褐色土B、第15層灰白色土E(地山)が主な層序である。溝状遺構は、いずれもが第15層上面での検出である。SD2は、調査区のほぼ中央を東西に流れSD4と合流し、溝の底は東から西にむけて緩傾斜しており、比高差は10cmである。埋土は、第8層と同様の黒褐色土Bで、その中より土師質高环の脚部が出土している。SD4は、南から北に向けて緩傾斜しており、比高差は15cmを測る。SD4とSD1は、調査区外北西において合流し、西流しているものと推される。埋土は、第6層と同様の黒褐色土Bで、第8層よりやや粘質度が強く、須恵器脚部片が数点出土した。また、柱穴状遺構の埋土は、褐色土、黒褐色土、黄褐色土の3種類からなる柱穴群であるが、各々の時期差が認められるものの正確な年代設定、性格づけについては遺物の遺存も認められず困難であった。

小結 本調査において古墳時代から古代までの遺構及び遺物が確認された。古墳時代については、6世紀前半の須恵器坏身、坏蓋を出土したものの関連遺構は確認されなかった。古代については、SD2が南久米町遺跡2次調査で「開元通寶」を検出した掘立柱建物遺構の埋土と酷似しており、東に拡がる住居址群の解明が今後の課題である。

南久米町遺跡 3次調査地

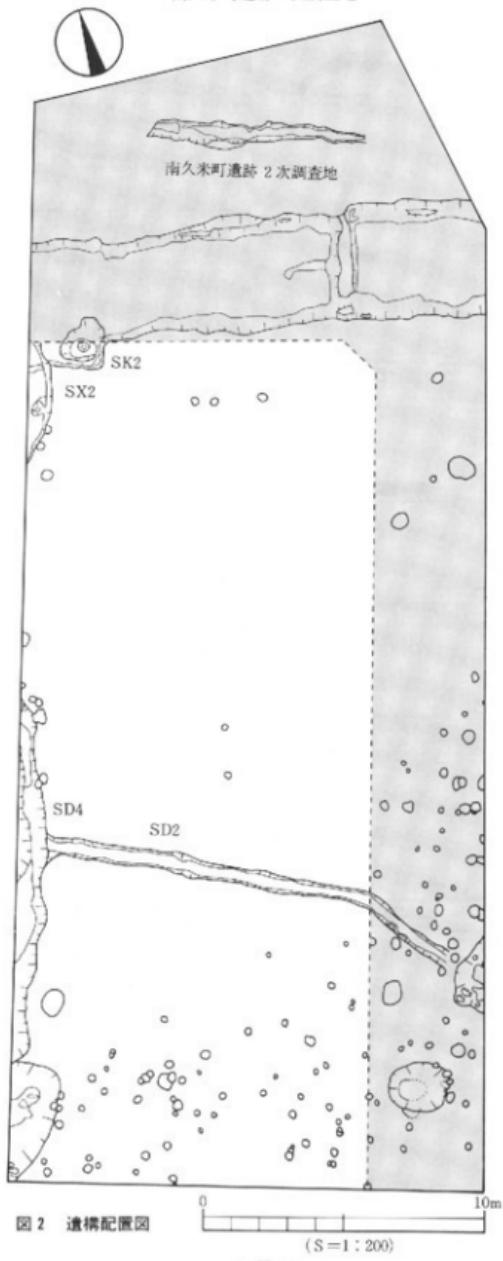


図2 遺構配置図

(S=1:200)

南久米町遺跡 3次調査地

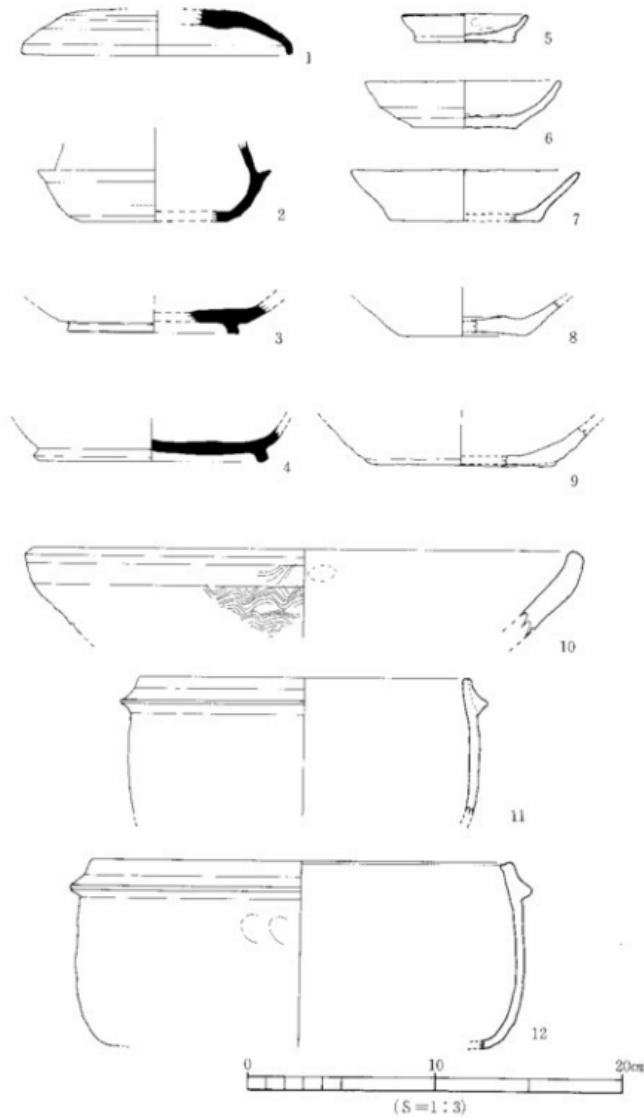


図3 出土遺物実測図



写真1 調査区南部遺構検出状況（北東より）



写真2 三足鍋出土状況（南より）

キシハイジ 来住廃寺18次調査地

所 在 地 来住町797-1、3
期 間 平成4年1月6日～
同年3月31日
面 積 315m²
担 当 西尾・山本



図1 調査地位置図

経過 本調査地は、来住舌状台地の南西辺部にあたり、調査地北側部には久米官衙遺跡群、方1町規模に区画された回廊状遺構や来住廃寺跡がある。調査地は来住廃寺遺跡15次調査(年報IV)の3区下段地区西隣、海拔34.7mの地点である。調査が狭小の為、約3.5mの整地盛土を場外搬出し、南北にトレンチを3本設定し、堆積層位に従い順次掘り下げを行った。本調査は民間の宅地開発に伴う事前調査である。

遺構・遺物 基本層位(図2)は第Ⅰ層旧耕作土、第Ⅱ層は耕作土床土、第Ⅲ層は須恵器(古代)・土師器(古代・中世)・瓦器(中世)・陶磁器(中世)・瓦類(古代)の他、木製品・桃核などの植物遺体、炭化米・獸骨・齒を包含する。第Ⅳ層は須恵器(古墳)・木製品・植物遺体を包含する。第Ⅴ層は弥生土器(中期・後期)の遺物を含むが包含量は少なく、かつ小片であった。その他に管玉が1点出土した。第Ⅵ層は弥生土器(中期・後期)を包含する。

遺構は、第Ⅲ層中より木杭を計29本、第Ⅴ層上面より溝を1条検出している。検出された木杭は、先端部が地中に突き刺しやすいように尖がらされている。木杭材は直径3~8cm大小の小原木が使用されており、中には表皮が残っているものもあった。溝SD1は、調査区2区北西隅から1区中央北よりにかけての検出である。長さ12.1m、幅1.1~1.8m、深さ10~15cmを測り、断面形は皿状である。埋土は黒色粘性土である。遺物は須恵器片の他、混入である弥生土器片が出土した。

小結 本調査地は、昭和51年度調査(一般国道11号線松山東部道路関係調査報告書・I)による来住I・II・III遺跡で確認されていた旧河川の一部であると思われ、15次調査3区下段地区と同様な土層堆積が確認されたものである。現在台地の南を流れる小野川は舌状台地先端付近より大きく迂廻しているが、弥生時代中期から中世にかけては来住の台地の近接地を流れていた可能性がある。旧河川が西に流れる事、各堆積層の比高差、遺物の出土量から、本調査より東部にかけて水深があったものと想定され、旧地形を復元するうえでの好資料になると思われる。

求住庵寺 I8 次調査地

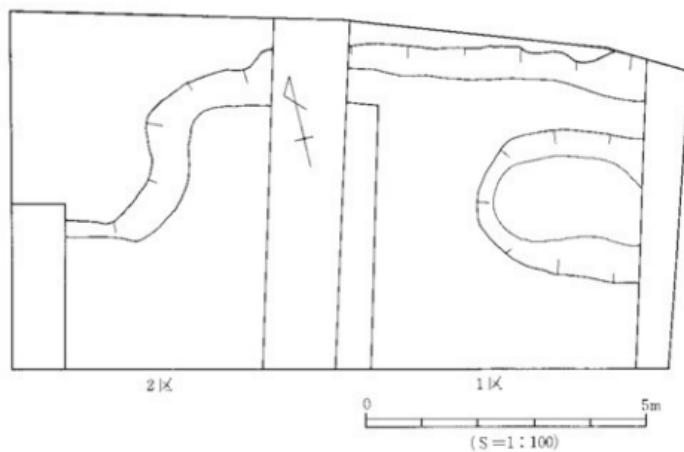


図2 遺構配置図

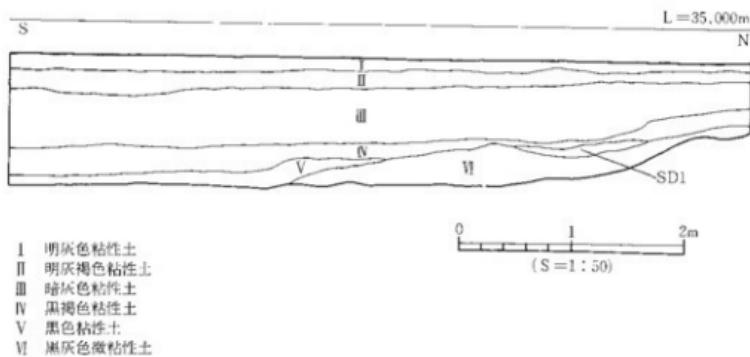


図3 基本層位図

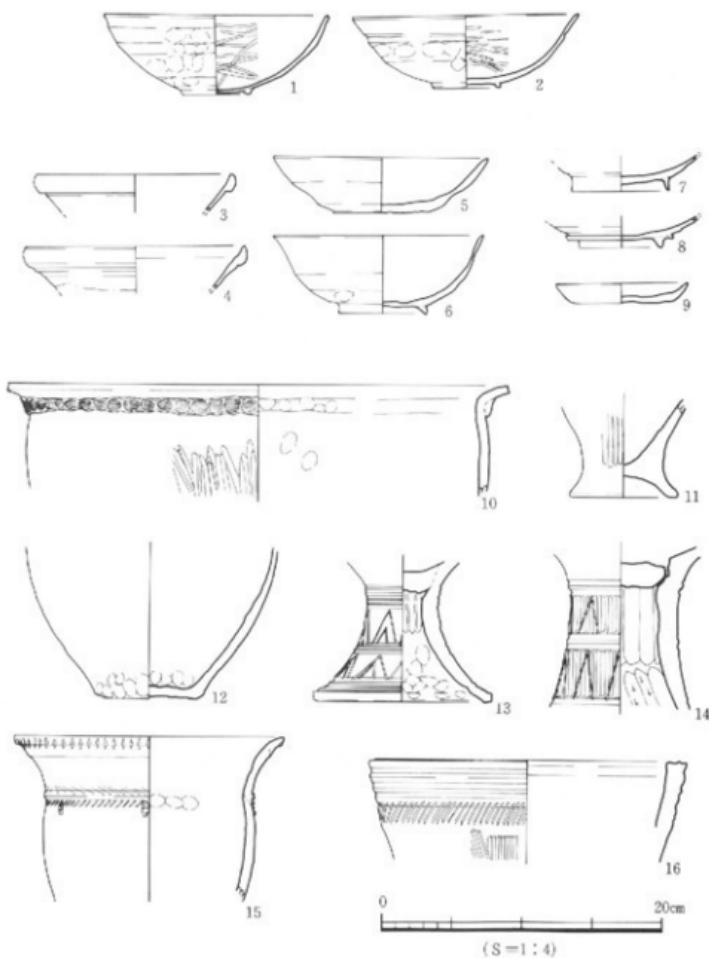


図 4 包含層出土遺物実測図



写真1 調査地全景（南東より）



写真2 遺物出土状況（①②第III層、③④第VI層）

キシハイジ 来住廃寺19次調査地

所 在 地 来住町844・845番地
期 間 平成4年4月7日～
平成5年2月26日
面 積 1,864m²
担 当 西尾・水本・小笠原

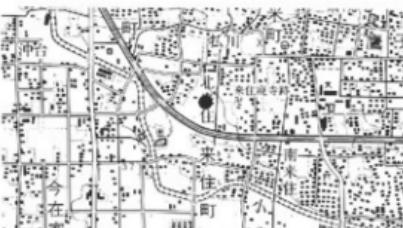


図1 調査地位置図

経過 本遺跡は松山平野東部、洪積台地からなる米住舌状台地西端近くに立地し、同台地上には、縄文後期をはじめとする各期の遺跡が集中する地域である。近年の調査により、来住廃寺遺構に重複する方1町規模の回廊状遺構を発見し、中から大型建物(『松山市埋蔵文化財調査年報III』参照)を確認している。また同廃寺を含む西北一帯、東西約5町範囲からは、7世紀代の官衙に関する遺跡(久米宮衙遺跡群: 同年報II・III参照)が発見されている地域である。

本調査は、大型回廊状遺構内南面の中心に相当する場所である。



図2 調査地周囲の遺構配置図

遺構・遺物 層序は、第 1 層 造成土（35cm 前後）、第 2 層 耕作土 I・II（30cm 前後）第 3 層 灰茶褐色土（1cm～20cm）で、第 4 層 暗灰褐色土（包含層）（1cm～20cm）は弥生土器・須恵器・土師器・瓦片等を含む。第 5 層 黄褐色土（地山）である。

遺構は、門跡（正門）1 棟・掘立柱建物 3 棟・南面回廊状遺構 1 棟、柵列 2 条・土壙 38 基・溝 7 条・性格不明遺構 20 基・柱穴 574 基を検出した。

掘立柱建物 3 棟は、調査区 1 区北部に位置し、建物方位は真北方向である。

S B-1 の規模は、桁行 5 間（8.17m）×梁行 2 間（推定 3.965m）を検出した。同遺構の柱掘り方は、25.5cm～45.5cm 前後の方形または円形である。柱痕跡は、9.5cm～20.5cm、深さは 9cm～32cm を測る。遺物は弥生土器・土師器が出土した。検出遺構の位置や方向性などから見て、寺院存続期の建物としての可能性がある。

S B-2 の規模は、南北 4 間（8.96m）×東西 2 間分（5.66m）を検出した。同遺構の柱掘り方は、36cm～72.5cm 前後の方形または円形である。柱痕跡は、17cm～24cm、深さは 12cm～39cm を測る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・平瓦片が出土し、柱掘り方より繩縄叩き平瓦片が出土した。出土遺物から見て寺院存続期の建物で、寺域外に建てられた大型建物の可能性がある。

S B-3 の規模は、桁行 2 間分（4.14m）×梁行 2 間（3.75m）を検出した。同遺構の柱掘り方は、32cm～57.5cm 前後の方形または円形である。柱痕跡は、13cm～20cm、深さは 9cm～23cm を測る。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・瓦片が出土し、柱痕から瓦敷を 1 基検出（斜格子叩き平瓦片出土）した。位置や方向性を含めて、S B-1 と同時期に建てられた可能性がある。

S B-4（正門）は、調査区南の一辺が 103m の南面回廊状遺構の南辺中心部に位置する門（正門）である。規模は桁行 3 間（総長 9.13m）×梁行 2 間（総長 6.475m 分）である。同遺構の柱掘り方は 71cm～114cm 前後の長方形又は方形である。柱痕跡も直径 21cm～40cm 前後で両者とも回廊状遺構のものより一回り大きくなっている。深さは中央部東西 3 間分のみ 30cm～37cm となり、他の柱穴より深くなっている。他の柱穴の深さは 7cm～17cm 前後である。遺物は柱穴の柱掘り方より弥生土器・須恵器のみが出土している。

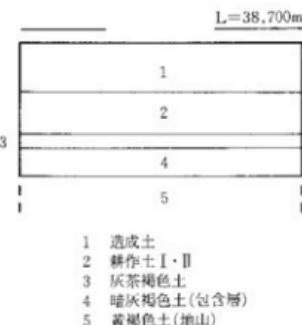


図 3 基本層位図

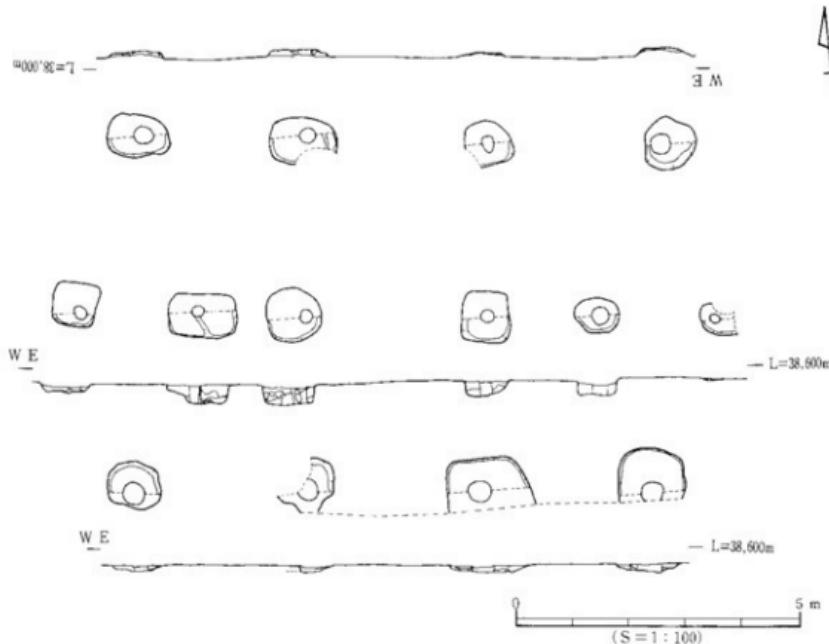


図4 門測量図

回廊状遺構は来住庵寺の西側地で、辺約100mの方形に一周巡る遺構である。今回は、門から西へとりついだ3区から4区の回廊状遺構外側柱列・東西13間（総長23.60m）、内側柱列・東西13間（総長23.415m）を検出した。同遺構の外側柱列の柱掘り方は、34.25cm～77cm、内側柱列の柱掘り方は、30cm～76.5cmの方形または円形である。柱痕跡は、外側柱列12cm～22cm・内側柱列12cm～21.25cm、深さは外側柱列7.5cm～33cm・内側柱列7.5cm～33.1cmである。南面回廊状遺構の方向性は、4°東に振っている。遺物は柱穴の柱掘り方より弥生土器・須恵器が出土した。

SA-1（柵列）は、今回1・2・4区から南北10間（総長22.90m）に接続してL字状に折れ曲がる東西11間分（総長24.20m）を検出した。東西の柱穴は、1間あたり2.2mのほぼ等間隔で並んでいるが、南北柱穴は1間あたり2.1m～2.4mと一定でない。同遺構の柱掘り方は52.5cm～102.25cm前後の方形または円形である。柱痕跡は、10cm～33.5cm前後、深さは20cm～57.5cmを測り、遺物は柱穴の柱掘り方より弥生土器と須恵器（杯身底部）が出土して

いる。柵列の方向性は、4° 東に振っており、検出遺構の方向性などから見て回廊状遺構存在期の建物としての可能性がある。

S A - 2 は、調査区 1 区北に位置し東西 6 間分（総長11.355m）を検出した。東西の柱間は 1 間あたり1.50m～1.80mと一定でない。同遺構の柱掘り方は、60.75cm～85.75cm前後の方形である。柱痕跡は、17.5cm～27.5cm前後、深さは 9 cm～24cm を測る。遺物は、弥生土器・土師器が出土した。柵列の方向性は真北であり、遺構の時期は前述の S B - 1 ・ S B - 3 又は S B - 2 の存在時期である寺院存続期の可能性がある。

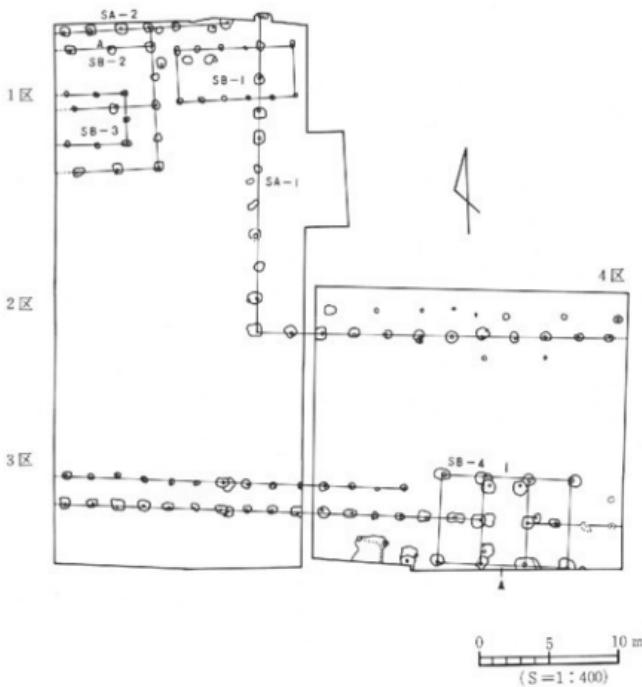


図 5 遺構配置図

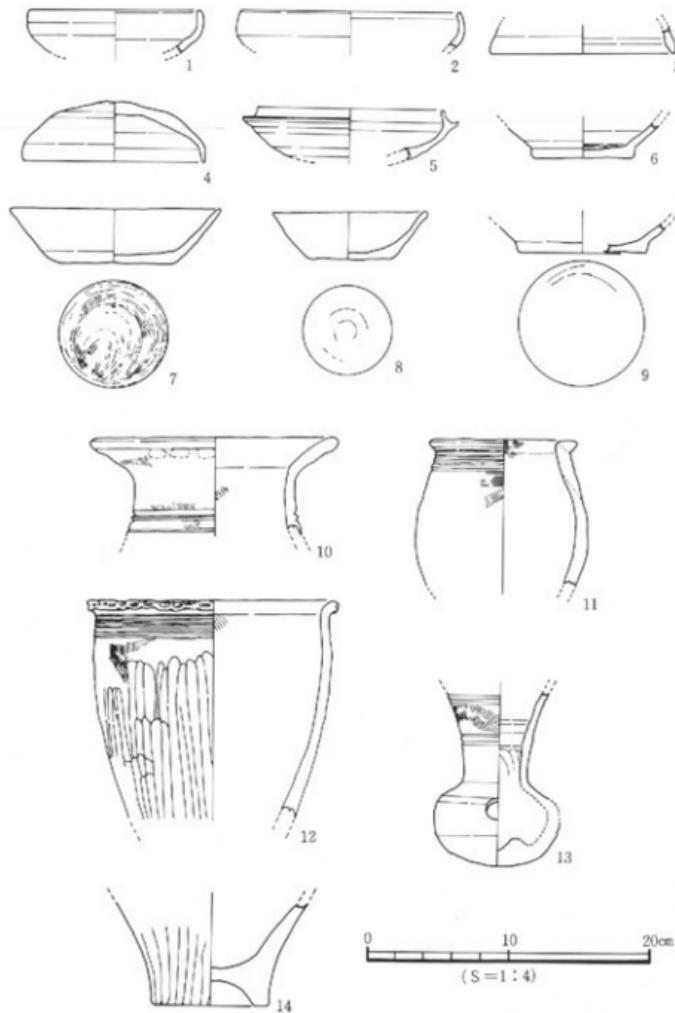


図 6 出土遺物実測図

来往庵寺 19 次調査地



写真1 4区調査区全景（南西より）

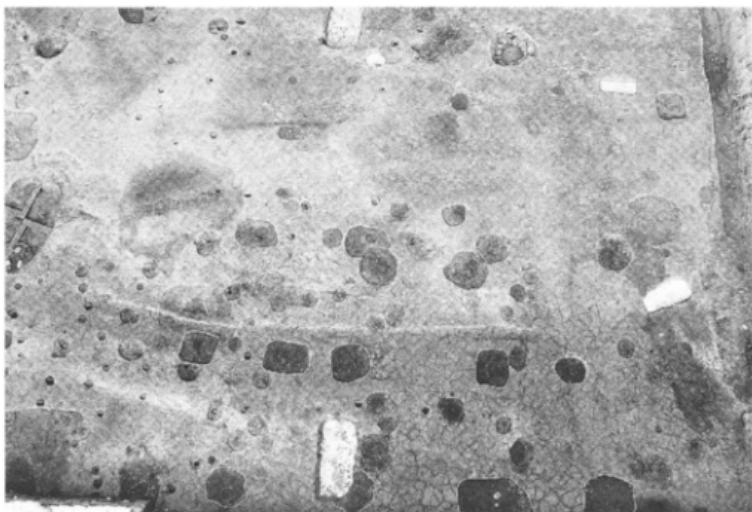


写真2 SB-4(門)検出状況（南より）

キシハイジ 来住廃寺20次調査地

所在地 来住町603-2・603-6

期間 平成4年8月4日～
同年10月13日

面積 539.93m²

担当 西尾・水本・小笠原



図1 調査地位置図

経過 本遺跡は松山平野東部、小野川右岸に面する来住舌状台地の南西辺部に立地する。周辺部には、調査区北方約150mに来住廃寺や回廊状遺構が所在し、また、南側隣接地では県教育委員会が行った来住IV・V・VI遺跡（一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書II：1981年度参照）などがある。調査要因は、二浪証券株式会社の店舗建設に伴う事前緊急調査である。

層序は、第1層 造成土(4.5cm～58.5cm)、
第2層 耕作土(灰色土)(2cm～41cm)、第
3層 床土(灰褐色土)(2cm～21.5cm)、第
4層 灰色土(暗茶色混)(1cm～28cm)、第
5層 暗茶褐色粘質土(1cm～20cm)、第6層
茶色粘質土(2.5cm～40cm)、第7層 黄褐色
土(地山)である。

遺構・遺物 検出した遺構は溝1条・土壙2基・性格不明遺構1基・柱穴11基である。

SK-1・2は調査区東に位置し、2基とも削平を受けている。

SK-1の平面プランは楕円形で、規模は長軸1.70m・短軸1.44m、深さ23cmを測る。

遺物は、弥生土器が出土した。

SK-2の平面プランは円形で、規模は直径1.20m・深さ22cm～34cmを測る。遺物は弥生土器が出土した。

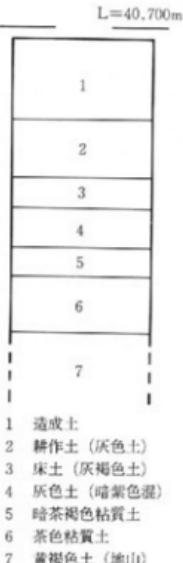


図2 基本層位図

末住庵寺 20 次調査地

S D—1 は調査区西寄りに位置し、南北に調査区外にまで続く遺構である。規模は長軸12m・短軸2.42m~3.35m、深さは32cm~54cmを測る。遺物は弥生時代前期末から弥生時代中期にかけての甕片・壺片が平箱4杯前後出土した。

S X—1 は調査区東で検出した。平面プランは不整椭円形で、規模は長軸1.86m・短軸1.28m、深さは11cm~26cmを測る。遺物は出土しなかった。

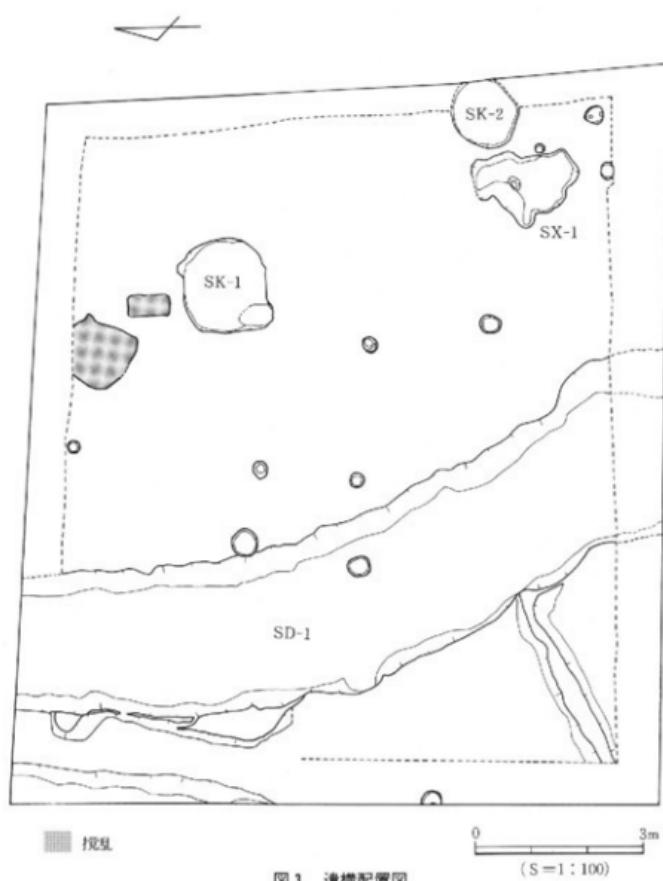


図3 遺構配置図

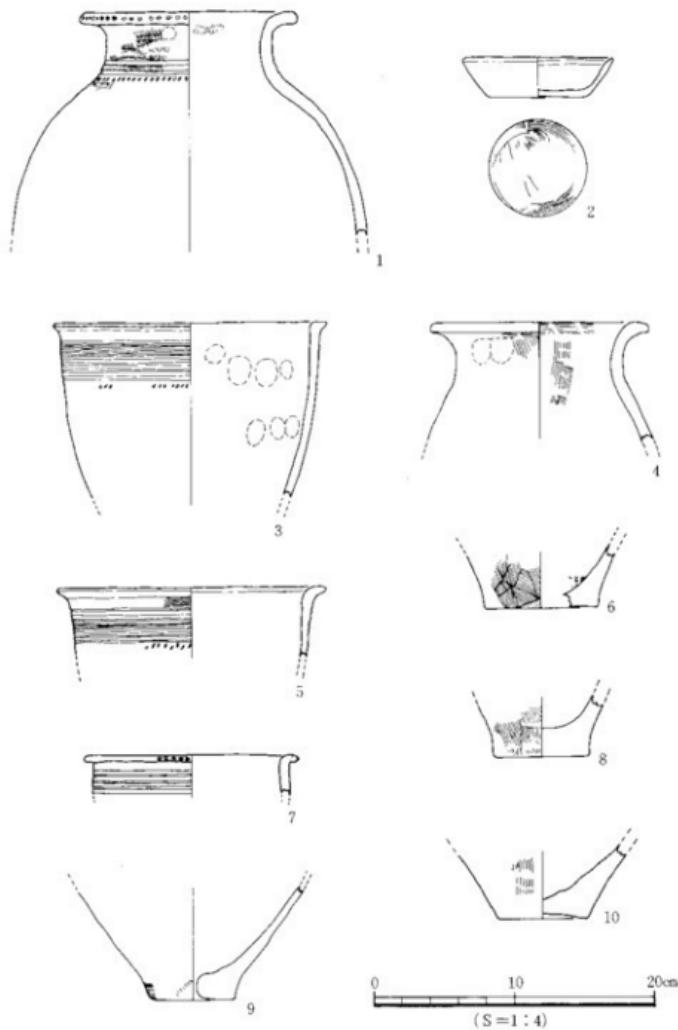


図4 出土遺物実測図



写真1 調査区全景（北より）



写真2 遺物出土状況（北東より）

キシハイジ 来住廃寺21次調査地

所在地 来住町575・576-1
 期間 平成4年8月1日～
 平成5年3月31日
 面積 1,820m²
 担当 西尾・水本・小笠原



図1 調査部位図

経過 本遺跡は松山城の南東4.5km、洪積台地からなる来住舌状台地西端近くに立地する。来住台地西端一帯は、来住庵寺を含めて古代久米郡(評)の政治的中枢地域として大きく注目されている地域である。調査地は、来住庵寺講堂から東北方60m～90m位置の水田地を対象とした。

遺構・遺物 本調査地からは、最低でも4時期以上（弥生時代・古墳時代・中世～近世）の遺物包含層及び遺構を確認した。

T-2層序は、第1層 耕作土①・②(30cm前後)、第2層 茶褐色土(10cm~15cm)で第3層 暗褐色土(遺物包含層)(20cm)は主として弥生土器・須恵器を含む層である。第4層は黄褐色土(地山)である。上層遺構面で検出された遺構は柱穴132基(S P-1~S P-132)、溝7条、下層遺構面で検出された遺構は、方形竪穴遺構1基・土壤5基・性格不明遺構2基・柱穴50基(S P-133~S P-182)である。

上層遺構（中世～近世）は、昨年度（平成3年）より検出した総柱の掘立柱建物群の南側範囲についての広がりを今年度（平成4年度）に追求した。

この結果、東部検出遺構は東西4間(東西総長6.9m)×南北3間分(南北総長4.68m)を検出した。柱穴は方形で規模は径45cm～67.5cm、深さ22cm～24cmを測る。

S D-1～S D-7 は、南北長3.68m～6.49m分、幅21cm～57cm、深さ24.5cm～33cmを検出し、四字状を呈す同様な形状の掘り方であるが、S D-6・7のみ

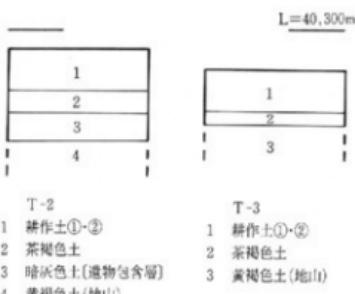


図2 基本層位図

埋土上位に版築状の整地土がある。遺物は平成 3 年度に S D—7 から中世代の土師皿 2 点と瓦片 1 点が出土した。

中央部検出遺構は、前述の東部の建物と若干角度を異にする掘立柱建物である。東西 4 間（総長 7.7m）×南北 4 間分（総長 6.2m）と東西 6 間（総長 11m）×南北 4 間分（総長 6.4m）になる建物 2 棟を検出したが、この外に 1 棟もしくは 2 棟以上の建物が調査区外に延びると推定される。柱穴は方形で、径 49.5cm～77cm・深さ 24.4cm～26cm を測る。なお、前述の建物は溝との切り合い関係により、前述の建物が先行する建物と推定される。遺物は平成 3 年度に瓦質の茶釜片とおぼしき破片が出土したのみである。

西部検出の遺構は、掘立柱建物群東西 4 間（総長 7.4m）×南北 4 間分（総長 5.8m）の建物である。柱穴は方形で、規模は径 44.5cm～64.5cm・深さ 4 cm～22cm を測る。この外に棚状の遺構を検出し調査区南北に 1 列に並んでいるが途中中央で切れている。南北 3 間分（総長 4.15m）と南北 2 間分（総長 3.05m）を検出した。柱穴は方形で、規模は径 45cm～60cm・深さ 6 cm～23cm を測る。

柱穴は、上層遺構面から 132 基を検出した（S P—1～S P—132）。柱穴は方形で、規模は径 44.5cm～77cm・深さ 4 cm～32cm を測る。同遺構検出面からの遺物は中・近世にかけての土器・瓦類が出土した。

下層遺構面から検出した S X—1（方形竪穴遺構）は調査区 T—2 西部に位置する。規模は、長軸 3.68m・短軸 2.34m・深さ 9 cm～18cm を測る。遺構中央部から少量の炭とともにかと思われる施設を検出し、遺物は弥生土器（前期）が出土した。住居址としての可能性がある。

土壤は調査区中央から西で 5 基検出した（S K—1～S K—5）。S K—1 は、長軸 1.44m・短軸 67cm・深さ 24cm を測り、調査区外まで続く遺構である。遺物は、弥生前期末葉の壺片が出土した。

S K—2 は直径 1.30m・深さ 18cm を測り、遺物は弥生前期末葉の壺・甕片類（口縁部外面に多条の沈線と列点文を施す壺）が出土した。

S K—3 は直径 91cm・深さ 13cm を測り、遺物は弥生前期末葉の壺・甕片類が出土した。

S K—4 は直径 91cm・深さ 26cm を測り、遺物は弥生土器片が出土した。

S K—5 は長軸 1.58m・短軸 90cm・深さ 37cm を測り、調査区外まで続く遺構である。遺物は弥生前期末葉の壺片が出土した。

柱穴は、下層遺構面から 50 基を検出した（S P—133～S P—182）。柱穴は円形で、規模は径 13cm～77.5cm・深さ 3.5cm～36.5cm を測る。遺物は弥生期～古墳期の土器が検出されており、現時点ではその時期のものとしか言えない。

S X—1 は調査区西に位置し、平面プランは不整形な長円形で、規模は長軸 1.37m・短軸 59cm・深さ 8 cm～10cm を測る。遺物は弥生土器が出土した。

来住庵寺 21 次調査地

S X-2 は S X-1 の東側に位置し、平面プランは不整形な円形で、規模は長軸1.37m・短軸59cm・深さ 8 cm~10cmを測る。遺物は弥生土器が出土した。

T-3 層序は、第1層 耕作土①・②(30cm前後)、第2層 茶褐色土(3.5cm~8.5cm)、第4層 黄褐色土(地山)である。

T-3 で検出された遺構は、柱穴44基・性格不明遺構6基を検出した。柱穴44基の平面プランは円形で、規模は径12cm~70cm・深さ 4 cm~32cmを測る。遺物は弥生期~古墳期にかけての土器が出土している。

S X-1 ~ S X-6 は調査区中央から北で検出した。遺物は S X-6 の下位から弥生土器が出土したが、他の遺構からは遺物が出土しなかった。

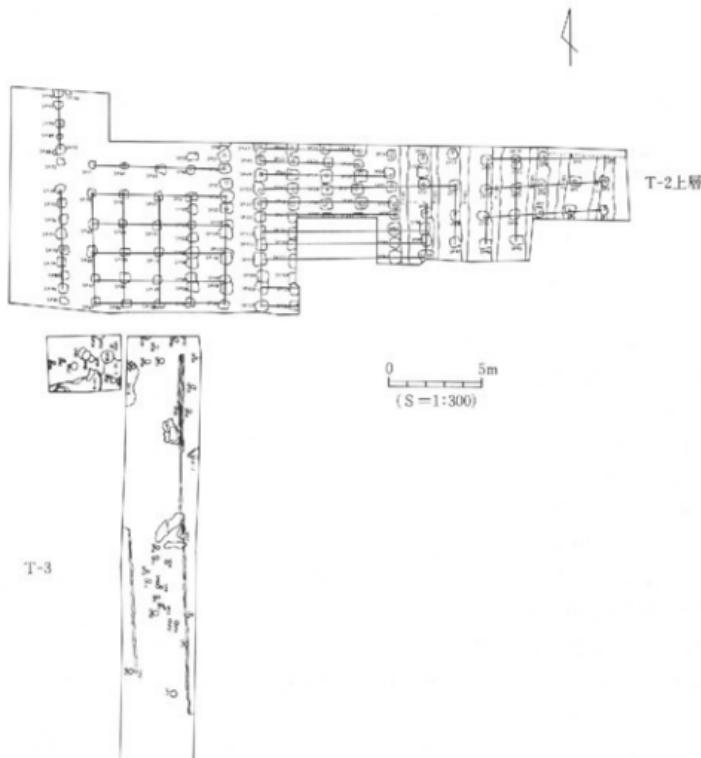


図3 遺構配置図(1)

米住廃寺 21 次調査地

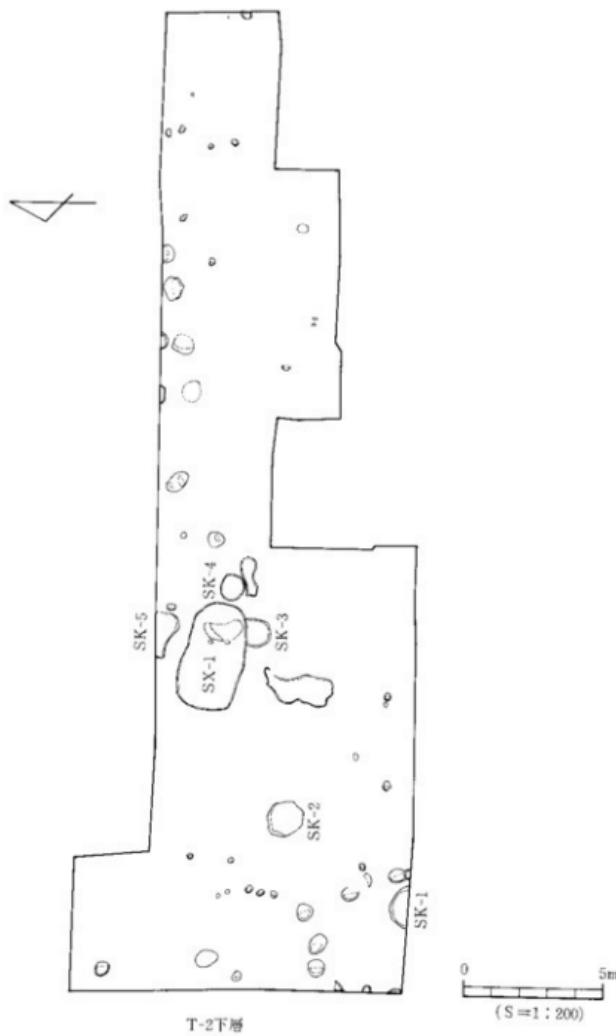


図4 造構配置図(2)

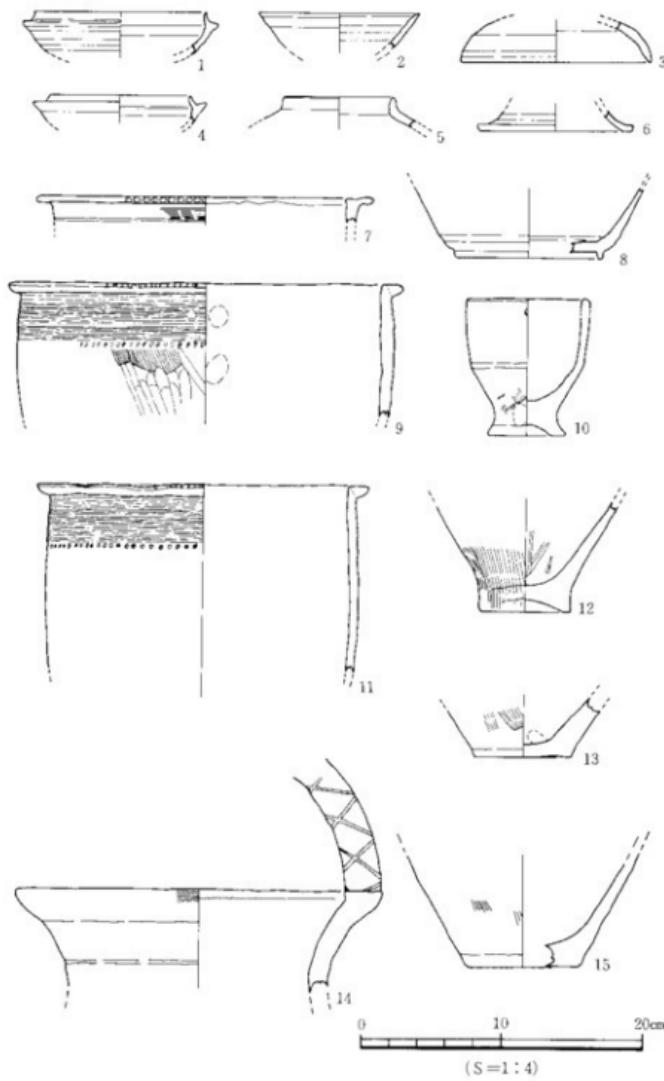


図 5 出土遺物実測図

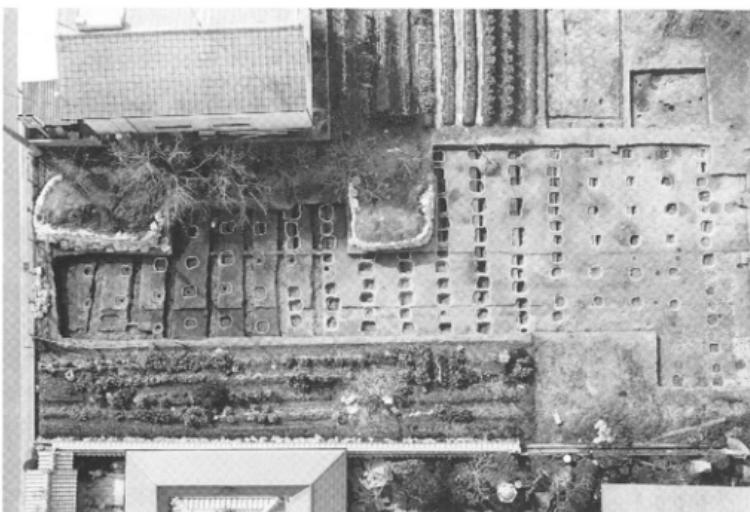


写真1 T-2全景（北上方より）検出建物群



写真2 T-2下層遺構S臼ー1検出状況（西より）

キシマチ 来住町遺跡4次調査地

所 在 地 来住町524-1
期 間 平成4年4月15日～
同年5月2日
面 積 988m²
担 当 田城・高尾



図1 調査地位位置図

経過 本調査は、「127 来住廃寺跡」包含地内における宅地開発に伴う事前の発掘調査である。試掘調査の結果、ほとんどの区域において粘土採取による削平のため遺構・遺物は確認されず、一部に須恵器・土師器を多量に含む包含層を検出した。よって、その部分的な調査を実施することとなった。

本遺跡は、松山平野東部に広がる来住台地上の標高38.5mを測る旧水田下に立地し、西方に来住廃寺跡、北方に3次調査地等、古代集落で知られる久米高畠遺跡群・来住遺跡群等を含めた有数の遺跡地帯の中に位置している。

遺構・遺物 本遺跡の基本層序は、第1層表土（耕作土）、第2層造成土（真砂土）、第3層黒褐色土（古代遺物包含層）、第4層灰褐色土、第5層暗褐色土（古墳時代遺物包含層）、第6層灰白色土である。

確認された遺構は、溝状遺構1条のみであり、遺物は弥生土器底部26点、土師器高环脚部8点、須恵軒平瓦片1点、石器10点、須恵器では高环2点、直口壺3点、环身6点、环蓋4点、平瓶1点、大型壺2点等であった。瓦片や奈良時代の土師器皿が第3層から検出されたほかは、ほとんどが第5層からの出土であった。そのうち弥生土器片は、第6層地山上面に密着しており、土器の遺存状態から溝上流からの流れ込みによるものと推測される。また、溝の底面と東岸とでは80cm、西岸とでは120cmのそれぞれ比高差があり、南から北へ緩傾斜していることも確認された。この溝状遺構は、昭和63年11月に調査された本調査地南東60mに位置する来住町遺跡1次調査地（年報II参照）から検出された自然流路の埋土、包含遺物などが時期的にもほぼ一致しており、流路の方向性からしても結びつく可能性は大きいものと推察できるが、「溝」か「自然流路」かについては2遺跡を比較しただけでは判然とせず、今後の課題としておきたい。

小結 本調査において弥生時代から古代に及ぶ遺構・遺物を確認した。検出された須恵器からTK-43・209の範囲に入る环身・环蓋等が多く、6世紀後半から7世紀初頭にかけて本遺跡周辺に集落があったことを示唆するものと考えられる。



写真 1 出土遺物

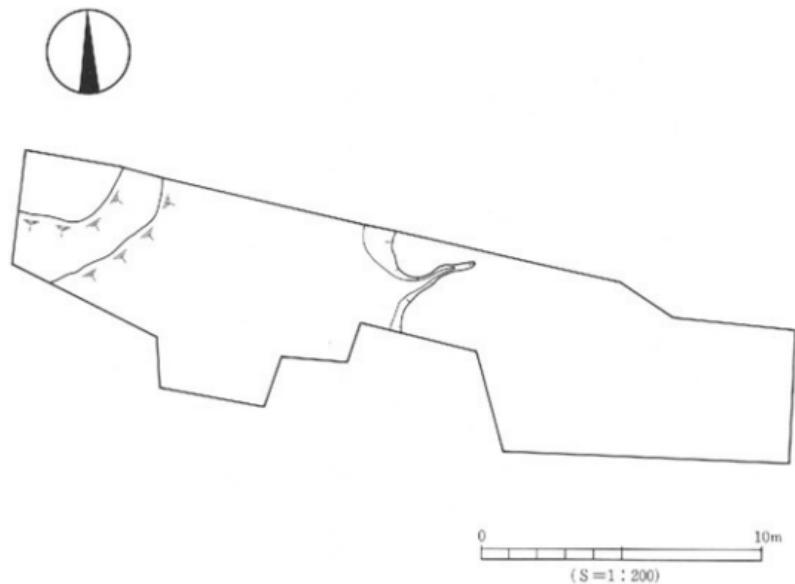


図 2 造構配置図

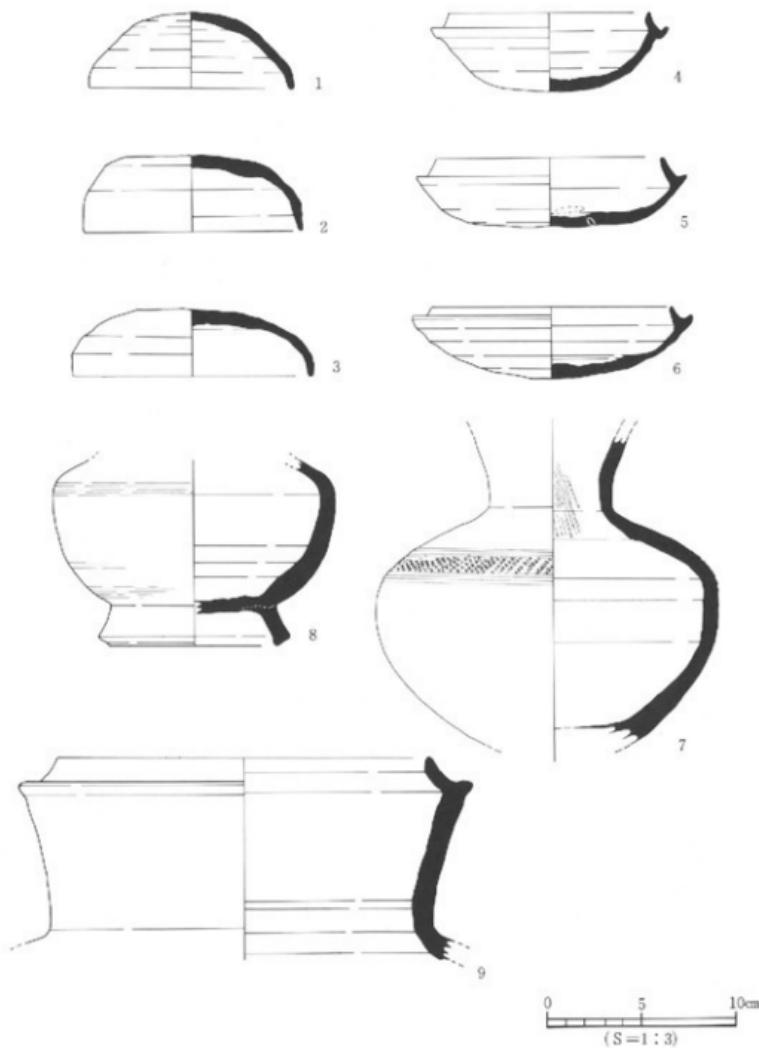


図 3 出土遺物実測図

来住町遺跡 4 次調査地

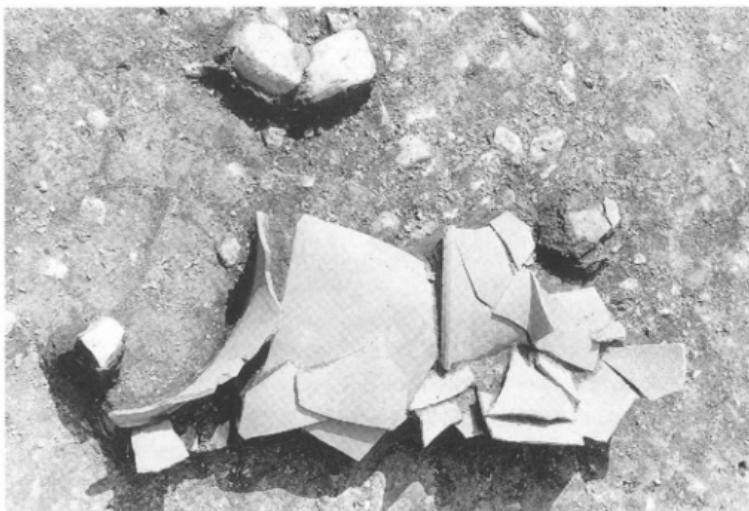


写真2 須恵器 豊出土状況（東南より）



写真3 調査作業風景（西より）

タカノコ シンバタ 鷹子新畠遺跡 2次調査地

所在地 松山市鷹子町628-1

期間 平成4年6月10日～
同年8月20日

面積 1,800m²

担当 栗田(茂)・大森



図1 調査地位置図

経過 「鷹子遺物包含地」内における民間宅地開発に伴う事前調査である。調査地は、松山平野南東部の米住台地上にあって、国指定史跡「来住庵寺」の西北約900m、標高50mの地点にある。平成元年、南東に隣接する地点の発掘調査が「鷹子新畠遺跡」として行われ、7世紀初頭の方形堅穴住居址の検出をはじめとして、弥生土器、土師器、須恵器などの遺物が採集されている。

遺構・遺物 検出された遺構は、弥生時代前期・中期、古墳時代後期、中世と各時代にわたっている。

最も遡る遺構は、調査地北西隅で検出された東西溝S D-2、土壙SK-13で、弥生時代前期後葉の甕、壺を出土している。調査地南部を主とする部分で検出された、不整形の溝状または堅穴遺構はSXという略号で示されているが、このうちSX-2・4からは弥生時代中期中葉の比較的良好な遺物群が出土しており、これに続く中期後葉の遺構にはSD-1や、古墳時代の方形堅穴住居址SB-2に切られて検出された土壙SK-15がある。古墳時代の遺構は、調査地北西隅部検出の計4棟の方形堅穴住居址群で、遺物の出土をみたのはSB-1・2の2棟である。SB-2は北辺にカマドを持つ5世紀末の住居址で、SB-1はこれよりも下る時期のものである。また、切り合いからみると、SB-4が最も古く、SB-3はこのSB-4よりも新しいことはわかっているが、SB-2との前後関係は不詳である。

弥生時代や古墳時代の遺構が黒色、或いは黒褐色土で埋まっているのに対して、これらの遺構を切る調査地北東部の小ピット群や棚列、石組井戸SE-1、南部の8間2間という長大な掘立柱建物SB-5や一部の土壙の埋土は暗灰色土であることが共通しており、ほぼ同時期の遺構とみてよい。井戸SE-1からは瓦片、土師器鍋片などを出土しており、14世紀代を前後する時期の遺構である。

小結 調査の結果、弥生時代中期以降の遺構は調査地中央以南に濃く、古墳時代の集落は調査地以北に展開する様相が強いことがわかった。古代については、南方の台地縁辺、古墳敷遺跡周辺や西方の来住庵寺周辺がその中心となるものと思われ、この地点では空白である。

廣子新畠遺跡 2次調査地

その後、中世以降ふたたび調査地全域に集落関係の遺構が展開している。

弥生中期の不整形遺構 SX の性格には課題があるが、SX-2・5・6、SK-17の配置には周溝墓の可能性が残されている。今後、周辺地域、特に調査地南部の調査には注目しておく必要があろう。

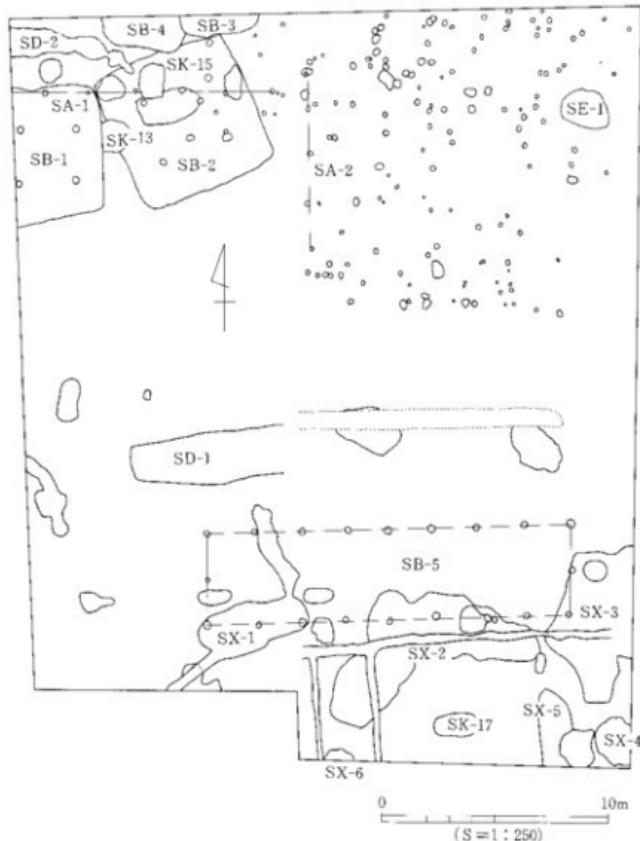


図2 遺構配置図

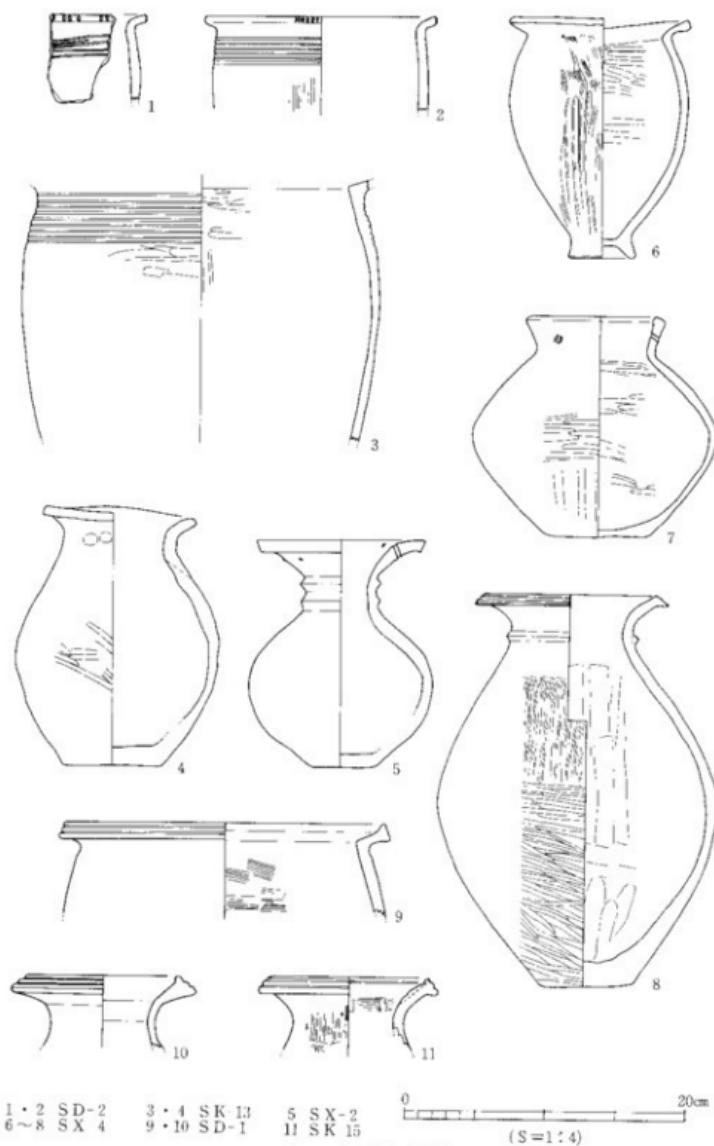


图 3 出土遗物实测图

廣子新畑遺跡 2 次調査地

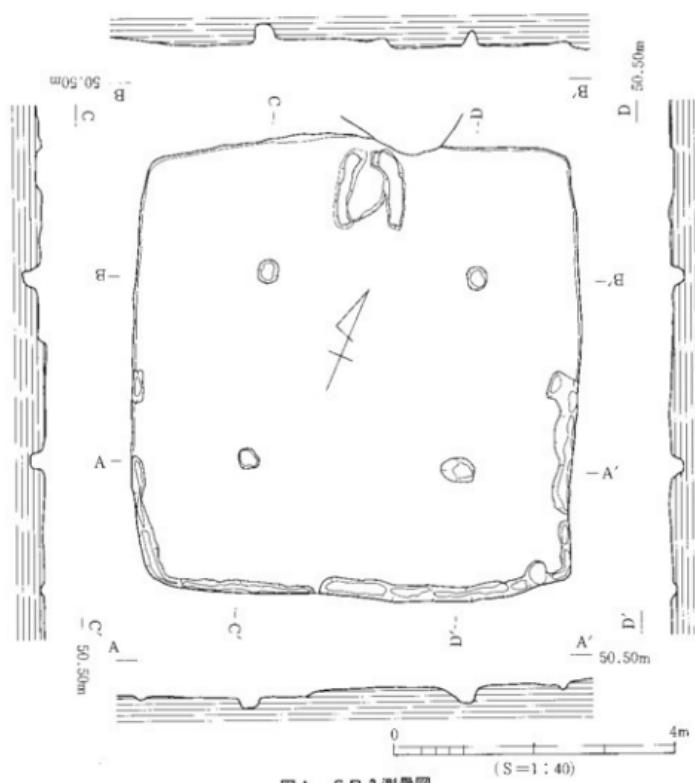


図4 SB 2測量図

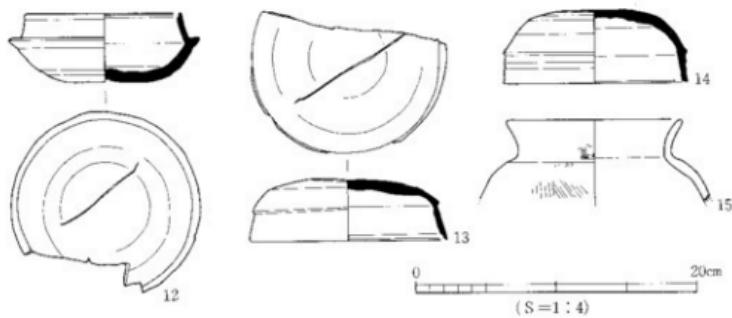


図5 SB 2出土遺物実測図

久米窪田森元遺跡 3次調査地

所在地 久米窪田町856-1
期間 平成4年11月1日～
同年2月26日
面積 902m²
担当 西尾・山本



図1 調査地位置図

経過 本調査地は廬子遺物包含地における店舗新設に伴う事前調査である。平成3年7月に試掘調査を実施した。調査の結果、土師器・須恵器を含む包含層と柱穴5基、土壙1基・溝2条と調査区の東側で上師器・須恵器片の他、植物遺体を含む落ち込み部を確認した。

本調査区は、来住舌状台地東部の標高46.50mに立地する。調査地周辺には、久米窪田遺跡I～V次調査（県教委）、久米窪田森元遺跡1・2次調査、古屋敷遺跡A・B・C調査などの遺跡が密集する地域である。

遺構・遺物 検出遺構は掘立柱建物1棟、柵列2条、溝4条、土壙3基、柱穴17基、自然流路3条である。掘立柱建物S B 1は調査区西部包含層を掘り下げ後の検出であり、2間×3間以上の建物と考えられる。梁行長さ4m、桁行長さ3.3mを測る東西棟ではあるが、北でN33°Eへ偏している。建物を構成する柱穴は、方形もしくは長方形の掘り方である。溝S D 3は検出長13.5m、幅約65cm、深さ約30cmを測り船底状の断面形を呈する。埋土は地山土の搅拌土がブロック状に入るものである。遺物は須恵器片、木片、種子が出土した。またS D 3は調査区北壁際でほぼ直角に折れ曲がり西へ延びるものと思われS B 1と同一軸方向を示すものである。

調査区中央より東部の落ち込み部で3条の流路の堆積を確認した。S R 1に相当する堆積土はほとんど重機にて掘り下げを行った為下層の一部分のみの調査ではあったが、土師器片、須恵器片、木製品、種子を検出した。出土木製品中には1点木筒が確認され字の判読には至らなかつたが、墨痕（写真③）が認められ（奈良文研）、現在保存処理中である。

小結 本調査地からは台地落ち際に堆積する遺物包含層や遺構・遺物を検出した。この中で木筒の出土は、前述の遺物包含層より出土し、同層中には7～8世紀中葉の須恵器が共伴するものである。これまで本調査地北側に近接する久米窪田II遺跡よりの木筒出土例があり、これらとの関係を含め、今後の周辺地調査を含めた研究が重要である。

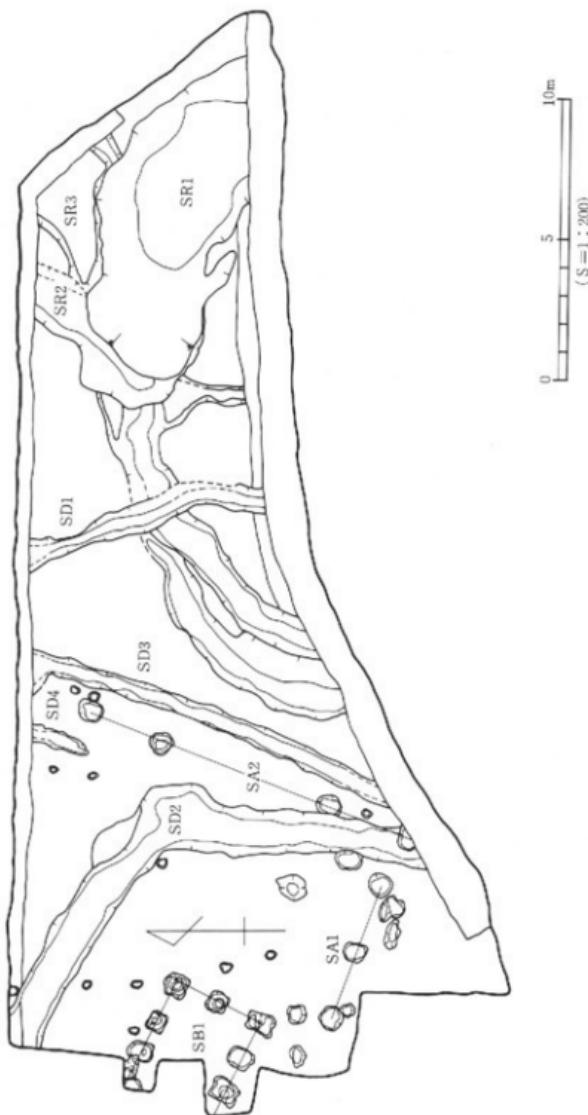


図2 遺構配置図

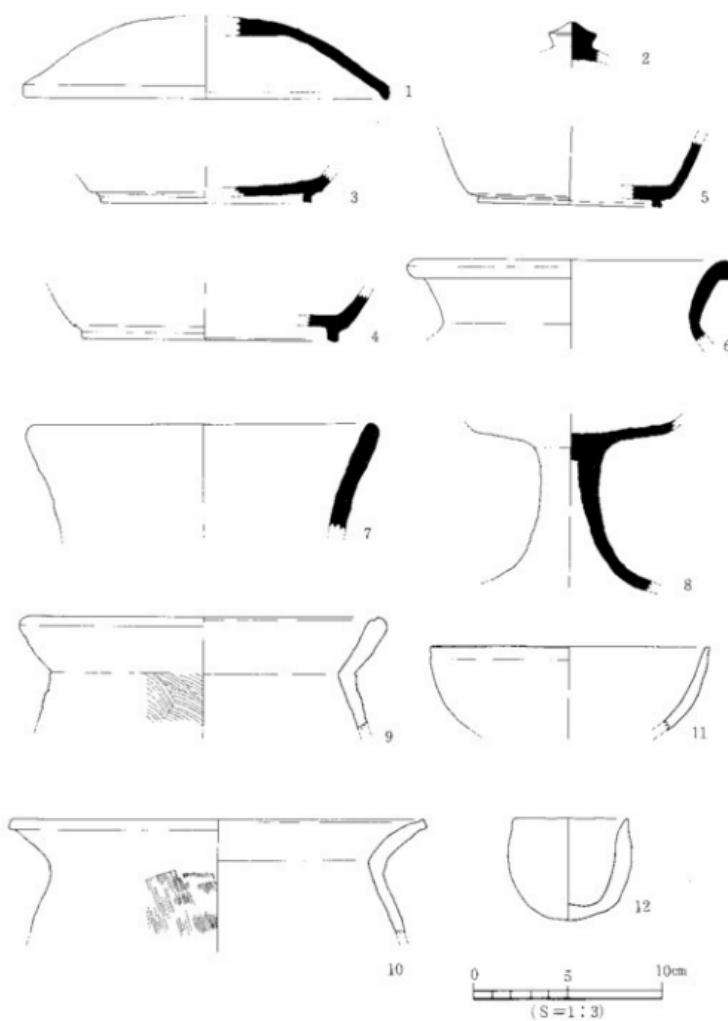


図3 SR 1 出土遺物実測図

久米岸田森元遺跡 3次調査地



写真1 調査地全景（東より）



写真2 調査地西部（西より）



写真3 SR 1出土木簡

松山市埋蔵文化財調査関係資料

例 言

1. 本編は、松山市教育委員会文化教育課・婦松山市生涯学習振興財団・松山市埋蔵文化財センターが実施した埋蔵文化財確認調査資料である。
2. 今回は平成4年度（申請番号1号～129号、平成4年4月1日～平成5年3月31日迄）の資料を取り扱う。なお、平成3年度以前の資料については、「松山市文化財調査年報I（昭和60～61年度）」「同年報II（昭和62～63年度）」「同年報III（平成元～2年度）」「同年報IV（平成2～3年度）」を参照されたい。
3. 資料作成（一覧表及び付録図）は、相原清二、武正良浩、西原聖二が行った。
4. 表中の番号は、埋蔵文化財確認願いの申請番号に準ずるものである。また、本格調査一覧については平成4年度内に調査を開始した遺跡を取り扱う。
5. 付録図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図三津浜・松山北部・郡中・松山南部を使用した。
6. 一覧の略記について
 - ①面積：調査対象面積、小数点以下四捨五入
 - ②標高：地表面、（　）調査区内平均値
 - ③調査目的：公・施主公共団体、私・施主一般
 - ④調査方法：未は未調査等

平成4年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧

(1)

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
1	道後北代9-5	178	33.0	私	試掘			
2	祝谷5丁目644-2	191	47.4	私	試掘			
3	桑原2丁目860-7	118	37.8	私	未			
4	水堀町1128	1,565	57.2	私	試掘			
5	内宮町209-2外2筆	312	13.4	私	試掘			
6	鹿子町149-4	517	48.0	私	試掘			
7	太山寺町乙258-10外	9,789	38.3	私	試掘			
8	南江戸5丁目554	1,107	13.6	私	試掘			
9	南上原町179-1	498	39.7	私	試掘	包含層	土師器	本格調査要
10	西石井町197-2	234	21.1	私	試掘			
11	桑原1丁目809-1	273	36.2	私	試掘			
12	来住町615-1	370	37.4	私	試掘			
13	鷹子町3-64	2,132	44.6	私	試掘			
14	桑原2丁目1865-6	166	35.3	私	試掘			
15	今在家町20-1	835	32.2	私	試掘			
16	道後喜多町1331-9	316	31.4	私	試掘			
17	桑原6丁目707-2、3	231	35.7	私	試掘			
18	久米塚川町1121-2	571	43.5	私	試掘			

平成4年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧

(2)

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	実施目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
19	桑原3丁目347-2	331	39.3	私	試掘			
20	今在家町103-1外	1,057	32.0	私	試掘			
21	平井町甲1983-3	498	65.0	私	試掘			
22	平井町甲2169-13外	275	68.0	私	試掘			
23	南江戸5丁目1458-1	915	26.0	私	試掘			
24	平井町1367外6笨	3,306	72.0	私	試掘			
25	鷺子町4-4	1,316	41.5	公	未			
26	平井町甲2187-1	2,419	62.5	私	試掘			
27	鷺子町200-3外2笨	291	48.5	私	試掘			
28	西長戸町592-1	262	11.4	私	試掘			
29	東石井町乙9外	1,100		公	踏査	古墳	本格調査要	
30	立花6丁目341-27	104	20.7	私	試掘			
31	細寺町丙12-10、9	3,240	58.0	私	試掘			
32	北斎院町366-1外3笨	207	12.3	私	試掘			
33	東野5丁目甲898-77	365	64.9	私	試掘			
34	西石井町58-2	287	21.1	私	試掘			
35	道後北代2-24	460	32.1	私	試掘	包含層	土器	本格調査要
36	祝谷2丁目乙635-2	174	52.4	私	試掘			
37	桑原1丁目984	1,483	38.4	私	試掘			
38	北斎院町乙56	533	16.5	私	試掘			
39	平井町乙658-54	2,356		私	立会			
40	水泥町368-1	2,915	46.2	私	試掘			
41	博味2丁目外	100,000		公	未			
42	道後今市8-32	595	32.3	私	未			
43	福音寺町493-3	132	27.3	私	試掘			
44	上野町	2,400	52.5	公	試掘	包含層	本格調査要	
45	鹿原1丁目甲62-1	607	41.1	私	未		取り下げ	
46	鷺子町乙1-3	5,000	57.4	私	踏査			
47	久米塙田町1116-5	550	42.5	私	試掘			
48	今在家町192-2外	600	31.6	公	試掘			
49	東方町甲1239-1外	2,400	57.0	公	試掘			
50	東垣生町843外	1,000	4.2	公	試掘			
51	朝生田町外	1,280		公	未			
52	東本町外	8,900		公	未			
53	今在家町191	423	32.0	私	試掘			
54	桑原4丁目411-3	290	40.0	私	試掘			
55	北十郎町573-2	235	24.2	私	試掘			

平成4年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧

(3)

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遭構	遺物	備考
56	桑原3-348	536	39.4	私	試掘			
57	文京町4-10	1,600	25.3	私	試掘			H2, №69~
58	北梅本町甲3240-1	1,553	76.1	私	試掘			
59	福音寺町432-1	364	29.4	私	試掘			
60	中村2丁目30-7	259	28.0	私	試掘			
61	山越1丁目30-3	100	18.5	私	試掘			
62	水泡町367-3外	793	47.7	私	試掘	包含層	赤生土器	本格調査要
63	東野5丁目甲930-43	342	60.0	私	試掘			
64	久米庭田町850-6	207	47.0	私	試掘			
65	鷹子町172-1、2	351	48.7	私	試掘			
66	鷹子町656-7	161	45.8	私	試掘			
67	北斎院町254-3	470	11.2	私	試掘			
68	南斎院町乙66-11、7	831	24.0	私	試掘			
69	拓川町475-1	282	26.8	私	試掘			
70	平井町甲122	427	79.3	私	試掘			
71	南久米町562-1	510	36.8	私	試掘			
72	東方町707外	97	58.2	公	立会			
73	清水町2丁目20-6	129	23.3	私	試掘			
74	水泡町1006-11	338	65.5	私	試掘			
75	平井町541-1	1,050	81.0	公	試掘			
76	北久米町904-1外	163	29.9	私	試掘			
77	朝美2丁目1156-2	301	21.0	私	試掘			
78	博味4丁目202-3	832	40.0	私	試掘			
79	桑原866-1	388	36.5	私	試掘			
80	朝生田町236-1	399	19.1	私	試掘			
81	辻町2-3	208	13.2	私	試掘			
82	太山寺町甲1459	8,500		公	未			
83	東野5丁目甲835	2,952	65.0	私	試掘	古墳		本格調査要
84	北久米町854-2	413	25.9	私	試掘			
85	久米庭田町	165	44.0	公	試掘			
86	祝谷東町乙771-2外	1,043	82.0	私	踏査			
87	南久米町770-1、771	1,945	37.5	私	試掘	柱穴他	鍍金三脚	本格調査要
88	山越1丁目588-1	700	19.1	私	試掘			
89								
90	谷町甲745-5	304	35.1	私	試掘			
91	枝松6丁目58	319	26.3	私	試掘			
92	南江戸6丁目1313-1	1,068	15.0	私	試掘	柱穴他	鍍金三脚	本格調査要

平成4年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧

(4)

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・透構	遺 物	備 考
93	今在家町302-1	1,148	30.9	私	試掘			
94	若草町8-2	2,218	24.2	私	試掘			
95	南江戸5丁目729	2,168	13.5	私	試掘	上塙	瓦器・土器等	本格調査要
96	上野町甲792	2,000	56.4	私	試掘			
97	米住町460-1	111	38.0	私	試掘			
98	桑原4丁目8-36	403	38.4	私	試掘			
99	南久来町乙1~3	279	48.0	私	試掘			
100	北斎院町229-2外	919	8.7	公	試掘			
101	道後北代6-4	317	31.6	私	試掘			
102	安城寺町717-1	317	6.7	私	試掘			
103	北斎院町255-1	326	11.2	私	試掘			
104	姫原1丁目甲62-1	782	40.0	私	試掘			
105	廣子町47-2	472	43.0	私	試掘			
106	北久来698-1、700-1	80		私	立会			
107	星岡町659外2筆	500	28.6	私	試掘			
108	星岡町658、670-1	500	28.6	私	試掘			
109	平井町甲477-2	430	80.2	私	試掘			
110	水沢町1158-3	274	61.3	私	試掘			
111	小坂4丁目399-1	789	25.1	私	試掘			元年度調査済み
112	星岡町595-3外	1,702		私	試掘			
113	桑原2丁目836-1外	906	33.6	私	試掘			
114	道後一萬9-57	145		私	試掘			
115	星岡町594-1、595-1	842		私	試掘			
116	天山町9-2	244	22.9	私	試掘			
117	山越1丁目11-22	332	18.4	私	試掘			
118	山西町1408-2	685	14.2	私	試掘			
119	南上居町153	836		私	未			
120	衣山3丁目388-1	183	21.1	私	試掘			
121	上伊台町1172-4	180	146.2	私	試掘			
122	緑町1丁目4-4	119	30.7	私	試掘			
123	平井町1439-2	62		私	未			
124	桑原4丁目878-9	132	38.5	私	試掘			
125	桑原4丁目407-2外	340	38.3	私	試掘			
126	水沢町333-236	175	50.2	私	試掘			
127	水沢町333-237	242	50.3	私	試掘			
128	安城寺町1624-1外	314	3.1	私	試掘			
129	天山町76-7外	791	20.0	私	試掘			

平成4年度 松山市埋蔵文化財本格調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査目的	時代
228	影浦古墳	山越3丁目752-1外100筆	緊急	弥生~古墳
229	古川遺跡8次調査	南江戸4丁目1-1	緊急	弥生~近世
230	来住庵寺19次調査地(1区~3区)	来住町844の東部を除く	緊急	弥生~奈良
231	道後今市9次調査地	道後北代1272-1	緊急	中世
232	来住町遺跡4次調査地	来住町524-1	緊急	古墳
233	南久米町遺跡	南久米町419-10、420-1	緊急	古墳~中世
234	鷹子新畑遺跡2次調査地	鹿子町628-1	緊急	古墳~弥生前・中期
235	南久米町遺跡2次調査地	南久米町408-5外	緊急	中世
236	来住庵寺19次調査地(4区)	来住町844の東部	国補	弥生~奈良
237	来住庵寺20次調査地	来住町603-2、6	緊急	弥生前期~弥生中期
238	タンチ山古墳	鹿子町200-1	国補	古墳後期
239	樽味4反地遺跡2次調査地	樽味4丁目216	国補	古墳
240	樽味4反地遺跡3次調査地	樽味4丁目216	緊急	弥生~古墳
241	北久米淨蓮寺3次調査地	北久米町671-1外8筆	緊急	古墳~中世
242	南久米町遺跡3次調査地	南久米町408-6の一部	緊急	中世
243	中村耕田遺跡	中村2丁目123-1外3筆	緊急	弥生後期
244	松山大学構内遺跡3次調査地	文京町4-10	緊急	弥生~中世
245	久米庭田森元遺跡3次調査地	久米庭田町856-1	緊急	弥生~古墳
246	東山古墳群6次調査地	東石井町2-9外	緊急	彌文~古墳
247	北斎院地内遺跡2次調査地	北斎院町219-1	緊急	中世
248	来住庵寺21次調査地	来住町575外2筆	学術	弥生~奈良
249	古原遺跡9次調査	南江戸4丁目1-1	緊急	弥生~古墳中期
250	桑原田中遺跡2次調査地	桑原6丁目520外2筆	緊急	弥生~古墳、中世
251	上野遺跡	上野町756外	緊急	

主な遺構、遺物等	対象面積(m ²)	屋外調査期間	No.
土壙、古墳、弥生、土師、須恵、玉類、埴輪	26,939	H4. 4. 1~H5. 3. 31	228
自然堤防、水田、掘立柱建物跡、縄文、弥生、土師	7,200	H4. 4. 1~H5. 3. 31	229
掘立柱建物、土壙、弥生、土師、須恵	624	H4. 4. 9~H4. 9. 30	230
人、牛足跡、溝、柱穴	641	H4. 4. 9~H4. 7. 3	231
須恵器、土師器	988	H4. 4. 15~H4. 4. 30	232
掘立柱建物跡、須恵、土師	1,000	H4. 5. 28~H4. 8. 7	233
周溝状遺構、土壙、竪穴住居址	1,800	H4. 6. 10~H4. 8. 20	234
柱穴、溝、貸鉢	287	H4. 8. 1~H4. 9. 22	235
同様状遺構付西南門跡	390	H4. 8. 3~H5. 1. 31	236
周溝状遺構、弥生、須恵、土師	540	H4. 8. 4~H4. 10. 13	237
埴輪	265	H4. 8. 20~H4. 10. 16	238
掘立柱建物跡、竪穴住居址、弥生、土師、須恵	300	H4. 9. 1~H4. 11. 13	239
竪穴住居址、土壙、分鏡形土製品、弥生、須恵	163	H4. 9. 1~H4. 11. 13	240
掘立柱建物跡、竪穴住居址、土師、須恵	6,527	H4. 9. 16~	241
掘立柱建物跡、土壙、土師、陶器	416	H4. 9. 24~H4. 10. 30	242
柱穴、杭列、土壙、弥生	331	H4. 10. 1~H4. 11. 17	243
竪穴住居址、掘立柱建物、弥生、須恵、土師器、銅鏡	1,600	H4. 10. 26~H5. 5. 15	244
掘立柱建物、溝、弥生、須恵、土師、瓦	902	H4. 11. 1~H5. 2. 26	245
土壙墓、古墳、縄文、弥生、土師、須恵	1,100	H4. 11. 1~H5. 3. 31	246
掘立柱建物、土壙墓、土船、陶磁器	996	H4. 11. 16~H5. 2. 8	247
土壙、柱穴	540	H5. 1. 5~H5. 3. 31	248
祭祀遺構、河川、石包丁、弥生、土師	1,200	H5. 2. 8~H5. 3. 31	249
溝、掘立柱建物跡	798	H5. 3. 1~H5. 5. 22	250
	2,400	H5. 3. 8~	251

*No.241、251は平成3年5月31日現在調査中。

*No.240、241、244、250、251は次回年報掲載予定。

出土遺物整理事業・報告書作成事業

遺物に関する保存処理

担当：池田 學

財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターでは、松山市教育委員会に所属した過去20数年間の調査によって検出された木製品、鉄製品等について平成元年10月より保存処理を実施している。

木製品は、合浸装置250型・170型のふたつの処理槽に入れ、PEG4000を少しづつ溶かして木材内部の水分を除去し、PEGに置き換えていくPEG含浸法を用い、その後エアーシーリング式シーラーによりビニールパウチに密封する保存処理方法をとっている。

鉄製品については、鉄錆の表面削り取り調整ののち、デシケーターによる真空合浸装置で鉄器を強化するための処理を施し、当埋蔵文化財センター手作りのアクリルケースにシリカゲルを入れて保存している。なお、銅鏡、銅鏡等、特に貴重な遺物と認められるものに関しては、韓元興寺文化財研究所等の機関に保存処理を委託している。

平成4年1月から同5年3月までの間に遺物を保存処理した遺跡は、次のとおりである。

- 木製品保存処理：来住庵寺17次調査・古照ゴウラ遺跡4次調査・古照遺跡6次調査
- 鉄製品保存処理：東山古墳群4・5次調査・影浦谷古墳・南久米町遺跡2次調査・北久米町屋敷遺跡・朝日谷古墳1号墳・櫻現山古墳・久米高畠遺跡4次調査・客谷古墳1号墳

遺構・遺物等に関する図面整理

担当：松村 淳

昭和40年代から現在までに松山市教育委員会と財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが発掘調査した遺跡は、200件を越している。諸般の事情により、その報告書の刊行は今日まで半数にも至っていない。こうした未整理のまま残存する図面等を整理し、報告書として記録にとどめ広く世に報らしめるための作業を実施している。具体的には、各調査現場で測量した図面や出土した遺物の実測図について、報告書作成のための図面合成・トレースをはじめとして図面台帳の作成、実測図の作成・修正等の整理作業を行っている。

平成3・4年度は、「桑原地区の遺跡」をはじめとして33遺跡（下記のとおり）10冊の報告書刊行のための作業を実施した。

- 報告書刊行遺跡：祝谷アリ遺跡・樽味立派遺跡・樽味高木遺跡・樽味四反地遺跡・桑原西稻葉遺跡1、2次調査・桑原田中遺跡・経石山古墳・枝松遺跡3次調査・鷹子町遺跡・久米窪田古屋敷C遺跡・来住町遺跡1、3次調査・久米高畠遺跡8次調査・文京遺跡2、3、4、5次調査・朝美澤遺跡・辻町遺跡・道後今市遺跡6、8次調査・道後樋又遺跡2次調査・祝谷本村遺跡・かいなご3号墳・平井谷1号墳・山越遺跡1、2、3次調査・久万ノ台遺跡・野津子山遺跡・影浦谷古墳・古照遺跡6次調査

平成 4 年度 松山市埋蔵文化財本格調査位置図



平成 4 年度
啓蒙普及事業

平成4年度の啓蒙普及事業

当埋蔵文化財センターは、松山市内における埋蔵文化財の発掘調査・研究及び資料の整理・保存・収蔵を行うとともに、附属の考古館において、地域文化の発展・向上並びに、調査研究活動の振興を図ることを目的として設置されたものである。

この考古館は、研究者のための研究機関としてだけではなく、一般市民や観光客が気軽に憩いの場として利用でき、かつ児童生徒の課外学習の場としての役割をも担っている。その為考古館は、発掘調査と一連の流れで展示、教育普及、広報・出版、収集・保管活動を行う。

1. 展示活動

展示は、常設展・特別展・企画展・発掘速報展・収蔵品展などからなり、常設展以外は、目的に応じて期間を限り随時開催している。これらの展示会を開催することにより、常設展示を補完したり、また最新の調査成果を導入することによって、観覧者を飽きさせない展示を心がけている。

また、平成4年度には常設展の充実と、観覧者の埋蔵文化財に対する正しい知識の獲得を目的として、来住台地模型の修復を業者に依頼した。

①常設展

常設展は、海を媒体とした文化交流の中継地点としての伊予文化の独自性と、そこに生きた人々の姿を解明することを基本コンセプトとしている。また「見る」「聞く」といった静的な展示だけではなく、「触れる」「考る」という動的で、かつ立体的な展示を心がけている。展示室には、松山平野で出土した考古資料約8,200点を系統的に展示している。

②特別展

特別展は、ひとつのテーマのもとに県内外から資料を借用し、一定期間内で展示を行うものである。平成4年度は、弥生時代の船の絵画土器を主要な展示物として「弥生時代の海上交易～瀬戸内海における物と人の流れを探る～」を開催した。

③企画展

企画展は、地域を限定して市内における地域色を探ろうというものである。基本的には県内の資料で構成される。平成4年度は「古代の桑原～弥生・古墳時代の集落を中心にして～」と題して開催した。

④発掘速報展

発掘速報展は、相次いで発見される重要な遺跡・遺物を速報的に紹介したり、また年度ごとに主要な遺跡・遺物を写真やイラストを交えながら紹介するものである。平成4年度は2度開催し、前年度に発掘調査された7遺跡を紹介する「むかし・昔のまつやまを掘る」と、樽味高木遺跡3次調査で発見された絵画土器などを「弥生時代の船～絵画土器から弥生時代の海上交通を探る～」と題して速報的に展示した。

⑤発掘写真展

発掘写真展は、発掘速報展において展示した写真パネルを、市庁舎本館1階ロビーに場所を移して、広く一般市民に観覧していただくものである。平成4年度は、「むかし・昔のまつやまを撮る」と題して行い、初めての試みであったが、好評を得た。

⑥収蔵品展

収蔵品展は、館内に収蔵している資料を紹介するものである。これまでに発掘調査によって出土した資料のほか、新たに寄贈・寄託された資料を展示することもある。

⑦夏休み体験学習セミナー作品展

夏休み体験学習セミナー作品展は、夏休み期間中に小学5・6年生を対象に行った体験学習セミナーで製作した作品を展示するものである。平成4年度は、「小学生が作った縄文土器作品展」と題して行った。

テ　ー　マ	会　期	会　場	入館者数
発掘速報展 「むかし・昔のまつやまを撮る」	平成4年4月25日㈯～5月24日㈰	特　別　展　示　室	2,413人
発掘写真展 「むかし・昔のまつやまを撮る」	平成4年6月10日㈪～6月30日㈬	市　庁　舎　本　館 1　F　ロ　ビ　ー	_____
発掘速報展 「弥生時代の船 ～縄文土器から弥生時代の海上交通を探る～」	平成4年7月5日㈭～7月22日㈭	エントランスホール	479人
夏休み体験学習セミナー作品展 「小学生が作った縄文土器作品展」	平成4年8月5日㈯～8月30日㈰	特　別　展　示　室	684人
企画展 「古代の桑原 ～弥生・古墳時代の集落を中心にして～」	平成4年10月24日㈯～11月29・30㈰	特　別　展　示　室	1,318人
特別展 「弥生時代の海上交易 ～瀬戸内海における物と人の流れを探る～」	平成5年2月20日㈯～3月21日㈰	特　別　展　示　室	2,875人

⑧来住台地模型修復

平成元年10月の開館以来、常設展では一部を除き、ほとんど展示替えを行っていない。これは開館前からの方針であり、できる限り市民のニーズに応えることができるよう常設展以外の展示会を充実させるよう努めている。

しかし常設展示基本構想の段階から、常設展の「⑩久米郡の役所と来住庵寺」コーナーでは、来住台地模型全体を16ブロックに分割し（1ブロックはW750×H750mm）、開館後に発掘調査の進展に伴い修復箇所を含むブロックのみを修復ができるよう工夫している。

平成4年度は、来住庵寺周辺の2ブロック6箇所を修復した。製作は館建設時の展示業者である株京都科学に依頼した。今後も、数年に一度模型を修復する必要がある。

2. 教育普及活動

教育普及活動としては、一般市民対象のものと、研究者を対象としたものがある。考古学は、往々にして研究者のみの学問と考えられがちであるが、広く一般市民に資料や情報を公開することにより、埋蔵文化財保護の思想をより一層深めてもらうことに目的がある。

①講演会

前述の発掘速報展・企画展・特別展の開催を記念して、合計5回の講演会を開催した。発掘調査報告会は、発掘速報展の開催にあわせ、現場担当者合計4名にスライドを交えながら現場の状況報告を行った。

企画展記念講演会は、企画展「古代の桑原～弥生・古墳時代の集落を中心にして～」の開催にあわせ、桑原・櫛味地区を集中的に発掘調査している現場担当者に、当該地区の弥生・古墳時代における集落構造などについて開講した。

特別展記念講演会は、特別展の開催にあわせて開催しているが、平成4年度は特別展「弥生時代の海上交易～瀬戸内海における物と人の流れを探る～」の開催にあわせ、2人の研究者に講演をお願いした。

テ　ー　マ	日　時	会　場	講　師	聴講者数
発掘調査報告会(1) 「むかし・昔のまつやまを語る」	平成4年4月25日㈯	講 堂	当センター調査員 当センター調査員 栗田 茂敏 栗田 正芳	73人
発掘調査報告会(2) 「むかし・昔のまつやまを語る」	平成4年5月2日㈯	講 堂	当センター調査員 当センター調査員 梅木 謙一 西尾 幸則	82人
企画展記念講演会 「弥生・古墳時代の集落の変遷」	平成4年10月24日㈰	講 堂	当センター調査員 梅木 謙一	97人
特別展記念講演会(1) 「瀬戸内の商人と海域」	平成5年2月20日㈯	講 堂	愛媛大学法文学部教授 下條 信行	212人
特別展記念講演会(2) 「絵画土器から弥生文化を復元する」	平成5年3月6日㈯	講 堂	奈良県教育委員会文化財保存課主査 横本 裕行	150人

②調査・研究会

発掘調査方法や報告書作成のために各分野の第一人者を招へいし、助言を頂き、職員の資質向上を目指した。今年度は2人の研究者に招へいの機会を得て、講演をお願いした。

テ　ー　マ	日　時	会　場	講　師	聴講者数
遊牧民族のクルガン調査とその問題点	平成1年10月14日㈬	講 堂	名古屋大学助手 村上 春通	22人
古墳遺跡と保存科学	平成4年10月19日㈪	講 堂	京都芸術短期大学講師 高妻 洋成	17人

③夏休み体験学習セミナー

市内の小学5・6年生を対象に、夏休み期間中を利用して体験学習セミナーを開催した。これは、子供たちの社会科学習の一助とするだけではなく、自主性と創造力を養うことをねらいとしている。

平成4年度は「縄文土器をつくろう」と題して、土器成形（7月25日）と焼成（8月1日）の2回開催した。子供たちに縄文土器の製作を通して、古代人の知恵や苦労を学んでもらった。

テ　ー　マ	日　時	会　場	講　師	参加者数
夏休み体験学習セミナー 「縄文土器をつくろう」	平成4年7月25日㈯ 8月1日㈰	講堂・ 屋外	当館職員	68人

④発掘調査体験学習

開館以来初めての試みとして、松山市立東中学校郷土クラブの依頼を受けて、2日間発掘調査の体験学習を行った。これは、夏休みを利用して実際に発掘現場に立ち、作業員と一緒にになって発掘調査のノウハウを教わり、また整埋作業に至るまでの一連の流れを知ることにより、埋蔵文化財に対して、より一層の理解をしていただこうという試みである。

現　場　名	日　時	参　加　者　名・数
来住庵寺20次遺跡	平成4年8月20日(木) 21日(金)	松山市立東中学校郷土クラブ 引率者1名、生徒6名

⑤遺跡めぐり

平成4年度から新しい試みとして、以前より要望が強かった遺跡めぐりを実施した。これは、参加者に地域の埋蔵文化財を身近に感じていただくことを目的としており、第1回目として、久米地域に所在する古墳を中心見学した。なお、次年度以降は、年2回開催の予定である。

テ　ー　マ	日　時	主　な　見　学　先	参　加　者　数
遺跡めぐり 「むかし・昔のまつやまを歩く」	平成4年11月25日(土) 9:30~15:30	経石山古墳・来住庵寺跡・波賀部神社古墳・ 八ツ塚古墳群等	40人

⑥まいぶん映画会

まいぶん映画会は、一般観覧者を対象とした映画会である。開館以来、毎週日曜日及び祝祭日の午後1時と3時の2回上映しているため、通算で200回以上を数えている。上映するビデオの内容は、考古学関係のわかりやすいアニメーションから専門的なものまで幅広い。

3. 広報・出版活動

広報・出版活動としては、当館主催の展示会・講演会などを開催する際に、多くの観覧者を募るために出版物を発刊したり、発掘調査を行った遺跡の記録保存の報告として、発掘調査報告書を刊行している。研究者はもとより、一般市民においても、これらの出版物を大いに活用していただくことで、埋蔵文化財保護の啓蒙普及に役立つものと思われる。

①発掘調査報告書

図書名	発行日	対象	版型・頁	部数
松山市文化財調査報告書28 文京遺跡第一第2・3・5次調査	平成4年8月	一般	B5・187頁	1,000
松山市文化財調査報告書29 朝美澤・辻町遺跡	平成4年8月	一般	B5・121頁	1,000
松山市文化財調査報告書30 道後城北遺跡群	平成4年8月	一般	B5・129頁	1,000
松山市文化財調査報告書31 かいなご3号墳・平井谷1号墳	平成5年2月	一般	B5・82頁	1,000
松山市文化財調査報告書32 山越・久万ノ台遺跡	平成5年3月	一般	B5・129頁	1,000
松山市文化財調査報告書33 影浦谷古墳	平成5年3月	一般	B5・104頁	1,000
松山市文化財調査報告書34 来住庵寺第15次遺跡	平成5年3月	一般	B5・142頁	1,000
松山市文化財調査報告書35 古照遺跡第6次調査	平成5年3月	一般	B5・205頁	1,000
松山市埋蔵文化財調査年報IV (平成3年)	平成4年8月	一般	B5・134頁	1,000

②展示会関係出版物

図書名	発行日	対象	版型・頁	部数
発掘調査報告会(1)資料	平成4年4月	一般	B4・7頁	100
発掘調査報告会(2)資料	平成4年5月	一般	B4・9頁	100
発掘調査報告会リーフレット	平成4年7月	一般	B5	600
夏休み体験学習セミナー パンフレット	平成4年7月	参加者	B5・12頁	100
企画展リーフレット	平成4年10月	一般	B5	5,000
企画展記念講演会資料	平成4年10月	聴講者	B4・10頁	170
企画展パンフレット	平成4年10月	一般	B5・19頁	500
遺跡めぐりパンフレット	平成4年11月	参加者	B5・11頁	40
特別展図録	平成5年2月	一般	B5・36頁	500
特別展ポスター	平成5年2月	一般	B2	500
特別展リーフレット	平成5年2月	一般	B5	5,000
特別展記念講演会(1)資料	平成5年2月	聴講者	B4・7頁	250
特別展記念講演会(2)資料	平成5年3月	聴講者	B4・3頁	250

4. 収集・保管

開館以来、一般の篤志家から考古資料及び関連の資料の寄贈・寄託を受けている。それらの中から一定期間、常設展示室の一角で順次展示している。ただし、他機関などから寄贈された一般図書は割愛した。

① 資料の寄贈

資料名(器種)	数量	出土地	備考
陶質土器(長頸壺)	1	松山市小野周辺	
平形銅劍	1	宇和町清沢遺跡	
弥生土器(広口壺)	1		
弥生土器 (甕) (鉢) (器台) (支脚)	6 (1) (1) (1) (3)	松山市若草町	うち1点に指紋 痕跡あり
16ミリテープ スクラップブック	6 1	古窓遺跡関係	
弥生土器(長頸壺)	1	松山市城山北麓	
縄文土器 同上	2 10	上浮穴郡上黒岩岩陰遺跡 南宇和郡御莊町平城貝塚	
磨製石斧	3	同上	
打製石錐 同上	4 2	同上 松山市谷田池	
同上	11	埼玉県秩父市柳田遺跡他	

資料名(器種)	数量	出土地	備考
須恵器	24	松山市北谷王神ノ木古墳	
(环蓋)	(6)		
(环身)	(7)		
(蓋)	(2)		
(有蓋短頸壺)	(3)		
(短頸壺)	(2)		
(提瓶)	(2)		
(広口壺)	(1)		
(短頸壺)	(1)		
土師器	1		
(広口壺)	(1)		
鉄器	13		
(鉄鎌)	(5)		
(鉗)	(1)		
(刀子)	(3)		
(鑿)	(1)		
(鉄斧)	(2)		
(鎌)	(1)		
馬具	1		
(轡)	(1)		

② 資料の寄託

資料名(器種)	数量	出土地	寄託期間
平形銅劍	2	松山市道後極又遺跡	平成元年10月14日～ 2年10月13日
須恵器(鈴付長頸壺)	1	伝松山市天山	平成元年10月12日～ 6年10月9日
人物埴輪頭部	1	伝熊本県	平成2年4月1日～ 7年3月31日

松山市考古館 月別入館者数調べ

平成4年度（平成4年4月1日～5年3月31日）

月	開 館 日	一 般 人	先 生 徒	団 体 一 般	団 体 先 生 徒	老 人	小 中 高 生 等 及 別 入 館 者	特 別 入 館 者	入 館 者 合 計	-日平均 入 館 者
4	25	307	196	88	7	30	664	73	1,365	55
5	27	322	203	15	27	98	1350	90	2,015	78
6	25	125	79	159	112	89	77	0	641	26
7	27	219	118	178	24	46	276	123	984	36
8	26	338	273	130	21	30	24	0	816	31
9	24	200	161	214	0	31	17	0	623	26
10	27	179	69	243	35	349	908	91	1,874	69
11	24	290	110	289	0	114	11	32	846	35
12	23	111	25	33	0	0	208	0	377	16
1	23	130	54	0	0	4	0	0	188	8
2	23	247	51	87	68	6	291	231	981	43
3	26	283	119	59	126	144	1800	169	2,700	104
計	300	2,751	1,458	1,495	420	941	5,626	809	13,500	45



写真1 発掘速報展「むかし・昔のまつやまを振る」



写真2 夏休み体験学習セミナー「縄文土器をつくろう」



写真3 遺跡めぐり「むかし・昔のまつやまを歩く」

松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ

平成5年10月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790 松山市二番町4丁目7-2
TEL (0899) 48 6605

財團法人 松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (0899) 23-6363

印刷セキ株式会社
〒790 松山市湊町7丁目7-1
TEL (0899) 45-0111

